

● HAIKU200101sonoi

産土の鳩踏み歩く総落葉

また風に吹き戻さるる落葉あり

我も亦年金暮し浮寝鳥

櫛どちすつからかんとなり日向

一遍像

凧に杖を進むる旅聖

聖樹の灯何か恋しく街に出る

梟の年金暮らし板に付き

年金のやりくりに馴れ師走妻

通院や空風に背を押されゆく

油揚げに狐化けたり小六月

さるお方に

虚子嫌ひ枸杞煎ずれば治るべし

冬珊瑚よりも明るき妻ありて

この黝きをねずみの糞とはよう云ふた

一氣に来る日暮れねずみのこまくらに

葛湯溶き年金ぐらし長丁場

丸菓の色もとりどりクリスマス

金銀の持病の菓クリスマス

鴛鴦は分に過ぎたる晴着被て

歳末（くれ）に読む末廣酒造奮闘記

しんしんと暮れ来て鴉のなりひそむ

隙間風住宅ローン了る家

裸木に属して大き洞持つ木

一条の朝日机上に冬ごもり

一步外（と）に踏み出し対す冬將軍

歳晩の人を通じて頼み事

読みさして聴ける凧挿話めき

松隆と樟隆々と十二月

振り込まる年金の額十二月

階段に寄せて物置く十二月

人波の奔流に入る十二月

鉛筆をまとめて削る十二月

胸内に彼の人還る十二月

一茶忌の小遣い少なくなりにつけり

風聴いて早寝決め込む一茶の忌

一茶忌を出て直ぐ戻る風の中

一茶忌の瓦に差せる薄日差し

一茶忌のもう職無くて素浪人

一茶の忌我が道暮れて日遠し

自転車のベルに追い立てられ師走

自転車の肩掠めゆく街師走

立て込める国道凧横なぐり

稿継ぐに頭寒足熱冬机

嘗て吾に御用納めの日のありし

退職と書込みのある曆古る

職引くは昨日の今日や龍の玉

暖房を逃れし顔に外気夜気

蓑虫の今日は温しと不審顔

蟹しゃばてん咲き溢る花灯まみれに

冬薔薇高尾太夫の気っ風もて

一薔薇昼月恋ふて長けに長け

洞櫛枯るる胴体覗かるる

ぐぐぐいと胴体捻り冬櫛

蝦蛄葉仙人掌あちこち傷みそめし家

歳晩のスマトラカレーに腹温む

師走妻算盤尽のお買物

出不精の手抜きついでに年用意

玻璃磨きまがりなりにも年用意

怠けごころふるいたたせて賀状書く

葉蘭打ち冬至を明日の夜の雨

夜に入りて一降りありぬ枯木雨

湯を浴みて妻もようやく冬至顔

黒豆の煮方のはなし暖房車

枝先に未だ日の差せる冬至かな

冬至の日隣家二軒の間（あはひ）より

はすかひに一鳥飛んで冬至空

手術痕改め入る冬至風呂

浪々と五体柚子湯にたゆたはせ

久に聞く犬の遠吠え冬至風呂

冬至湯にびりびり痺る指の先

鬼柚子をこづき湯舟に長居せり

数え日の小遣いはたき買へる本
本買えと師走ごころが頭を擡ぐ
数え日を屑籠に日の当たる部屋
数え日のおやつ下町コッペパン
数え日の蓬莱島に亀眠り
数え日の後引く鉛に本を読む

年用意吾等年金生活者

そこそこの年金使ひ年の物

東京に一度出てきり冬籠

職引いて

人ごとの御用納の日となれり

煤籠関所破りのごと出づる

川幅に差す日いっぱい冬鷗

輪飾りのほろと吹かるる街に出づ

毎度のこゑを連発年の市

暮市の露地にごりつと八頭

鮫鱈の肝のしつかりせるを買ふ

暮市に売らるる海鼠ふて寝して

暮市のバケツに泳ぐ活どぜう

年の瀬の潮引き込んで町の川

生き残り公設市場海鼠売る

飾売小屋建ちいつもの風の辻

消えぎわを妻と見守る冬茜

鉢植えの観音竹に年の塵

ぐい呑み買ふ師走ごころに誘はれて

煤の日を旅の顔して書店まで

夫婦して磨く玻璃戸の年の塵

煤掃きの玻璃戸挟みて妻と我

煤の日の妻の届かぬところ拭く

煤の日の窓拭き少々手抜きせり

煤掃きの煙草の脂（やに）をまざと見せ

煤払ひ危ふき椅子の上り下り

煤払ひ生返事して手伝はず

煮物の香家中に満つ小晦日

梅型どり慈姑にきざみ入れにけり

莫迦たれの俳句三昧年も暮れ

下田稔殿

年忘れ黄泉にも句会あるならむ
俳句莫迦通す一年亦過ぎて
大鳥居大注連縄の飾りつけ

年逝くと宿木月に独りごつ

昼月の高みに佇ちて宿木は

宿木に雀睦める大冬木

宿木の上に宿木年の空

宿木を数え直せり年の空

浄闇に年の火爆ぜぬたて続け

幾星霜もちこたふ家と年越せり

年金を貰ひ初めたる年も果つ

のぼらねばならぬ六十路の年の坂

ここからは少しきつめの年の坂

職引いて年の湊に停泊す

冬乗り切る根性が見え癩瘤

山茱萸の冬芽ぐらつく突風に

大年の日の没る方に亀の首

大つごもり没る日を亀と見送りて

ままならぬ句作り一年棒に振る

逝く年の背をとんと突き鐘一打

逝く年の近道探しゐるごとし

去ぬ年の衣擦れの音聞よりす

掛布団脂肪の落ちし身を丸め

大つごもり迎へて駄句の詠み納め

来年にせむと持ち越すことあまた

明日明日と云ひ来し年も押し詰り

宿題を抱へて年の行きどまり

今年得し佳句雀の涙ほど

書きかけの返信抱へ年を越す

マイペース守りし年も逝かむとす

新年

年明けの定年といふ大海原

亀のごと気長気儘に年過ごさむ

不景気な年に向ひて物申す

来ん年も雑事に力削がれまじ

なんとなく迎ふる年も六十路入

念を押し歳徳神に頼み事

初雀産土に来て何漁る

走り根と一問一答初雀

俳句莫迦ばかり集り初句会

くちなしの実に染む慈姑初笑ひ

太箸に昔をしのぶ語り口

亀の子の首をぬうつと二日かな

有り余る時間とたたかふ夢始め

初夢に昔のヨイトマケの唄

途中から怪しくなりぬ初夢譚

雲掴むやうな初夢報恩譚

定年余生

海原に抛り出されて年の舵

忘恩の数々年の返るたび

一人づゝ逝かせる年の経巡りて

鏡餅廁の坐りごちかな

新年の縦一文字ポプラ道

行く方を定めず東風の吹ける道

自転車ひゅつと打ち過ぎ早や四日

その他

藪からし簪さすは女郎めく

そら豆に祭ごころの酒すすむ

漁始めインターネットてふ海に
円空の出遁読み初め「崎人伝」
年返る相模の國の空鳴りて

新幹線

新幹線駅前立つ大門松
初刷の新聞拡げ読む車中
初夢の続き辿らん旅車中
相模より美濃へ年頭飾る旅
年頭の雲一つなき美濃に入る
厚着して達磨まがひの東京者
美濃紙の美濃に雪降る頃訪ふて
飛驒一円大雪報の出る旅路
美濃衆と駅で落合ひ初吟行
先生の頭（つむり）つつめる毛糸帽
枯山の枯れの及べる大頭
初旅の駅で落ち合ふご常連

峠越え

美濃柿の蒂ばかりなる村の空
郡上過ぎ雪は本降りどんどこと
宿木に飛雪張りつく峠越え
次ぎから次ぎ飛雪張りつく杉の幹
厚着して東京者が飛驒に入る
峠越ゆ雪に勢ひ飛驒に入る
白樺の生（き）の色しかと雪中に
すっ飛んで横一文字飛驒の雪
葉の反りのくるりくるりと枯櫟

莊川

熊笹の首を擡ぐる雪の原
吹かるるは何んの蔓もの雪の原
雪原の風に蔓もの吹かれづめ
雪林の上にぽってり一日輪
顔搏ちに莊川村の雪小僧
雪原においてきぼりのごと一戸
檜・松・ねずこに雪の降りつもる

なほ積もる雪に熊笹組み伏せられ
雪かむりいたいたさうな山茱萸の実
雪林に突っ込む山のつむじ風
地吹雪の吹きつけし跡杉幹に
雪中に奇々怪々の一立木
檜より檜に落つる谿の雪
マンモスの棲みぬし湖底雪降り
雪原につんとイちたる萱いっぽん
雪こんこん莊川桜降り込めて
雪積みてオブジェのごとき一立木
犬も馳せ莊川の子の橇遊び
東京者飛雪に縮み上がりけり
きりもみに檜の雪を落とす風
谷底に降り込む飛驒のまさら雪
杉叢に張り付く飛驒の山の雪
雪虫の湧いて莊川上部落
雪虫がすうつと飛驒の曇り空

白川郷

雪搔ける酒屋の亭主赭ら顔
雪小僧風に乗り来る白川村
軒つらら灯点し頃を宿に着く
暮れ早む雪に弾みのつきにけり
村長の家の極太軒つらら
目の覚めるやうな山雪初国旗
凍み柿に高低（たかひく）ありて音符めく
白川村束ねし萱に雪積もる
凍み柿を駈りに飛驒の雪と風
谷底の一集落を埋め飛雪
飛雪に哭くごとしひよどりじょうこの実
谷底の集落が見ゆ飛雪の隙
屋根の雪下ろせる人を子犬見て
雪纏ふ容いろいろ雑木林
雪庇もう一息でおつる形（なり）
雪女郎夢見ごちの除雪なる
白川郷雪降り積もり模型めく
太注連の形に波打ち積もる雪
ぶすぶすと雪を踏み来て初詣
望む山檜の上ぐる雪けむり

雀らに雪をかむりし畑の柿
凍み柿に楊枝が程の細氷柱
木瓜の実の雪にくすみてなまり色
凍み柿の鳥もつつかぬ檜皮（ひわだ）いろ
雪明りひよどりじょうごの実を透きて

産土の鳥居に積もる雪の反り
山村の杉間杉間に積もる雪

民宿

二夕宿に分かれて泊まる二日かな
目覚めみて氷柱の落つる音の中

白川郷雪積む夜のもろみ酒

雪囲せる家に泊りもろみ酒

真夜かけて簪萱に積もる雪

棟萱の一夜に積める郷の雪

簪萱雪を化粧ふて村の空

弾き初めに瞽女のもたらすおけさ節

美濃衆とどぶろく酌んで飛驒泊り

夜を籠めて萱の葺面（つら）もがり笛

たそがれの簪萱に雪打ちつけ

白川村夜陰につらら落す音

雪隠の窓より入る隙間雪

外（と）は吹雪く日なれば熊の穴籠り

床につく東京者にしづる雪

吹雪く夜をねんねんころりもろみ酒

炬燵して飛驒談義一トしきり

どぶろくに酔ふて凭れる煤柱

飛驒鰯に舌鼓打つ櫓の宿

どぶろくに白川の夜を更しけり

七福神

春駒の昨日廻りし村に泊つ

こきりこもて宿の女将の踊り初め

もてなしに正月舞ひのすりささら

民宿の女将弾き初め古大尽

棟萱に廻りの山に雪が降る

美濃衆と飛驒に旅してどぶろく酌む

しづり雪相次ぐ中に村明けぬ

しづり雪どさと合掌造りかな

しづり雪ありて目覚めぬ白川村

しづり雪躰びたりと止みにけり
屋根雪のしづる音聴き夜の白む
語り部のごとく山家に積もる雪
櫓の宿更けてどぶろく談義かな

高山

美濃衆と飛驒に遊びて朴葉みそ

飛驒蕎麦に三日の舌を鳴らしけり

飛驒牛を焙れば雪は本降りに

壁沿ひに雪の降り込む屋台倉

餅花のほとりに積まる土産物

寒鯉の頭上に雪の降り止まず

高山の雪降る街の消火栓

雪明り一位細工の翁面

小振りなる飛驒の蕎麦屋の団子花

初売りのさるぼぼ小を選びにけり

朝市の済む川端に新らの雪

正月の雀啄む一位の実

飛驒の雪祭ごころを眠らせて

屋台倉に屋台眠らせ積もる雪

初商円空さんのまがひもの

あをあをと杉玉商ひ初めかな

注連の青杉玉の青商初め

上川原町の屋台台紋は大黒台なれば

春著被て大黒台の上川原

台紋の雪に浮き頭つ屋台倉

高山の雪まみれなるいかだ橋

雪降り大黒台の屋台倉

赤み帯ぶ味噌樽据えて初商

三日の雪払ひて高山陣屋前

杉玉に用水の鳴る二日かな

観世流謡本並め初商

絡繰人形（からくり）が客を呼び込む初商

秋葉さま軒に打据え初商

糶屋の鉢の植木に被せ物

雪乗せてお餅のやうな積石

平湯温泉

飛驒に入る積雪予報どおりかな

アノラック叩ける飛驒の雪の音
奥飛驒の木々に張り付く雪の音
灯が点いて朴の木平スキー場
木々落とす雪受止めて谷の木々
二日も雪三日も雪の飛驒泊り
年の宿大さるぼぼに迎えられ
床暖房張り巡らせる宿に泊つ
細雪飛驒の山水富ませけり
猫岳の晴れて雪煙上げにけり
夜は更けて水仙かほる宿の廊
奥飛驒の雪気骨まで凍む旅路
旅先の初湯に浸かる布袋腹
ほてい腹湯舟に沈め雪の宿
初旅の夕餉に鰯の糍びき
ぷりぷりの数の子が出て宿の膳
水仙の一輪挿しのにほふ廊
高砂の翁のごとく舞へる雪
除雪車のそののけそのけお通りだい
飛驒泊り一夜明くれば大雪報
すっぽりと飛驒へリポート雪の下
飛驒国分寺
雪籠り国分尼寺の観世音
年迎ふ円空佛の木の赤み
十二万余体の一つ凍み佛
靴の雪はたき落とせる石の階
雪の小道つけすむ国分寺
除雪機とスコップ片寄せ国分寺
傘の雪払ひ落とせる寺門前
淑気帯ぶ円空さんのナタバツリ
円空佛弁天さんの笑ひ初め
淑気たつ目鼻の刻み円空佛
飛驒小雪円空さんの寺包み
塗香（ずこう）して合はす掌の凍みおん薬
師
堂縁に飛雪吹き込む国分寺
秋葉山大権現
白隠の墨痕つつと雪気帯ぶ
円空の弁財天の笑ひ初め

雪籠り円空さんの弁財天
大寺の墓のぼこぼこ雪帽子
淑気帯ぶ匠の木鶴大明神
高山陣屋
雪吊松等伯ぶりに隆々たり
赤松のきりきりしゃんと藪卷す
雪明り差せり陣屋の御用場に
あっぱれな高山陣屋の雪吊松
陣屋訪ふ御用始めの日なりけり
玄関の大床餅花白尽し
餅花や床の間壁の青海波
雪乗せて高山陣屋の蔵の数
雪積んで米蔵ねずこの長樽葺（ながくれぶ
き）
大広間忠孝二字の墨書凍む
御陣屋の鷹の羽薄括られて
雪明り陣屋の米の四番蔵
お白州の格子窓より雪明り
責台と抱石四枚凍て白州
御陣屋の板廊奔る雪明り
仮牢のありし辺りに積もる雪
雪あかり春慶塗の長持に
新らの雪積みて陣屋の書物蔵
朝の雪高山陣屋降りつつむ
かさこそと陣屋の高張り叩く雪
飛驒ぶりの雪や陣屋の赤松に
郷土館
円空の思惟佛枯れの分厚き手
円空の煤け黒凍み天神像
円空佛烏天狗の嘴の凍み
円空の蛇体の龍神年を祝ぐ
淑気立つ円空さんの金剛神
凍む木（ボク）にちよんと目鼻の木っ端佛
黒凍みの牛頭天王の木っ端佛
凍み寄せず円空さんの木っ端佛
冴え冴えと円空佛の目鼻立ち
着膨れ見る纏も高山火消組

円空の遊行造佛深雪の地
円空の二寸に足らぬ凍み佛

市内

初売りの高山駄菓子家苞に

酒林向ひ合はせに初商

初旅の家苞飛驒の甘々棒

飛驒を去る苞に手造り甘々棒

用水に雪の舞い込む三之町

三之町出格子叩く朝の雪

箸つけて飛驒赤かぶら目出度かり

小雪飛ぶ中を二之町三之町

大まかな初旅日程届けり
飾売建ちたるいつもの風の辻
頼もしき暖房音を負へる日々
一湾をよぎるごと年渡り来し
数の子に健在の歯を鳴らしけり
古女噛むことも老後の一試練
いっぽんの櫛際立つ寒林に
象のごと展きて日向ぼこの耳
小晦日煮え来る豆の呱呱のこゑ
大風呂敷拵ぐるごとく年展け
輪飾をあほれる風の向き変はる
輪飾も既に六日の乾びやう
睦月に逝き世の寸法に合はぬ人
松とれて日はさんさんと高梢に
松過ぎの日と風翼あるものに
松過ぎの空を鳴らして風小僧
短日の二日掛りの仕事了ふ
万病に効くと言ひ添え寒蜺
寒蜺ぼちよんと鍋に零しけり
寒玉子のご馳走の世も遠くなり
鶺鴒の実のあらむかぎりを鴨漁る
川芒脂っ気抜け雲のいろ
翔ぶ鳥の一生懸命冬の暮
身の内に鴟の女ごゑ溜め年始
をなごなれど孫を得し年慈姑美味
なまなかな箸を嫌ひぬ八頭
年寄りの生き難き世の鏡餅
海牛を返せばむくと冬渚
えんぴつで海牛つつく冬渚
海牛の角を立て聴く冬の浪
冬麗の石蓴浄土を踏みゆけり
くいくいと吾に啼く寄る冬かもめ
くいくいと沖に啼き寄る冬かもめ
冬鷗くいくい胸に沁み透る
冬鷗覆へるとき波透きて
冬潮の忘れ物なり海素麵
寒波や生きの緒に似て海素麵

一枚の寒波洗ふ海素麵
冴え冴えと海の腸海素麵
海素麵海に腸ありとせば
冬鷗一羽石蓴の磯を発つ
流れ海苔掬ひて桶をはたく音
あをあをと石蓴左義長済みし浜
海牛に睦月の浪のこもり唄
海風に音を荒げて大とんど
左義長の縄の食い込む胴廻り
暁暗の安房を向ふに飾焚く
左義長の灰舞ふ空に鳶も舞ふ
どんど焚く中でも松の爆ぜる音
左義長の済みし空舞ふ磯とんび
しよっぱなは「枕邯鄲」梯子乗
「腹亀」の首を打ち延べ梯子乗
次なるは「帆掛」でござい梯子乗り
梯子乗富士へ乗り出す膝八艘
「唐傘」の拍子とりつゝ梯子乗
梯子乗木偶のごと垂れ「肝試し」
臨濟宗 建長寺派 円応寺 閻魔詣
鈍（なま）る身や閻魔詣に出かけむか
持たさるるマスク・鼻紙・紙懐炉
紙懐炉背にする齢ひはまだまだ先
ありつたけ着込み閻魔に詣でけり
建長寺さんの御坊も初閻魔
道服のだぶだぶ閻魔詣でけり
奪衣婆の兄者の閻魔詣でけり
初閻魔俳句亡者をたしなめり
初閻魔鬼畜充つ世を一喝す
初閻魔耳貸し給ふ大般若
初閻魔転読の風享けにけり
斎日の肝を震ひて大般若
身を伝ふ誦経般若や初閻魔
転読のこゑは肝より初閻魔
堂の凍み膝に募れる初閻魔

のつけよりお小言頂戴初閻魔
斎日の生きの緒震ひ大般若
斎日の閻魔目を剥く世事あまた
初閻魔堂を揺るがせ大般若
初閻魔御坊唱和の大般若
転読の僧の高声初閻魔
蚯蚓眉むずと吊り上げ初閻魔
顔見知り女人に逢へり初閻魔
お白州に立たさる思ひ初閻魔
鈍る身のしゃきつと十王詣かな
管長の朱袈裟かしづく初閻魔

北鎌倉氷つついて歩きけり
臘梅に二言三言語りかく
身の鈍る池の寒鯉ならずとも
羅漢の背霜の張り付く日なりけり
烏瓜残る一つの乾びやう
滝なす蔓たった一つの烏瓜
二人連れ黙って仰ぐ冬桜
この谷戸の日照時間烏瓜
紅梅の懐に日の割って入り
梅の名は古代青軸ふむと見て
三桎の枝のしろしろ睦月の日

ぶちまけしバケツの氷暮れてくる
植込みに松葉の懸る年の内
かいつぶり素潜り芸の荒削り
小寒の襟立て苺買ひに出る
裏紙に妻のメモ書き小正月
黒々と松の枝が暮れ寒土用
大寒の近づく梅の蕾みやう
木瓜の実の一つひっそり指物屋
消火器を抱えはしれり初電車

湯豆腐の分厚き鱈に箸を当て
湯豆腐に微塵の脂泛きにけり
湯豆腐の湯気の中から万太郎
湯豆腐に顧みる年模糊とあり
職引く身なれば
残業に追いかけるる年でなし
鷹揚に年を迎へて送るのみ
蛇（くちなは）も白く化粧ふて年始状
銭湯の北風晒し下足箱
銭湯のブリキ板絵に雪の富士
銭湯に年越す松の常緑
銭湯に年の瀬迎ふ扇風機
銭湯の心尽しの鉢盆梅
銭湯の高窓越しに冬の月
下履きをボタンと冬至の湯屋を出づ
町内に銭湯健在冬の月
羽ばたきの頭上勿々寒林へ
餅腹を抱え地面につんのめる
寒鯉の賢人の髭滴りて
雛の日のおかあさんてばおかあさん
閻王の正面に佇つ寒最中
馬頭尊春は名のみ野辺の風
枯園に年季の入る池と亀
職引く身例ふに素干し桜えび
水上は一日曇り通し鴨
くつくつと鴨も寒さを諾へり
かはせみに格好な枝氷上に
かはせみの瑠璃忽然と枯枝に
隊列組み鴨の巡回せるお濠
清涼寺式釈迦如来
冬麗釈迦の衣紋の流水紋
焼芋屋かきいれどきの日の続く
焼芋屋リヤカーの腰上げにけり
いっせいに背を見せ鴨の向き替ふる
鴨一隊大寒の水均しけり
大寒の水破る音真鯉なり
茶のベスト着込み鴨見としゃれ込まむ
桜草白も佳けれどピンク佳し

ダンディな鴨先頭に立ちにけり
春めける日差しいささか桜の枝
待春の日をちりばめて桜の枝
風ゆるく吹く日の冬木桜の芽
大寒の雪と告ぐこゑ窓に寄る
大寒のいきなり雪の降り出す宵
一当り家々濡らしつもる雪
大寒の雪やいっぽんつけとくれ
積雪を見ること飛驒の旅以来
冬帝と示し合はせて撒く雪か
降る雪に容を起こす木々の枝
先づは斑（ぶち）やがて庭面を覆ふ雪
夜の雪縷々と命脈保つごと
どぶろくの明さの雪が夜通し降る
大寒の夜の底抜けの雪となり
かすれ眼になほも降り積む夜の雪
どぶろくの上澄み雪は夜に入りて
夜の雪顔にほろろと懸りけり
雪このまま積もれば音をあぐ庭の木々
振り出して手当たり次第夜の雪
雪降り大雪警報出づ中に
鼻先を夜の雪の香掠めけり
寒空に水の流るゝ音のして
寒晴れやいよいよ高き川の音
降る雪の時折ちから抜きにけり
いつか雪降り出してをり初心とは
千両の眸を睜ける雪こんこ
庭の木々リズムをとりて雪雫
木々落す音のとりどり雪雫
職引きて世の隅に聞く雪雫
作り手の去りし日暮の雪だるま
身体じゅう松葉だらけの雪だるま
櫟の滑らす雪の音暫し
運慶作堪慶作の雪達磨
松ぼくり以ちて両の眼雪だるま
浜っ子の浜辺に作る雪だるま
雪達磨もどきの泥んこ雪だるま
雪搔きの真似事する子裏通り

町内のここら平屋の雪雫
雪払ふ櫂と雪を積む楯と
雪払ふ櫂の梢見上げけり
雪雫日暮れの音を伴へる
走り根にも瘤もつ櫂春近し
祭のごと木々の奏づる雪雫

羽織るだけ羽織りてけさの雪見たり
落ちて来る雪に音律あるごとし
中空より律の調べの雪降り
風に斑ありて小雪を巻き込み
姫小松深沈として雪の底
雪蔵す天界の底抜けたるや
見上げたる顔に当りて昼の雪
底抜けの雪に黒松佇ちつくす
雪の日の口にひろがる檸檬の香
万物を呑みてかりそめならぬ雪
天帝の御意のままなる雪小降り
雪降りりくつがへらんとする鯉に
雪大降り小降り何処まで読んだっけ
太郎月ここ一番の雪降り
黒松に降り懸かる雪たくましや
わいわいと降り来る雪のあたたかさう
ひたすらに落ち来る雪ともつる雪
本降りと教へられけりけさの雪
かりそめに降りてぬきさしならぬ雪
雪来ると楠・椎・檜のこぞり佇つ
縦横に粉雪の舞ふ一日よ
大雪になると鴉の宣へる
つつかかかるやうな飛雪に体あづけ
つつかかり来る雪押して吾往かん
降る雪のをちこち見つめぬる真昼
また雪を小降りに天の天の邪鬼
氷割れ現る水の生々し
風も得てしゃかりきとなる昼の雪
海原に消えゆく雪のおもひ千々
心根のやさしくなりぬ昼の雪
落ちてくる雪に賢愚のあるごとし
降りつづく雪の昼餉は鯁蕎麦

松の幹雪がくつつき始めけり
昼過ぎて雪は本腰入れにけり
雪片の一つ飛び来ぬ大玻璃戸
ときどき止む雪に騙されぬごとし
初の雪それがこんなに降ろうとは
只の雪真竹四五本へし折りぬ
風具して雪は一荒れせんとせり
卒然と横濱の雪止みにけり
新雪に浮かれて心茲になし
ジョーカーの舞い込むごとく突如雪
雪だるま雪につつまれまたあした
降り足して降り足して雪海に降る
雪に眼を上げて遺句集読み止しぬ
降り甲斐のある雪巨大なる松に
洋館は洋館らしく雪に埋もれ
巨き松それ相当の雪を積み
雪払ひやれば真竹の胴震ひ
まっさきに雪に音上ぐは女子竹（おなごだ
け）

払はねば雪に降参する竹ぞ
呉竹の雪に降参する容
これは美味寒のうつぼの一夜干
真ん丸く黄楊・木斛につもる雪
底抜けに降りては雪の愚をつめる
急がねばならぬ暮雪の降りやうや
昼を経て降りつる雪本を閉づ
南天は雪に負ける木払ひやる
水っぼき雪南天にとりつきて
ずり落ちんばかりに雪の簷暮るる
独り酌めば締め鯖いろの雪が降る
蓮根の遠眼鏡もて雪を見ん
難題をもたらずごとく宵の雪
雪の造作打ち消すごとく夜の雨
腸（はらわた）がありて温もる夜の雪
降られては腸古びん夜の雪
夜に入りて雪はしぶとさ見せにけり
春雪にこころ展きて眠らなん
くらがりに変貌を遂ぐ夜の雪
心臓の音のとつく雪積む夜

きれいな雪ばかり集めて雪だるま
桃色のバケツが帽子雪だるま
雪零梅に光りを送りけり
落ちさうで襦袢のごとき軒の雪
雪零光りを光り追ふ如く
雪零に打たれ小石のかがやける
祝ひの座に招ばるるごとし雪零
雪原に降って湧いたる群雀
雪晴れの雀磧に湧き出でて
雪晴れを今一心に夏みかん
町内を歩いて雪解の句を拾ふ
雪零睦まじげなる両隣
町内裏路地雪解零の音の中
山水のるると落葉の滋味貰ひ
金ケいろ朽葉の間を流る水
巡り来る春を思へと山茱萸の芽
やや古ぶ腸に落つ年の酒
雪中より覗き鋭き草の尖
八十路越す母をさいなむ寒よ去れ
霜掃いて母の一日始まり
職引きぬ母共々に着膨れて
職引いて母と寒さを俱にせり
職引いて雑炊好きの母のそば
ありあはせの物もて霜除け福寿草
二階より二つ三つ咲く梅覗く
凍て瘤の三つ程なる櫛の意地
新雪の上に松葉をちりばむる
寒鯉を封づ氷の曇りけり
枝移りやがて木移り寒雀
蓮根の連れ子つぎつぎ現はるる
抜き立ての蓮根の蒼泥法師
園芸講座腐葉土作り冬籠
禍事の多発する世を雪も稀
左義長の心棒燃えて炎々たり
雪とみに強まり末子の帰宅どき
年の瀬の余日減らして由無し事
山蔭に村の手作りスケート場
庭も吾も共々古りて万年青の実

冬鴟の啼かずに暮るる枝の影
冬鴟の去り際何か言ひ足せる
意地もなく突き崩さるる霜柱
煮凝の頭の方を吾に呉るる
木の芽の嘴寒満月に突き上げて
万目の霜や一步を踏み出せる
早梅の今日薫るべく烈風に
大寒の蛇口の水のすとすと
誰彼を悼む睦月も半ば過ぎ
胡蘿蔔入りカレーライスに温みけり
鶏冠菜海の噺通り抜けにけり
悼みごと重ねて睦月如月と
大手振り死神あるく太郎月
関東一円本格的な寒の雨
もしかしてむらぎも石蓴のみどりかも
ビーフシチュー煮ゆるに任せ寒厨
ビーフシチュー煮詰めておいて煤払
頼もしき圧力鍋や年用意
鬼は外はっきり言おうはっきりと
立て続け雪の降る日を迎へけり
昼は雑炊夜はシチューに風邪寄せず
妻の云へる
整調によるしき牛蒡召し上がれ
蛙に眼ならず面も借られけり
山茱萸の襪褌着て二月の風に耐ふ
さても多き鶺鴒の実これを鴨の喰ふ
風に張る氷紫ならんとす
恋猫にうって変われる日も近し
夜に入りて風荒々し猫の恋
首筋を吹かれて恋の猫となる
冬鴟を前や俳句は気合いもの
俳諧の腸絞る鴟を前
着膨れて喜多方ラーメン吹き冷ます
蔓ものの端空風に吹かれづめ

おろおると母大雪の空仰ぐ
賜ぎうと一切合切枯るる中
からたちの垣越し主の目と逢ひぬ
続けざま降る雪鯉は深潜き
照りこぞる枝立春といふ感じ
黒竹の安否気づかふ昼の雪
雪ならぬ雨に見舞はれ濡鼠
籠り居の山梔子の実に目を止めて
冬茜いろの薔薇の実大と小
小競り合ひしながら春の雪落ち来
追儼豆転がり込みし机の下
板の間に撥ねて響けり追儼豆
探梅の供に持ち古る季寄せもて
老體に鞭打ち梅の一卜盛り
春立てる空に闕のあるごとし
針供養一日風の吹き止まず
院長が指図して針納めしむ
冬鴟の暫し止まりやがて去る
青空がしぐれ始めし空の端
豆撒きの僧あちら向きこちら向き
をしどりの陸に上がりし伊達姿
冬鴟の朝一番の優姿
冬さうび盛りを疾うに過ぎてをり
冬さうび盛りといふは何時なりし
東京湾いちめに雪ぶちまけて
降り懸かる雪を忘れて鶴一羽
降りぬいて降りぬいて雪丹頂に
昼の雪ますます粗くなりにつけり
玻璃戸越し雪の降りざま窺へり
あほられて湖畔の雪の往き来せり
即吟派遅吟派梅を探らんと
あひびきのわが世とばかり恋の猫
山茶萸に二度目の雪をもたらしぬ
ひとつ咲いて日差しゆゆるみそむ野梅
在りし日を茲に見つけぬ万年青の実
こんなにも積もれる雪にうろたえぬ
大雪に竹たちたちとなりにつけり
恋仲の大手を振って猫あるく

冬さうび玉かんざしを遺しけり
竹既にへたばつてをり積る雪
一呼吸おいて滴る雪霰
真夜の雪どんどこ降って降り明かす
小声もて母の撒く豆五つ六つ
待春の泉湧くなりほこほこと
雪降りりささかまぼことなる魚に
牛乳の膜皺みをり春隣
節分の青空ゆ鬼降りて来る
放映
瞽女唄の撥冴え冴えと石童丸
瞽女唄の葛の葉子別れ撥冴ゆる
瞽女唄の徹れる村に春巡る
暖房音轟々朝餉支度かな
見渡せどはや冬鴟の姿なし
冬鴟のこゑにも馴染み朝餉とる
追儼寺出を待つ鬼の空ら威張り
高梢といふ高梢に二月の陽
二ヶ月の雑木日差しを返しをり
散髪に短日の閑つぶしけり
風邪なども引かず二月のこゑを聞く
腹にくる今年の風邪を貰ひけり
雪雲の裂け目青空豆を撒く
鈴懸の実となん空に撥ねゐるは
ユトリ口展
ユトリ口展末枯れ教会づくめかな
ユトリ口の枯木の街に入りゆく
コルシカ島教会の上の春の雲
固菴二月半ばのこゑ聞けど
寒天に海鼠ならざる雲はなし
立春の半島へ発つ踊子号
岬空にくつがへらんと寒シの鷹
探梅の足許とらる北斜面
柵持って厄年男逸るなり
節分のぬひぐるみ被て威張る鬼
界限の恋猫にして横坐り
月も半ばのこゑきけば梅ふふみ初め
日が伸びて殊にさくらの幹の艶
見当をつけて来たればふふむ梅

山菜黄の塵程の芽をなぶる風
既にして接骨木の芽の出臍程
起しやる圧しつぶされし雪の竹
一ト月がすぐ過ぎ二月の診察日
ドイツ製植木鉢に枝間引く
金盞花に負けぬ畑の代赅いる
金盞花砂の目潰し喰ひけり
雛飾る日より日差しもやはらぎて
涅槃図の号泣蚯蚓に至るまで
川波の立春の音響かせて
返信に追ひかけられてをる日永
飾り了ふ雛の目元明るみぬ
雛飾る次の包みは何ならん
生垣越し山梔子の実を見かけたる
前列は若者ばかり追儼寺
枯木の辺しぶとく残る寺の雪
群がりて大燈國師めく枯蔓
大櫛も櫛に交り裸木どき
素通しに楠や櫛や裸木どき
独りごちつゝ配置せる雛道具
雛箱に雛箱積める紙の音
正座して雛屏風より飾りそむ
二三日早めに飾り雛の家
雛も頬寒気にもやす日なりけり
梅見客芸妓見番うち過ぎて
高梢に通る日差しも春隣

鳥獣虫魚歳時記なるものを読みて
現はるる大鮫鱈の雪雲が
浜千鳥ああかい鼻緒のじよじよ履いて
一休の貌して現るる蠅虎
かるの子の見倣ふ行儀作法かな
一ト煽り青鷺薄鼠深めけり
水鳥の一方向に皆動く
混沌を愉しむごとく海猫舞へり
海猫の散開散開羅臼港
人恋ひて海猫は運河を遡る

鳴く亀の己れ支ふ手石化して
ごり押しの一子亀の子岩に乗る
ぬもり殺め掻い堀りといふ子の儀式
守宮出る家となりしか急階段
青蜥蜴見んと寄れるも間に合はず
この池を目当てに現るる青大将
喰はせもの鯰のかかる莫迦竹瓮
鮎釣の魚信（あたり）なければちちんぷい
緋目高に行く先々が見ゆるなり
横睨み緋目高の眼の二つづゝ
温床を蹴って泥鱸の浮上せり
潮北に北に海月の風来坊
浮かぬ顔姉の金魚と見比べて
直進の鯉佳き貌皆持ちて
突っ走り一光芒をなせる鯖
べらを見る岸辺の人に吾も交り
虎魚産み落とせし親もこんな貌
かんばちの親爺はブリの大伯父にて
はらばひて鯛の鼻尖潮分くる
赤エイの拗ねて窪む眼砂に伏せ
大金のごと磯鮑押しただく
その他の哭き方知らずいそぎんちゃく
猫の手も借りたき蝦蛄の出荷どき
沢蟹カタンと転けて宇津ノ谷峠口
大仰に天見上げては蟹あるく
盗み歩きする蟹そこそこ面白し
目と目合ひ蟹と暫く睨めっこ
舟虫のどちらへ進む髯ある方
舟虫に跼めば尻尾見えて来て
刺股は何を突く為兜虫
かなぶんの支離滅裂となり当る
道化師の天道虫の飛行なり
賞金を懸けて穀象虫退治
斑猫は肉食の彩泛べけり
川蜻蛉独創ひらめくごと出でて
ごきぶりを前にわくわくする一打
沸々と潮噴き馬刀貝の潜む穴
ぼこぺこと水窪ませて水すまし
優曇華の善玉悪玉吹かるまま

吸血鬼蚋登場の鈴が森

こうばしや島随一の焼蛤

蛤に腹も納得島遊山

ひとり頷き蛤の塩加減

島の茶屋焼蛤に火がとほり

冬鴟の催促がましきこゑぱったり

ごきぶりを見とがめし妻さあ大変

桜貝拾ひし女の掌を覗く

梵字描く蝻のありけり大千潟

はげちよろの蜆のおいど乾きをり

水面這ふ虫に田螺の大雁塔

難儀して寄居虫（ごうな）ひねもす宿探す

見え張りの寄居虫の宿分に過ぎ

初蝶の飛ぶか飛ぶかと日を送り

干菓子に型俳句にも型目借り時

青葉木菟去年までは居し梢仰ぐ

頭の中に相模の雲雀上り下り

枯萱に風のかろさの河原鶉

こともなく来てこともなく鶴去るや

残る鴨同士蹤いたり離れたり

鳥雲に入る夕映のながながと

轉りの渦中に一步踏み入りぬ

蝌蚪の腹優しく泥のうへに置く

さよりの吻太平洋の藍に染む

鮫鱈の強つくばりの口許よ

判じ物めくなり蝻の今日の道

けふの昼餉蟹雑炊に異論なし

巡る世に雛忘らることもなく

うかつにも針を丸呑みしたる鯊

涅槃図に蛇（くちなは）ながす空ら泪

蓑虫の蓑はおほかた簡單着

冬鴟にかかはりなしに庭仕事

マンボウの抱く大望春近し

梟の貌のめりこむ漆闇

まんぼうの全速前進春の潮

千鳥ぬし丘のあたりに佇めり

鮫鱈とおぼしきおもて砂かぶり

新年

左義長の火の壁に面突き当る

夏みかん抱へて年を迎ふ家

一の宮ふくら雀の頭を集め

ひめ始め六十路を過ぎしばかりなり

新年の一直線に照る舗道

輪飾りのからりと吹かる日和かな

春

神木を遊び場にして鴉の子

永日の家鴨に家鴨従ひて

亀二つ乗りて日永の一つ岩

馬頭尊脇にむつくり落の藁

慈姑食しもう一波瀾ある世かも

肩肘を張りゐし牡丹崩れけり

自生種の椿拾ひの島の婆

自生して太平洋に向く椿

椿咲く島の沖には伊勢海老

心電図心の波もうららかに

夏

覗き込みながらダチュラの横通る

いたづらに大きなエンジェルランプ

朝顔のよれよれ咲きは許されじ

暁の蟬の爪立ちあるくなり

遠祖のおんにぎはひや精霊棚

墓歩む己励ますごとくなり

山椒魚（はんざき）を覗けば覗き返さるる

はんざきとなりのし歩く泉の底

棒の雨萍散りて集まりて

白木槿身内数へる程になり

若葉して森の一員たる水木

秋

とりつきて松の手入れの了るまで

選佛堂木犀の香の退きて

冬

煤の日を甲羅干しせる亀の辺に

雪晴れの小枝に鳥の往き来あり
大つごもりタイムスリップして邦画
風も出て戻りがちに干蒲団
返信を引き伸しをり鬼貫忌
ストーブにあたり生色をとりもどす
湯浴みそむ夢も草津の寒湯治

北鎌倉駅の日脚も伸びにけり
白梅は了へ紅梅はこれからか
椿の葉光帯ぶなり涅槃の日
お涅槃の日の青空を鳶ながす
お涅槃の青空深くとんび哭く
涅槃講堂に集へる僧の沓
涅槃会の草履ずらりと御仏殿
ぞうぞうと竹林鳴れり涅槃変
きゅうきゅうと氷張りづめ涅槃講
涅槃会の沓音巡る御仏殿
難しき経をやさしくお涅槃会
涅槃会の突っ立つ僧と堂柱
涅槃会の高く捧げて菊三色
涅槃会の腹の底より楞嚴神呪（りようごん
しゅう）
涅槃会のお堂に通る風少し
管長の朱沓涅槃の堂を練る
建長寺ご坊雲集お涅槃会
鐘撞くが始の合図お涅槃会
杉襖楞嚴神呪の洩るる堂
杉襖お経の洩るる涅槃堂
誦経僧三十三人お涅槃会
お涅槃の老師朗々楞嚴神呪
山内の三つの鐘鳴りお涅槃会
顔にくる瑞鹿山の梅の風
涅槃会の供華は三色の小菊のみ
涅槃会了へ山内に散るご坊達
山内に徹る日差しに椿散る
道隆の御代もかにかく涅槃講
池の端のきらめき亘るお涅槃会
涅槃の日老柏楨の常緑
楨の葉の蒼深々とお涅槃会
真白な枝の剪り口お涅槃会
涅槃会と勿体ぶつて鴉啼く
山内の冴ゆる日に干す僧のもの
涅槃図の末座けがして雀らも
涅槃図の前にもぞもぞ畏まり
天つ日に仏具のいろの福寿草

三極も白き首垂れ涅槃変
涅槃図に畳を擦りて膝寄する
海鼠めく雲横たはり涅槃の日
紅梅の蒼ぼこぼこ寺日向
紅梅の蒼ぼこぼこ鉛筆描
寒紅梅寺一番の日溜りに
海鼠めき有余依涅槃のけふの雲
常磐木の青まさる日の涅槃講
パンジーを植ゑる陽気となりけり
蟻穴を出づると母の告げにくる
吾も穴を出づるや蟻に遅れじと
啓蟄の吾も穴出づおもひもて
啓蟄の穴出づものの中に吾も
お節句に間に合ふやうに桃の咲く
きさらぎの桃の枝枝白光裡
小寒の埃かぶりて万年青の実
普段着で裘など似合はぬ妻
さんしゅうは雨に大きく苔みけり
さんしゅうの雨に息づく濡れ苔
さんしゅうの蒼ゆるめる通り雨
さんしゅうの古木ぐらつく涅槃吹
さんしゅうに天上大風吹き下し
さんしゅうのはつと瞳く風吹きて
さんしゅうを目敏く見つけたせるこゑ
そのかみの男雛女雛の飾り方
内裏雛目の付くところに骨董屋
つづけざま青空三日梅の薬
古池を真一文字に日永鴨
日永池亀がぼっかり泛び出て
ふつくらと享保女雛の腰廻り
享保雛御衣の柄も神寂びて
梅文の切子硝子の雛調度
おん前に煙管・蒔絵の雛調度
雛壇に享保男雛のしゃちこぼる
雛壇に吾が購ひし雛もあり
出張の土産の大内雛もあり
昔話交しつ雛飾り立て
その中の一つの雛手に取りて

玄閑に飾られずらり小物雛
雛見つむ雛より細き目つきして
並べ立ていつの間に殖ゆ小物雛
手に取りし雛の一つに還る日々
古妻に童顔もどる雛の前
八十路の母はこべら提げて立話
桃散って隣とうちの垣境
鴨みんな右へ進めり春隣
桃太郎生れし桃の小賑ひ
さんしゅうの炒り卵咲き朝は佳し
山菜黄と俱に朝の日迎えけり
二月より三月心底冷ゆる日は
鼻風邪を引いてずぼらな仕事ぶり
陽に轉るごとく山菜黄咲き出せり
はこべらや小鳥飼ひしは幾昔
吃として山菜黄咲けり風の中
群れついと漕ぎはなれけり鴨一羽
桃の枝の青空指して長みぢか
場当りのその日暮しの蝌蚪を見て
場当りの日数を重ね桃の花
無為徒食送る日に馴れ桃の花
聞き覚えあるこゑ通り桃の花
桃日に日にちからを付けぬ八百荅
きさらぎの暮色に溶けて鯉沈む
群れ離れゆける鴨あり天が下
桃の花日ごと日ごとのあたたかさ
場当りに恋する猫と思はれず
山菜黄の粒粒咲きに朝日さす
場当りにその日を送り恋の猫
桃の花噂話に終止して
青空を配し斜面（なぞえ）の桃描く
庭の土瘦せて莖のいぢけ咲き
はこべらのむしられ置れその鬚根
コントラストよろしく白と赤の桃
樹氷林空には風のとほる音
樹氷どき蔵王のアイスマンスタ
氷らんと青森椴松風に哭く
ずんぐりと青森椴松樹氷負ふ
よく電話かかる日虫も穴を出づ

納税期鴨は汽水に遊びをり
水鳥の羽打ちの遠く水ぬるむ
恋猫のこゑを亦聞く入日際
腰あげて田螺のあるく山日和
伸びをして田螺に折りし膝のぼす
椰の木の立身成りて床柱
田螺容れ日を容れ棚田の古器
水底のいろに浅蜷のよろけ縞
小粋なるものに浅蜷の財布柄
よく汐を噴ける浅蜷の財布柄
風少し吹いて真鴨のよろけ縞
百千鳥樟は見通しよき樹にて
蜷の道筋書き見えぬコントに似
ひと雨を齎す蛙の手柄顔
湖の端に降りたり通し鴨

総門の奥花明り増上寺
花の風仁王の腹を掠めけり
花吹雪御堂の角を曲りくる
花は今散り継ぐことに打ち込みり
えぞにうや能取岬のどん詰り
しかじかと毛虫付く木を指していふ
蕪村また大器晩成種ふくべ
釜茹での蝦蛄に夕映始まれり
水揚げの二人掛りの蝦蛄の桶
海猫連れて蝦蛄獲船の掃投どき
槽を這ふ蝦蛄の草鞋のうすみどり
さくらんぼ受粉の出羽の春を告ぐ
すずめ蜂患部のごとき巢を作る

蕪村展

両国の頬切る風と冬かもめ
棕櫚の上を飛んで蕪村の吠々鳥圖
若駒が跳ねて蕪村の南蘋画
身に入みて蕪村の描く虎と風
海道の松越し蕪村の雪富嶽
枯木に意地蕪村の金地山水圖
凍りつく米点金地枯山水

霜柱いろに銀屏山水圖

銀屏に蕪村の打てる凍て米点

春や春蕪村の武陵桃源圖

何時上向く日本の景氣白木蓮
白木蓮すつくと晴夜疑はず
なまる身の起居正して白木蓮
白木蓮の花押し拵ぐ風募り
さんざんに吹れ大木白木蓮
轉らんばかりに辛夷の固荅
山の風辛夷吹き止めてはならじ
一花だに咲きためらへる辛夷無し
辛夷の木風納まって物足らず
青空に辛夷ととんび大揺れに
大風に花奪られじと辛夷の木
辛夷の花びらびら吹かれ雑木の間
風音の中に辛夷の屯ろ咲き
雑木山経巡る風に辛夷咲く
いい加減咲いて辛夷の花減らす
鳴くときの亀の横顔鳥に似て
岩登りかけてその儘日永亀
常のごと彼岸の亀の甲羅干し
めいめいが好きな方向き日永亀
亀鳴ける古式ゆたかな池があり
永き日の浮上の亀と目の遭へる
亀鳴くに間ある古池巡りけり
永日のとりとめもなき亀の貌
すみれ草自愛の彩を深めけり
風の日の薄日差し込むすみれ草
雑木吹く風まだ強し山すみれ
空讚え水音讚え犬ふぐり
大空のもとの祭典犬ふぐり
犬ふぐり一寸離れて牛はこべ
覗き込む人を窺ふ犬ふぐり
川の音彼岸の空に届きをり
春分の日の大空を風が駆け

お彼岸の空を落とせる水辺ゆく
甲羅干す亀と彼岸の空あほぐ
蜂高く高く彼岸の空のぼる
たんぼぼの黄が目に滲みぬお中日
軒先に蜂を見かけぬお中日
飛ぶ鳥の影もよぎらず彼岸空
丘陵の雑木吹鳴る彼岸道
彼岸の日まみれに蜂の飛びにけり
蛇口より水の洩れゐる彼岸過
あちこちに水皺が頭ち彼岸過
鴨の首ゆうゆうと水温みけり
鴨と鯉撒餌とり合ふ仏生会
鳴しやくる水音ひろびろ阿字ヶ池
春水をびしゃびしゃ鳴し鴨の嘴
枝切れを乗越へゆける春の水
うまさうにペリカン春の水しやくる
俤を宿し春水流るるも
離れ際春の水音高らかに
茎立や可惜籠る日うち過ぎて
朝寝又朝寝よろしき日を送る
孫の手のやつかいになる目借時
妻
露を先づ湯がいて春の水仕事
貴人（あてびと）のごとく箸付け蒸鱧
盛り過ぐ桃見て退屈極まりなし
連翹のもう咲く家があり散歩
春泥に踏みにじらるるは何の花
桜の蕾ぼつんと一つ太幹に
水ほとり焦れ来しなり水草忌
瑞々しき枝の剪口水草忌
水の鳴る野辺に佇む水草忌
度忘れの頭叩いて丈山忌
郁李のぼやっと咲ける其の一花
郁李の風に揉まれて花付けぬ

郁李が咲けりうつすら日を載せて
お中日日向水木の花の鉦
パンジーの好みの彩のかため植え
咲くも気まま散るも気ままに花杏
はこべらの髭根引かれて直ぐ乾く
山茱萸の痴呆が移る小昼時
山茱萸の老木懈き花掲げ

芹の川吾に続いて妻跳べり
二人して摘み来し野辺の芹の味
芹摘の風に窪める紙袋
地を這ふて這ふて春風吹けるなり
水の音土の音して田芹摘
水くびれひろがり流れ芹の森
芹摘む婆一つ大きく伸びをして
芹摘と芹摘出会ひ言葉懸け
足許を先づは築きて田芹摘

野蒜摘次は何処と見渡せる
婆二人左右に散つて蓬摘
野蒜摘切上げどきととんび啼く
のびる玉抜くや土中に鈍き音
すかんぼの緒き一葉の立ち上がる
年々に立壺すみれ彩薄れ
阿字ヶ池落花散り込む二タ所
萍のあはひあはひの漆闇
萍の雑兵芹を取り巻ける
萍の悪意を其処に見るごとし
ぶらり来て浦島草の生ふる山
舌並みの耳欲げなり浦島草
浦島草舌やはらかくものを云ふ
近々と接骨木咲ける山の色
やっところさ地べたを出でて破れ傘
破れ傘生ふ裏山の道愛す

木五倍子咲く時分の山と分入りて
切通し木五倍子零るゝ土えぐれ

花木五倍子簪に似て「よいいやさ」
これも咲く裡かと見上ぐ花きぶし
きぶし咲く頃と訪ひしもこの程度
雑木吹く風音聞いて八重葎
二輪草暗緑浄土広がり
この山の落葉に肥ゆる二輪草

林間に六浦（むつら）の湊藪椿
実時の殺生の戒紅椿

このところ霞む記憶と山茱萸と
山茱萸の一花開きて全て咲く
蝶々舞ふ一場に登場するごとし
筍飯乞へば相槌打ち呉れぬ
永き日のまたも持菓を呑み忘れ
志ん生の呂律恐ろし目借時
俳句また横道多し蝮の道

野蒜摘などして躰使はねば
じり貧の体力使ひ青き踏む
鈴懸のいかつき枯木猫背の町
日は斜め斜めに差して桃の枝
涅槃図に坐り直して魅入る人
チューリップ芽組む大地を突上げて
手放しで開花喜ぶ桃の花
山茱萸のほとりを過ぎて足音失せ
真っ先に目がゆく新種の桜草
デージーの根分けそろそろよき時分
いっぺんに陽気変れり桃の花

春一番程の風吹く日なりけり
時化込むなか蕾しつかり金盞花
大風のドンと家搏ち春一途
春の蠅発たせあそべることも倦み
えいやつと蠅の子突つ切る風の中
蠅の子の三角翼を折り畳み
春の蠅歩いてばかり庭の石
足許を風に掬はれ春の蠅

蠅生る家居ばかりになまる身に
山茱萸の盛りを過ぎし花に飽き
春一に得たりや応と鳶の乗る

本伏せて蟻のゐさうな庭に出づ
雛の日はらりと解けて包み紐
横たはる池に古りゆく杭と鴨
汽水湖の中州に乾く石と鴨
浮寝鳥一つ伸びして羽搏つ音
春一番籠りごころを解き放ち
建付けの傷みどうかう春一番
桃の花呼ばれて吾に返りけり
向ひ家に三日天下の白木蓮
沈丁のかほると云へばかほる路
はくれんの突出す枝の先に珠
銭湯の熱くて痒し桜どき
諸葛菜地に沿ひて風吹き岐れ
諸葛菜日暮れのいろを強めたる
春宵の胸撫でおろすやうな灯よ
郁李のほちほち日暮の花のいろ
かたばみは意気消沈よ入日際
桜草植う家いやに殖えにけり
桜草大尽の家垣間見て
店頭を飾るプリムラ新品種
はこべらや庭の手入れの後始末
蛸（あさり）てふ字も簡潔に其角の句
蛤汁（はまつゆ）のコクといふもの鳥雲に
句仲間の上戸皆亡し入彼岸
夕朧つきあい酒の友の顔
くろぐろと雨に暮れゆく彼岸道
彼岸の雨舗道を黝く濡らしけり
雨闇に紛れ降るなり入彼岸
安曇野に枯れて根を張る大榎
木があれば触りたくなり薬どき
猫っ可愛がりに殖やしてポーチュラカ
花咲くと第一報は高知より
高知より咲き初む花を待てる日々
けふ開花告げて横浜気象台
横浜の開花予報の標本木

相方を知るよしもなき恋の猫
蟻穴を出でてはゐるか垣の内
蠅の子の飛距離まだまだ知れたもの
病院を抜け出し花を愛づ患者
車椅子目がけ寄せ来る花吹雪
花吹雪眩しみ孫のお守役
チケツトシヨップ出づるや花の吹雪く中
鳥帰る電気自動車走る世も
赤ん坊を抱き上げ花を掴まする
花あほぐ婆の両手の置き処
だっこしてはたおんぶして花の昼
いつの間に咲きゐる花とうち仰ぎ
街騒のここ迄届く初桜
問ひ懸くる風に応へて初桜
黄粉いろ木五倍子まぶせる雑木山
たつぷりと花があがれる彼岸墓地
母の背をポンと叩きて桃落花
懐によき風入れて大桜
花の上風に削がるる鳶のこゑ
松の枝桜の枝を揺らす風
山桜観る坐しんしん冷えて来ぬ
初花のまばらな空を仰ぎけり
初桜吹かれ大きく撓む枝
鳶のこゑひようと流れて花の上
鳶の影折々よぎる花筵
飛行場跡の木五倍子の生々し
初花のよよと吹かれて哭くごとし
煽られて大島桜生々し
揉まれづめ大島桜浪の白
風のある日中桜の誘ひ咲
体操に足腰均す朝桜
日当れば一人浮かれて初桜
潮の香うすうす流れ初桜
昼闌けて鳥も稀なる花の間
初桜やうやく鳥が現はれて
風上ミに向ひて喇叭水仙花
小刻みに震え先がく花の数
咲き切りて真昼間の花白木蓮

彼の若木よくぞ爰まで初桜
吾も妻も生ひ立ち知れりこの桜
草の間吾を見上ぐる犬ふぐり
曇日の冷え振りかぶり白木蓮
小米花たつぷり剪りて仏壇へ
風音の生れては消え花辛夷
ひやひやと彼岸の真水胃に落ちぬ
たつぷりと彼岸の真水ふみけり
夕月に白木蓮の苞の霏(けば)
夕辛夷吹かる淋しさ限りなし
はくれんの荅轉り初めんとす
夕冷えの白木蓮に翅音絶え
息詰めて百のはくれん闇に入る
月浴びて夜叉のはくれん突っ立てる
夜気帯びてはくれん百羽発たんとす
月交え白木蓮の夜の宴
継ぎはぎのその日暮しや諸葛菜
茎立やきのふに続く無為の日々
わるさして来たかこの猫恋の猫
郁李をつましく咲かせ路地住ひ
飴のよな日差しに蜂や仏生会
白木蓮風を誘ひ止まぬなり
骨の無き人を軽んず花かりん
はくれんを包みそめたる夜気と鬼気
草臥れてしまへば山茱萸忘れられ
はくれんの辺りを払ふ白磁珠
月光の下にはくれん稍さびれ
又も現る連翹垣に歩の弾む
花桃のひねもす語り合ふ日中
はくれんの荅に籠むる初一念
見渡せる此の大木の何処芽吹く
面白うなりて社の万(よろず)の芽
一区切りつけんと花も末の雨
はくれんの花の打ち身もまざと暮れ
白木蓮昏れゆく空に夜気を帯び
青空の直下はくれん夜気を帯び
鳥声のいよよ鋭し白木蓮
昏れかかるはくれんの空冷えしまま
がうがうと風切り結ぶ彼岸空

月に向きはくれん開く薬師堂
ひねもすを空を忘れて野蒜摘
朝比奈道しぶとく咲いて花きぶし
はくれんの無垢の白珠夥し
六瓣の花に風滲む白木蓮
薄着して桜見にゆく称名寺
顔揉んで起合せたり轉る中
道案内嬉しがらせん破れ傘
貌鳥を聞かんと床に起きあがる
貌鳥は何処朝寝の目をこすり
穴熊のごとく籠りて出る気なし
春来ると云へどなんきんはぜの枝
揺れづめに竹山の世のぺんぺん草
潮吹の中に潮吹うちやられ
服薬の水胃に落つる彼岸過
芹摘める二人話の届く距離
中日の亀向く方に何かある
宙を見て貌に朱の入る日永亀
赤ん坊のよちよち歩き花筵
赤ん坊に日覆ひ懸けて花筵
ジーンズの母娘足並み花見せる
よちよちの脚のぷっくり花の中
幼稚園年長組の花見かな
次の蝶来るまで爰に居やうとおもふ
蝶と共この草原を渡らんか
亀の子の泳ぐ手拍子足拍子
亀の子の足掻き泳ぎといふものす
日永亀干割れせぬかやその甲羅
さらば小鳩よ♪
花どきの下田稔の岡っばれ
楠の幹すうっと伸びて百千鳥
沸々と通草の荅日を浴みて
貧相な通草の花でありにけり
運ちゃんの最眞の店の花の昼
お隣とわが家の間の柿芽吹く
強気に出る妻に閉口鳩麦茶
結論は動かし難く冷し酒
職引いて早や一ト年や三田の夏

人の指蛍袋に闖入す
風を背に個展を出づる蓮葉どき
大岡川
黄金町
長谷川伸生れし川端柳の辺
沿線の桜飛び込み飛び込み来
花霞十字架小さき丘に立ち
一吹きに運河を渡る花の風
川あれば川に枝垂れて花の枝
川に倦みたれば桜の枝へ一羽
漣の次々起てる花堤
花あかり差し込み川の面染めぬ
花どきの運河の夜風顔にくる
野毛山
桜咲き野毛は大道芸の町
ここいらは嘗て戸部村花処
野毛山の桜昭和の戦見て
花の山海を望める陣地経て
野毛山の桜見上げる許りなり
野毛山の坂の桜に息継ぎて
生徒らの凶工の時間花を描く
老い桜幹に似合はぬ花附けて
動物園入口脇のさくら古り
野毛山の花見ぞろぞろ子供連れ
前方に学校が見え花の山
花を愛で日和を讃え伊達鴉
吐息つく度に見上ぐる山桜
大鴉桜の枝に翼畳み
雑木より一色濃ゆき山桜
枝トんと発って鴉の飛翔せり
花見酒「野毛の山からの「おえ」
夜桜の五百の雪洞灯の入りし
動物園
花冷えのコンドル無垢の襟卷す
老人の貌のコンドル春惜しむ
横目にて像は吹雪ける花を見る

花照る中チンパンジーは何誇示す
水中の蝌蚪の紐揺り止まぬ風
水道の水迸る朝桜
花どきの鶉のうわまえはね雀
白鳥の蹊花に負けぬいろ
黒豹の檻吹き抜ける花の風

ZENGA 展 ギッター・イエレン夫妻コレク
ション

運ちゃんが話して天気と花のこと
降り立ちて桜木町の桜どき
橋渡り柳のところを折れて右
橋たもと宝籤屋に降る落花

解説も砕けてのどか ZENGA 展
円相圖

○（まる）を描く齡が肝腎目借時
東嶺円慈
うまさうな大蕪に似て円相圖
蕪に似ていや笠に似て円相圖
蘇山

南瓜手に抱え乞食大燈圖
白隠の禅風荒ぶ花のとき
やあやあと仙崖の猫いや虎圖
花冷えの禅画禅味の風吹かす
白隠の一ツ目達磨花冷えす

ひょうひょうと拾得吹ける落葉風
大燈のまことをや見ん案山子づら
のどけさの蓮池観音細おもて
花冷えに目をむく白隠達磨像
布袋腹春の風より軽やかに

一円相花びらに見え笠に見え
達磨圖にべたと花冷え花押かな
毒月船師とす御坊の花見絵圖
花よりも白く禅画の布袋腹
南天棒「雲水托鉢」

陽炎ふて南天棒の托鉢僧
慈雲
花冷えものかは背面達磨像

花どきの仙崖破格の布袋の圖
天界へ跳んで白隠富嶽描く
白隠の書画踏み破る花ごころ

南天棒讚「奉公はかげひなたなき案山子か
な」
あなどらる南天棒の案山子かな
南天棒讚「この棒に怖るゝものは極楽行」
黒凍みの南天棒の南天棒

のどけしや槌置き大黒お留守の圖
白隠の百壽圖春をもたらせる
仙崖の布袋ふくろに春風入れ
花などと巨海の達磨すつとぼけ

遂翁の日永達磨のすねた顔
七福神嘉す鼠の正月圖

白隠蛤蜊観音
蛤よりひょうと観音現ずる圖
好々爺布袋の腹も花冷えす
白隠一富士二鷹三茄子
鷹の羽もつて鷹とす一富士圖
正宗寺清見寺蔵

花どきの達磨圖二幅掛け並べ
白隠盆石圖
永き日の白隠陰毛隠し描き
永き日の ZENGA 展観腰疲れ
花疲れならぬ個展の腰疲れ

元町公園
落花吹き上がり港の見える丘
横濱の丘の桜の花巡り
百千の落花の映ゆる煉瓦道
切通し花踏んばって踏んばって

花花と称へつ下りる花の谷
元町の桜の下の通学路
花の山のぼれる裡がはなと婆
貌鳥のこゑの絶え絶え夕しじま
花吹雪洋館跡の煉瓦積み

夜桜の花見準備のはしやぎやう
墓地にくる夕冷えに早やなじむ花
夕桜ゆさゆさ外人墓地外れ
飛花吹き付け外人墓地の石の門
十字架（クルス）又十字架の間を落花縫ひ
若木にしてこの透明な花の傘
精油所の煙もくもく桜どき
不景気をぼやいてみても紫荆
大将と云はれ髪刈る花の昼
雨冷えにぎゅつとつぼめる花蕾
真昼間の家の緋桃を盗み見て

曇天の冷えふりかぶり朝桜
この先も斯うした花の日の続け
鳥のごと来てゐる花の只中に
花しまふ木もあり朝から冷え込む日
分別をつけるごとくに花散れり
玲瓏と冷え込む花を鳥潜り
山中に達者なりけり大桜
上枝より落花飛脚の発つごとし
曇り日のそゞろにむかふ朝ざくら
歴々の桜あほぎで通りけり
散る花にもしこゑあらば頬伽鳥
煽られて散る散る花の白拍子
水ほとりに引合はさるる朝桜
見送りて花間抜けゆく鳥の方
出まかせにつく嘘よりも花白し
あとは散るばかりの花にふむ酒
吾を外れゆく落花ひとひら朝比奈道
起伏しのとある日花をもたらしぬ
この後は北におもむく花追ふて
せりあふて名も無き山の花吹雪
むさき身を花の押照る中に入れ
花の上をざざつざざと吹くあらし
振り仰ぎすうと吸ひ込む花の風
何事とさくらのさはぐ一ト処
満開を迎へる花の余り枝
きろきろと辺り窺ふ花の鳥

花間より首を覗かせ花の鳥
花懐水のごとくに迂る鳥
花の枝にヤツと飛び付く鳥見たり
移り来て間近くなりし花の鳥
咲きぶりも思ふた以上花の山
水平にさくらは鳥に枝を延べ
行く人の顔ほころばす花の出来
亀の上に亀の乗つかる日の永さ
かんばせに移りて花の心ばえ
さんしゅうの花の面目立ちにけり
櫛の芽吹きぽやっぽやっ薄みどり
横濱に老うて桜の標本木
横濱の春告ぐ花の標本木
ままならぬ世とあきらめて花沸々

新宿御苑

タワ―見て廻る花どき山手線
花を見る撮る描く酌むと人さまざま

パツと散る花に飛出す韓国語

手入れよき枝垂れ桜と仰ぎけり

暗箱を覗いて桜撮らんかと

日当たるを待って桜の写真撮る

花褒めの言葉はとんだ中国語

花吹雪くさくらへとんだ中国語

背後より桜へ飛べる中国語

花は今盛り鴉も宴かな

花莖抱え挨拶交しをり

首筋がひやつとあふぐ初さくら

肥満児のおたまじゃくしも泳ぎをり

おたまじゃくしへなへな泳ぎしたりけり

くろぐろとざりがり釣の棒の影

鉛筆で季語の杉菜を指しにけり

小一時間程みて御苑の花の下

千鳥ヶ淵

濠の風あれよあれよと花散れり

夕づける花を引締め濠の風

夕桜鴨は岸边に寄りつけり

一幅の絵になる桜九段下

花の間鴨広がりて広がりにて

登城せるとく罷れり花の中

武道館にヤットウのこゑ花の昼

ひっふつと千鳥ヶ淵を飛花よぎる

定形を保てり濠の糸柳

内濠に沿ふて柳の間合かな

花好きの日本人の顔顔

さむさうな柳がちよぼつと濠ほとり

花の城かてて加えて柳どき

内濠へほろつほろつと飛花こぼれ

糸柳芽吹き毎日新聞社

濠の風募りて鴛の埒どき

ジョギングの息継ぎ息継ぎ花の中

鳥廻り込んでさくらの懐へ

石垣の飛花を優しく跳ねにけり
地を這ふて飛花の小つむじ大つむじ
ほれこんな芽の付き方は花水木

金沢八景 野島山

芽吹き出す山の一時花きぶし

花きぶし山に紛れて仕舞ひけり

白緑に疲れのみゆる花きぶし

山巻いて有象無象の雑木の芽

山吹とはつたと出会ふ九十九折

木いちごの花しろしろと夕冷え来

落花受く地べた凹凸ありにけり

これ西施これ楊貴妃と桜指し

接骨木のこちらに少しましな花

接骨木のせいぜい誉めてうぶな花

春潮に弄ばるゝ毬一つ

オオヘビガイ出土貝塚飛花よぎり

花屑に沿ふてのぼれる野島山

花屑のをとといの花けふの花

花過ぎの山懈ければ蟻を見て

退屈でペンペン草の撥こづく

似通った彩して芽吹くみな雑木

似かよって山の雑木の芽吹き彩

灌木の芽吹きいろは地味も地味

花莖畳んで四つ折八つ折に

桜薬ぼつぼつ見ゆる花の間

花屑の犇めき合へる轍あり

花の間を何処まで飛翔長き鳥

花屑へ落花ひとひら紛れけり

花屑の中のひとひら返す風

花屑の上に花屑直ぐ古りて

金沢文庫

童唄へば

亀鳴かす唄かもしもし亀さんと

二輪草二輪と云はず皆すぼむ

はつ花にやさしき風を進上す

花を譬はば大観の朦朧体

花たたなはり大観の朦朧体

花重疊して大観の朦朧体
花の谷分け入る風の筋が見ゆ
山桜吹き余る風背に下山
ぺんぺん草合いの手を入れ花吹雪
房と房打ちつけ合ふて花嵐
花きぶし潜り入山致しけり
花下の池筏作りを始めけり
落花浮き天ノ橋立為しにけり
亀を見る老人を又亀が見る
花嵐荒む山路に顔吹かれ
壺すみれおもひのほかに濃き山路
さみどりの垂線垂らす花きぶし
やぶれ傘罪もないのにお婆傘
煽られていよいよ淡し櫟の芽
さみどりのきぶしを潜り入山す
山すみれ桜大樹の根を慕ひ
花吹雪会話ずんずん弾みけり
花吹雪素つ頓狂なこゑ挙り
花吹雪枝の隅々に目を配る
先手取るごとく咲き出すこの桜
花吹雪次の一ト吹き待ちある眼
花吹雪そびらに駈け出したくなりぬ
花屑の中に腰据えさくら描く
花吹雪く度に両手をひらく人
たち止まり先づ山を誉む花の人
立ちつくしそのまま浴びぬ花吹雪
飛花ひとひら追風うけて奔りけり
住職は嘗て悪童蘇枋どき
かんばせに受けて花吹き余る風
老人が躡みタチツボスマレの辺
殺生なことをするなと浦島草
花房へすうつと鳥の首が伸び
向き替えて桜を見る男かな
木蓮の荒める風にしけた花
花の鳥振り上ぐ嘴の瑞々し
枝垂ると云ふより流れ花の枝
ほろほろとさくらを亘る風の翳
昼月と淡さ比べを花の梢
花を訪ふ鳥のほかには風ばかり

ほろほろと落花放浪山頭火
花房を拾ひ挟める革手帖
鳥のごと発つて桜を振り返らず
花つきのよき木とあふぐ二人連れ
日は闌けて三時を廻る花のいろ
桜誉むこゑもいろいろ女共
太幹に手をつきながらまだ八分
夕風に近き風吹き花散らす
風止めば胸撫でおろすやうな花
空浅く日暮を迎ふ花の山
桜若木なれど一病汝も負ふか
みえてくる花の病ひはてんぐす病
朝夕の殊に夕べの花の相
奢るとはめつそうもなき家桜
花眩しむ人を眩しみ通りたり
称名寺裏手の春の一番草
我が儘を通すがごとく桜咲き
風と鳥そぞろに亘る花のうへ
盛り過ぐ花は飽かれて空けいろ
池尻に小鷺栖つく花の雨
花の鳥窺ふひとを脇目かな
あかがねの亀とおもへば首動く
花見衆ぞろぞろ仁王の脇抜けて
近寄れば目許くりくり花の鳥
小走りに花の上亘る風の翳
お惣菜持ち寄り花見の嬉衆
野毛山
花の山市中に嘗て焼夷弾
夜桜の花の向かふに焼夷弾
横濱の花触の風吹きにけり
花の山のらくらのぼりつと下りぬ
紫荊不景気づらをする勿れ
銭湯が一つなくなり鳥雲に
女肥って仏陀の胸幅燕くる
花どきの湯屋開く時間見計らひ
絹莢の丈ここ迄と胸を指し

教室の窓はさくらに開け放たれ
釈尊の召すままに逝き涅槃の日
映画字幕チカチカ花の昼蘭けて
花どきの器いろいろ砂遊び
はだしにて砂場に入る子桜どき
チューリップびしょびしょになり水遣る子
チューリップ喜ぶ水を遣りにけり
郁李の小心者のおちよぼ咲き
花嵐トタンの家の何処か鳴る

はくれんの千の破竹の無垢の珠
ひやつける花に只々雨のおと
あまたるう空暮れゆけり仏生会
花の幹打ちて雨おとひやつける
花房へちよろちよろと風出にけり
花散るに任す桜の葉ごしらへ
田舎じむ桜いつぼん畠道
猶りきむはくれんの珠雨しとど
内々にももの云ふやうや桃の花
家桜家運傾くごとくなり
家内に孫遊ばせて春の暮
花も稍盛りを過ぎて本返す
産土の殊に櫂の芽吹き方
面白きものに櫂の芽吹き方
好きずきに芽吹く櫂の面白や

椿壽忌の朝比奈口よりバス入れり
山吹に登りのバスのエンジン音
地図開き道を聞きをり花の昼

段葛

花見衆の頭（つむり）頭や段葛

川喜多家

窟小路僧が歩いて蘇枋どき
夏目漱石全集に射す花明り
笠智衆みさうな家の庭桜
花を見る装（なり）もモガモボ風の連れ
正座して花見ること川喜多家
飛花潜りゆける花の間広かりき
花吹雪妻の話の腰折りて
大木と聞きをる櫻是なる歎

寿福寺

椿壽忌の椿もて茸く花御堂
鶯もあほだら経を誦す忌日
鶯もあほだら経を誦し虚子忌
巡り咲く椿は椿虚子は虚子
花御堂居士にゆかりの椿茸き
大輪の椿を嘉す花御堂
忌に参ず虚子一門の靴の数
紅白の間のつばきも花御堂
鶯の一声法要真只中
寝かせ置く甘茶の柄杓尻触れて
立話杖持ち換へて虚子忌かな
隆として柏楨老樹虚子忌かな
若楓虚子一門の集う寺
仕出し物届いて虚子忌の旦那寺

椿見て句帖を開き書き止める
寿福寺の墓地の椿の故ありげ
忌を修すひとも杉菜もくもくと
墓の隅年尾のくわりん芽吹きをり
墓原に虚子忌の杉菜もくもくと

灌仏の柄杓の混める花の塔

極楽寺

忍性の開ける寺の諸葛菜
花御堂前に戦中話して
花御堂ぐるぐる廻りに近所の子
ごふじょうと厠を乞へる花の寺
参道にゆすり蚊揉める甘茶寺
干竿に訥々として柿芽吹く
ぽろろんと誕生仏に喜捨の音
甘茶懸く女の肱のすつと伸び
女童の甘茶灌ぐに背の足らず
とろとろと足を運べり甘茶寺
花御堂守は檀家の古者にて
交替で昼餉を取りつ甘茶番
浴仏に妙なるものを降り注ぐ
徒然に花つれづれにかんぶつ会
誕生仏山吹いろの甘茶浴み
花あれば花のもとにてかんぶつ会
杖を突く音のぱったり花あふぐ
極楽寺駅に戻りて花疲れ

忍性墓

鶯も経をなむなむ五輪塔
著莪咲いて蒙古退く僧の墓
その辺り著莪咲くばかり五輪塔
五輪塔一山の花過ぎてをり
忍性の大五輪塔鶯鳴く
忍性の舍利に囀り止まぬなり
諸葛菜忍性ここに頓挫して
極楽寺裏の墓域の百千鳥

権五郎神社

常夜燈万朶の花にイめり
真昼間の緋桃に染り一羽翔つ
飛花颯々水屋の四辺ふちどりて
江ノ電の過ぐ音タチツボスミレ揺れ
花は花楸は楸ぞとひとりごつ
花は花楸は楸にて押し通す

まろび来る落花に楯の聳えたり

長谷幼稚園

園児等に適ふ背丈の花御堂

長谷寺

灌仏の寺より寺へ歩を運び

大仏を割愛したる花疲れ

足と腰くたくた鎌倉花見どき

俳諧をひねる日永や鯉の髭

長老は頭巾を目深灌仏会

飛花浴びて唐かね葺の花御堂

花明り額に頂きかんぶつ会

木の股に猿の腰掛けかんぶつ会

かんばせに山吹映ゆる浴仏会

曲剥に頭巾の古老灌仏会

頭巾して二人の古老灌仏会

黄の袈裟に御坊包まれ仏生会

散華せる緑衣のご坊仏生会

鯉も口開けてなもなも仏生会

光則寺

簡単に花亭組み立てられ閑日

花御堂婆の背らに隠れけり

身を軽るう折りて灌げる五色水

水仙を四柱に束ね花御堂

そら青う青うなりゆく仏生会

かいどうの寺のかいどう真っ盛り

かいどうに負けぬ笑顔を撮りなされ

かいどう撮る人入れ替はり立ち替はり

ふりあふぐ老海棠の棚の空

頂いて海棠を吹き余る風

海棠の夢見ごちを覚ます風

海棠に適ふ明るさなかるべし

退屈な昼海棠に行あたり

海棠に膝を突き出し眺めをり

起つ風に夕海棠を離れけり

日を送り海棠淋しくなりにけり

三椶のみつみつのこゑ仏生会

花御堂参りの男女（なんによ）ふと途切れ

この寺も赤椿葺き仏生会

寺縁起聞いて頷くむべの花

気になるはこの手の花よ花貝母

女共とやかく云へる花貝母

着こなしも小粋な女更紗木瓜

金沢文庫

大観の朦朧体の桜かな

鳥も来て虚子忌も近き椿寺

花筏ひといろ淡きところあり

ひと摘み花屑風に舞はせけり

石畳飛花着地して石のいろ

吹雪くたびこれはこれはの山ざくら

鴛鴦の尻に帆懸けて右左

鴛鴦の風のまにまに尻の舵

ひこばゆる櫂老樹は象科の木

日も開けて油光りに蔦嫩葉

夕雀花屑蹴って発ちにけり

夕雀落花啄むにはあらず

万朶なす花の懐抉る風

道草を食ふもよきもの亀鳴けり

朝雀花の裾にも袂にも

鶯餅噎ぶ齢にあらねども

目にあまる程の飛び方初燕

初燕大きく返る橋の反

花颯々樹下をながるゝ水潺々

切株のまはりに飛花の降り止まず

大き風落花七転八倒す

二方より風吹き込みて飛花交差

枝に縋り鳥の見回す四方の花

花どきの空を吹くかぜ地を吹くかぜ

人は羽目外し万朶の花のもと

花は花人は人ぞと弁えよ

この風に花の乗らんと木を離れ

風冷えて花見返りの人を吹く

水蜘蛛の脚のすすつと葎の水

山巔の花吹く風にふかれ見ん

花薬の目立ち初む木と行かゝり

ひやひやと櫛は芽吹き初めにけり
北面の櫛の芽吹きもどかしや

郷土史家愉しむ桃の源平咲き
花の山迷子放送とよもせり
半島のここで尽く径風椿
蓑虫の一簑一笠箱根越え
千鳥ヶ淵渡りて飛花の第一波
花の島巡りて物見遊山どき
懐旧

大朝寝企業戦士の尾も古りて
花過ぎてもとの閑人爪を切る
花過の蟻のすさびをとくと見て
病院の桜ナースの出勤どき
拾物したる思ひに遅桜
己が彩忘るゝもあり野春菊
さんしゅうの葉を出す明さ百間忌
満月といふこゑ外(と)より虚子翁忌
肺炎を病むと一報蘇枋どき

牡丹より移るあくびを噛み殺し
君其処へ牡丹の横へ吾撮らん
ぼうたんの薫り煽れる朝の風
朝風が牡丹を吹いて雨干ぬ間
朝風に牡丹の雨滴零れさう
牡丹大輪雨をふふみて危ふかり
地に落ちてあかあか牡丹の壊れもの
真昼間の人気うとげな牡丹かな
チューリップけふは曇りと口噤む
ふんぎりのつくもつかぬも花次第
花過ぎて籠りがちなる日を重ね
萍の風に身じろぐ余地なかり
山法師花にあまれる日差しかな
浮草のただよふごとく朝寝して
狷介とは爰を云ふらん浦島草
桜餅芳香うれしき限りかな
花了れば薬ぱちぱちと例のごとし

櫛芽吹き初めて緑のだま為せり
ハローワークの二階の櫛芽吹く窓
芽吹く彩櫛みどりと云ふべかり

牡丹

牡丹襲ふ風は二手に吹き岐れ

ぼうたんの揉みに揉むかせ打合へり

風なぐりかからんばかり牡丹に

大牡丹降崩したり昨夜のかぜ

辯へたと牡丹に疲れ見えにけり

ぼうたんの花びら深く残る雨

雨まみれぼうたんおもひきつて咲く

ぼうたんに朝風交りの雨一時

牡丹に風蟻たぢたぢとなりけり

ぼうたんは紅にして江戸小町

おめかしの乳母日傘の紅ぼたん

天気予報曇りのち晴れ牡丹咲く

一陣の風ぼうたんを吹落とす

ぼうたんがとり散らかつて朝の庭

闇深く夜風と心中牡丹かな

花あほる風千変す紅牡丹

ぼうたんの砕け散りをる雨間かな

牡丹吹き通りすがりの巫女を吹き

三浦勲氏一周忌 岳麓 本門寺

花吹雪花行きあたり行きあたり

雉子駆く頃や勲の一周忌

一周忌いさをいさをと雉子啼けり

三浦夫妻同墳にねむれば

裾野駆く雉子に妻あり夫あり

花過ぎの汝の墳富士が其処にあり

岳麓の花も名残りの一周忌

湧水と汝が奥津城と富士桜

忌を修す弥生の富士のお膝元

貫主さま故人の花の句にも触れ

春の湧水巡りにめぐり一周忌

壺スマイレ白佳し汝の墳山に

花に逝く富士を心の観世音

うらうらと雉子歩まんか汝の忌日

汝の待みし花過ぎの富士空にあり

壺前に散る花古色湛えをり

日蓮の寺にすみれのこぼれ咲
富士嵐ありしや椰の春落葉

燕の巢年経るままに本門寺

送るもの送らるるもの花の寺

蛙今本来の色一周忌

汝に別るごとく雉子に別れ来し

雉子の啼く裾野を去りて帰路につく

一周忌きのふに済ませ大朝寝

由比産の旬の白子がなおらひに

なおらひに花びらいろの貫主さま

漉油（こしあぶら）採りにそろそろ春の山

山菜の丁度今どき漉油

畑毛温泉

山は今芽吹き了へたる肩楽に

山芽吹き緑に交る白みかな

燕くる畑毛温泉湯はぬるめ

気泡湯に太肉打たせ春の宵

花過のうたたね心地畑毛の温泉

春の夜の湯槽を替へて湯治客

花過の出湯の効能書き長し

げんげ田に蛇の沈める真昼どき

蛇ゐるはゐるは蓮華の葉叢なか

田蛙のいかいかい富士も貌を出す

打揃ひ雀の鉄砲五百挺

ハルジオン富士も薄紅帯びて聳つ

湯疲れの真ひるきつねのぼたん咲く

富士に向く湯宿げんげ田前にして

白鷺の首を吹かれて春田べり

田雲雀の姿何処と空睨む

げんげ野を電車が走るすたすたと

藤浪の淡さにけふの藤聳てり

鍼治療院の軒端に燕の巢

午報告ぐ酸葉に雀の鉄砲に

茎立や湯疲れ欠伸誘ひけり

花過ぎの髭の手触り気泡の湯

春草の照りに気圧され湯治客

富士臨む畦の春草照り強め

酸葉の葉裏返しみる病ひ持
げんげ田の風来る中に大胡座
櫟の芽霊峰富士に懸け連ね
春暁の三槽の湯に長浸り
春霞富士はうたたね決め込めり
花過ぎの竹林に入る目暗がり
湯ぼてりを爰に覚ませり葱坊主
春ものの道をはみ出し何の蔓
げんげ田やけふよく見えて富士の方
八重桜花房重う富士を据え
げんげ田に置物のごと白鷺は
田雲雀の揚りどうしに喉乾く
見そめたるごとくげんげの辺に跼む
からすのゑんどう農道いっぽん坦々と
伊豆明けて朝日雀の鉄砲に
朝雲雀覚めよ起きよと畑毛の田
朝の気にげんげも英気養はん
畑みち湯づかれの眼にきんぼうげ
そら豆のぼやけまなこも朝の内
露法師朝一番のげんげ田に
芽吹く柿旭を受けて仏具いろ
春曙出湯に入らんと目覚めたる
春暁の躰を覚ます畑毛の温泉
藤浪は粗く細かく光跳ね
へそ曲り柿の古木も芽吹かんと
柿若葉富士がありあり見ゆる日よ
白鷺の朝餉は何や春田道
げんげ田の甘きかぜ来る鼻の先
絡むあて探せるさまや葛の蔓
のうのうと雲雀揚がれり長堤
木の芽冷え払ひ湯宿のひとり酒
木の芽冷え湯宿の夜着の襟合はず
長堤タンポポを吹く風一里
ひよひよいと野焼跡より春ジオン
菜の花のさびしら咲きも小川べり
田は展け富士の横雲げんげいろ
闌くる日にげんげの色も薄まれり
湯疲れの畦をてふてふ歩きかな
白緑に山の芽吹きは湯のやうに

この村も過疎化のすすむ葱坊主
櫟の芽真昼の空に紛れけり
てんなんしょう杉間を幽き風吹けり
柿若葉いっぽん激し田舎寺
指圧師の家のすおうの花盛り
生欠伸柿若葉より貰ひけり
朝富士もげんげも淡く宿発ちぬ
三嶋大社
轉りの三嶋大社の奥社まで
乙鳥飛び海道筋の大社
花は葉に東鑑にのる社
桜葉降らすや三嶋大明神
三嶋大社詣で帰りの心太
甲羅干す亀見て日永いや気長
桜葉降り大社の石畳
八重桜大社の巫女と行き交へる
八重桜睨重たくなりにつけり
花過の昼のうなぎ屋立て込みぬ
東海道三嶋の宿のうなぎ喰ふ
うなぎ屋の黄のおしぼりの轉りさう
大南風入れて三嶋のうなぎ屋は
鰻喰うて柳の風に吹かれゆく
柿田川
水草生ふ柿田川べり腰下ろす
湧水に見ゆるよ見ゆるアブタハヤ
芹の領クレソンの領湧水過ぐ
山藤の芽吹き水辺の灌木に
湧水にミシマバイカモ波打てり
湧水見てサナエトンポに出会う徑
柿田川水辺の百樹皆芽吹く
湧水の砂噴き上げて春うごく
湧いてくる富士の真水に水草生ふ
山吹の葉に瑠璃蠅の翅たたむ
木々は芽吹きトビケラは羽化に忙しき
羽化一番乗りのとんぼと出合ひけり
芹の葉に初お目見得の川とんぼ
もうとんぼ羽化してをりし柿田川

芽吹き最中トビケラどちの羽化支度

せせらぎにトビケラの羽化始まり

云うてみてトウカイタンポポ佳き名なり

芽木明り水底に射せる柿田川

柿田川水辺の芹の大きこと

柿田湧水根芹の森をながれけり

湧水は一気呵成に芽吹きどき

湧水に拵ぐる枝の芽吹き急

柿田川中洲の春の草の丈

芽木の間柿田湧水こんこんと

藻草の辺春の湧水ひよつこりと

せせらぎにトビケラ一族羽化を待つ

もんしろ蝶水より迅く柿田川

せせらぎに羽化待つとんぼ柿田川

もんしろ蝶水呑みにくる柿田川

柿田川春いちめに水の綾

湧水に砂のぼこぼこ春日中

富士山の湧水芽吹き促すよ

音なして芹のあなたの柿田川

さと芽吹き伏流水の上の榎

柿田川根芹に直にあたる水

山吹はいささか冷えし風好む

湧水に芹も強（こわ）げな茎のいろ

湧水は真沙噴き上げ芽吹きどき

藤の咲く空あいまいにあいまいに

はつなつの水ぞたばしる柿田川

私有地の竹林の露大きこと

湧水のたばしる上に榛芽吹く

春光を芹に振り撒きゆける水

湧水の芹根にあたり音をなす

筋ひいて藻草も柿田湧水も

三島駅土産の山葵提げ待てり

躍り出て浮世を覗くやぶれ傘

河馬「重吉」死すと聞きけり春の果

蒸し物の音のことと小晦日

噴水に抽象画展の疲れとる

生き難き世の中いふや椿餅

雨よりも人氣疎きと八重桜

恋過ぎし猫を細らせ雨降りぬ
榊も又我あり顔に桜どき

武山 三浦富士

岬巡り車窓より入る五月風
浦島草引きちぎられて道の端
この辺りカントウタンポポかたまりて
つつじに虻図体あづけ蜜吸へり
背合はせ釣糸垂れぬ浦島草
からすのゑんどう風も冷たくなり
にけり
淡淡と接骨木の花大島も
山道に毛虫の落ちて忙しき
遠足の列の子毛虫跨ぎゆく
海上を迂り来し風黒揚羽
夏山へ繰出すリュックサク族
大島を見んとのぼれる木の芽山
桜の実大島が見ゆ見晴らし台
三浦富士登りてくつくつじ季
岩つつじうすむらさきに相模湾
岩つつじ海も紫帯ぶときあり
山藤の嫩葉もみくちや大南風に
樟櫛みどりこき交ぜ大南風
三浦富士登山地獄の釜の蓋
山道に毛虫を落とす青嵐
毛虫這ふ山道ここにもあそこにも
どの木より落ちし毛虫と頭上みる
山歩きここは急坂夏鶯
芽木の間海見え蟹の横這ひ道
虎杖に元氣を貰ひ岬みち
汐騒にくるり背を向け浦島草
飛んでくる虻真つ黒け二輪草
浦島草すつくすつくと遠汐騒
山道の幅員広し芽木明り
一曲も二曲もある浦島草
木洩れ日に群れを待める宝鐸草
ぱったりと足音途絶え宝鐸草
山道へ春ものの蔓這ひ出して
上下して水木の花と水平線
水木の花横一線に相模湾
山歩き水木の花に一服す

羅の被りものして破れ傘
山深み浦島草の葉の蒼み
鳶の羽破れんばかり大南風
白浪の絶えず沖より著菘の花
潮風をまとも櫂の片芽吹き
山道に引っこ抜かれし浦島草

鎌倉

佐助町著菘の咲く路地猶辿り
甕にわいわい金魚屋の布袋草
楠若葉むんむん御成小学校
百千鳥小学校は山の傍
覚えたてのくさばなにして草の王
緒き新芽萌黄の新芽に目を遊ばせ
いちめん櫂の芽吹き杜のそら
ずん抜けて杜の櫂の片芽吹き

魚佐次（割烹）

五六枚夏座布団の縞模様
夏座敷茶のうまければおかはりす
座布団の位置を直しぬ夏座敷
取皿の文様眺め夏座敷

源平池

デッサンの浮葉浮葉の間合ひかな
五つ六つほぐれそめたる蓮巻葉
鯉の背の網目に春の日の透る
藤棚の下かぜ潜りかぜ潜り
さくらの実下枝伝ひに風吹けり
泥煙むくむくあげて五月鯉
浮葉の間をりをり鯉の背を見する
亀泛ける水面の若葉曇りかな
宮鳩の若葉曇りのでつぼう
いちはやき桜の青葉曇りかな

鎌倉大谷記念美術館

青邨の牡丹どっかど大壺に

杉山寧

牡丹図の輪郭線は勁く描く

団々のつつじ植え込み美術館

岸田劉生展

羅の人の近寄る麗子像

麦秋の眼凝らせる麗子像

眺めぬ麗子微笑図汗ばめり

劉生の習作春の坂の草

劉生の道の画ばかり夏近し

劉生の典型麗子春服図

旧浜離宮庭園

街の鳥爰に憩へり楠新樹

たんぽぽや一枚脱がねば目が出さう

葉桜を猶蒼く風吹けり

葉桜となる迄吹かれづめの日々

楠芽吹き相も変わらぬきのふけふ

無為の日々葉ざくらを風養へり

覗き見てうたたね顔の昼牡丹

終も亦一入牡丹の崩れやう

大き蠅牡丹臭さを帯びて発つ

季を得て咲ける牡丹と散るぼたん

目算といふものありて牡丹咲く

ぼうたんのぼたん臭さよ風は絶え

ぼうたんの花瓣解くおとはつかにも

牡丹園牡丹臭さに蠅も馴れ

とりどりにその名床しき牡丹園

ぼたんの名の由来あれこれ考へて

さしかかるぼうたんの名は陽明門

洒落た名のぼたん陽明門を過ぐ

渡来物？麒麟司といふ牡丹

日にさんさん帝冠といふ牡丹

温厚な花のいろして島大臣

これからが愉しみ長楽（おさらく）てふぼ

たん

長楽（おさらく）てふ牡丹とはよう名付け

たり

長楽（おさらく）てふ牡丹に暫し刻忘れ

このぼうたん「七福神」とは何処指して

「大正の光」はいかな牡丹にて

日暮てふ牡丹に暇告げなんと

ミニチュアの太陽真昼間てふ牡丹

白にして風に漣なすぼたん

風小僧ぼたん散らしてゆきにけり

踏む土のふくいくとしてぼたん園

ぼうたんの一株毎につく吐息

散るも亦一入と見て紅ぼたん

蠅のごと牡丹に人のたかりをり

蠅のゐる牡丹の前で一服す

牡丹みる話の合間合間かな

ぼうたんに疎んぜられて発つ蠅か

牡丹の首盛りを過ぎてぐらぐらす

詩囊の襷斯く深くあれ紅牡丹

日の闌けて牡丹ゆるみにゆるむなり

たんぽぽの茎折ればそと哭きにけり

たんぽぽの絮の一つを壊しみる

たんぽぽの絮を吹きたくなり手折る

水上バス岸を離るる松の芯

汐入の池に海月の闖入す

昼月に向きて海月の四つ目かな

ひっきりなし鴉に啼かれ松の芯

庭園の藤棚を出づ目暗がり

藤浪の日当たる所戻る所

鴉啼き松のみどりを養へり

属目

病ひ持十葉の葉を裏返す

鈴蘭に横より突きだしむさき顔

街に殖ゆドッグウッドといふ名の木

犬と顔見合はすときも藤の昼

かたばみを捨てて電話に出でにけり

牡丹剪るやただちに風の吹き起り

風にあらがふ紅き牡丹を手繰り剪る

牡丹さくけふあすあさつてしあさつて

引き籠る家に皐月の風通す

何時となく桐の咲きだし咲き了る

横柄な鴉が啼くや青葉どき

どぜう屋の隣りの坐より夏の蠅

春昼の雀啼きをる昼餉時
職引いて一年経つか桐の花
住宅地柿若葉のみ鮮らしく
蔓もののだらんと春の日の闌くる
港区の街路樹ドッグウッドかな
花見酒おてんと様も高いうち
柿若葉皆富士に向く家のむき
キューピーといふ名の先生卒業期
菠薐草妻奨めれば箸伸ばし
血の基とははのすすむるほうれんそう
降り止まぬ雨の重さの八重桜
春うらら湧水うらら柿田川
棕櫚の花リストラの世の生々し
春興やとぼけて下着売場に入る
人は皆足より弱る西行忌
このところ頓と出むかず西行忌
栄螺の蓋裏返してみてひとり酒
栄螺の蓋何にもならぬ釦にも
一切にかかはらず生き栄螺の腸（わた）
小品のよろしさ栄螺横たふ図
壺焼やリストラの風吹ける世に
すこし冷ゆ夕べの風や楠芽吹き
杜の空芽吹き風の風が高吹けり
天皇賞走破の馬に春の雨
天皇賞走破の馬体湯気揚げて

港祭り 横濱国際仮装行列

年寄の日焼け気にする祭かな
 日傘して立ちんぼ仮装行列みる
 横濱の港の空へしゃぼん玉
 バトンガールバトン抛れる五月空
 犬抱いて港祭の蒸す最中
 ハンカチにて顔に風遣る祭かな
 港祭りかっぱれも出て赤襷
 龍舞の黄龍放てる五月光
 祭見の立ちんぼ疲れ馬車道に
 龍舞のジャランジャランと祭くる
 龍舞の爆竹の香の強く南風
 蛇踊りのさすが祭の空高く
 あんぐりと口開け港祭り見る
 マーチングバンド皐月の汗飛ばし
 ミス横濱笑顔振りまく祭かな
 白服に浜の豆ッ子鼓笛隊
 南風を切り行進ボーイスカウト旗
 横濱にズンタカタツタ祭くる
 街路樹も芽を吹き港祭くる
 龍舞のいま駆けのぼる五月空
 真鍮の港祭のブラス過ぐ
 伊勢佐木町
 佐木（ザキ）を練りドンドコ港祭かな
 パレード率て皐月のハーレイダビイドソン
 青江三奈のそっくりさんも練る祭
 マーチに次ぐマーチ祭も酣に
 税関のブラス五月の空展け
 港祭り盛上げブラスの「マドロスさん」
 サルサ踊るピチピチガール夏祭り
 顔の汗拭き拭き歩く鼓笛隊
 港祭マーチに浮かれ足踏みす
 マーチバンドドラッパ突き出す五月空
 仮装行列五月の風にジャズのせて
 崎陽軒シュウマイ娘の祭唄
 消防隊ブラス厳めし汗の顔
 ストリップ劇場に並む焼鳥屋

連休は港祭に出向くのみ

職引いて

黄金週間でふ語嘗ての響きなし
 蠅叩出して素振りの夏来たる

属目

菖蒲湯に歌ひリンゴの唄世代
 櫛若葉吹かれて天の揺れ出せり
 櫛若葉葉騒の中を詣でけり
 若葉風参拝の掌を吹きにけり
 櫛若葉杜の明るさ天へ抜け
 杖突は木の芽峠となりつらむ
 菜のみどりつまみ八十八夜の箸
 ハイセイコー駆けし世遠くうまごやし
 図書館は明日は休みうまごやし
 灯びの孵るがごとく若葉雨
 静岡に友あり新茶また届く
 新茶淹る湯かげんを友申し添え
 君の云ふ新茶のまろみ諾へる
 藪北の新茶新茶と云ひ注げる
 一束づつうまごやし摘む女の子
 クローバー蹴って遊べる男の子
 苜蓿の空の果駆くハイセイコー
 播り粉木の音のづるづる若葉冷え
 播鉢に何播る若葉曇りかな
 旅するとすれば北佐久端午の日
 北佐久の友健在や端午の日
 洪柿も雨に沢山花を付け
 コップに水なみなみと注ぎけふ立夏
 葉ざくらの戦ぎ見てゐてうたたねす
 うたたねの座敷に立夏の風を入れ
 本返し本借りて来ぬけふ立夏
 葉騒また立夏の音を立てにけり
 妻方は会津出鱈の山椒漬
 六十となりし我にも子供の日
 皿のもの一ト眺めして子供の日
 子供の日近し葉っぱのフレディ読む
 菖蒲湯や昔好みの肌着にて
 犬啼いて明るき裡の菖蒲湯に

シャンプーの壇のももいろ菖蒲湯に

まてば椎若葉もりもり小公園

愚図ついていつになつたら五月晴れ

修学旅行始まるてるてる坊主どき

御不浄と云ふ語遣れり著莪の花

この辺り厠のありし著莪の花

棕櫚の花何んにもせずに家に居り

汲取の世も遠くなり著莪の花

毛虫つく頃の柁と見てとほる

安請け合ひ以後慎めと亀鳴けり

連休の若葉曇りの初日かな

連休の中日の毛虫退治かな

春の雷先づは太鼓の小手しらべ

若葉風若葉雨とが入り乱れ

布袋草浮世の塵を身に留めて

巢作りと燕棚田の泥持参

風はもう草木靡かす五月前

夜も芽吹く櫛に風の募りおらむ

指圧して五月の妻の五十肩

燕来と先に云はれてしまひけり

躓いて咄嗟につかむ皐月の宙

ぼうたんを見限りて風荒吹ける

雨の憂さ花棕櫚仰ぎ払ひけり

俳諧のよしみの酒をそら豆に

妻塞ぐときあり雨の棕櫚の花

母廻り込んで花棕櫚仰ぎをり

一ト昔前の木の花女貞

手遊びの八十八夜けふしもや

孫 美雨

女童のにこりと八十八夜の眼

顧みる友・酒・俳句棕櫚咲けり

猫柳雫切ることうれしげに

ひよつと心に止まるごとくに蝶止まる

はきはきと葉ざくらどきの杜雀

心太風情かっこむ如くなり

じゃんけんのグウチョキピアのユリの木咲

く

布袋草こころ晴ればれする日なり

粋な名を貰ひあじさゐ新品種

馬堀海岸

小学生以来よ崎の汐干狩

観音崎

浜大根浜ゑんだうに昼の風

装ひも定九郎めくあめふらし

岩蔭より定九郎めくあめふらし

定九郎ぶりの海牛黒奴

海牛の海中散歩卯浪晴れ

海牛のモウモウ歩きしたりけり

海牛の愚図が卯波の底を這ふ

海牛をおいてけぼりに忘れ潮

舟虫這ふ岩をひよいひよいツブ貝採

昼の海薄日が差して茅花いろ

花海桐にほふ坩堝に景勝碑

週末の海ひろびろと花大根

おそろおそろ舟虫の上に影落とす

フジ壺の岩裏返し磯あそび

長渚つばなの上の昼の海

ふじ壺を踏みしめ南風に魚信（あたり）待

つ

ベラが釣れ父子お祭り騒ぎかな

あめふらし打捨てられて団子状

舟虫の髭覗かせて岩庇

舟虫の一族潜む岩庇

海牛の屯す磯の牧開き

磯臭き風花とべら罌けり

汐干岩締めて強情ひざら貝

卯月浪海ぞうめんを養へり

ふじ壺の壺も覗きて磯あそび

日晒しにモンブランめく海ぞうめん

海牛の首を振り振り夏の磯

鮑大常節大の子産石

素足佳しクロイソカイメン踏んずけて

燈台を見上げて登る空木みち

岬五月とんびに貌を掠められ

大南風に生簀の浮玉ひよこひよこと

燈台をくるくる登る鯉どき

浜大根岬の青空広がって
桜ノ実横須賀鎮守府砲臺跡
桜薬人知れず降る砲台跡
海よりの南風を振り切り筋揚羽

浦賀

湾へだて卯波曇りの二夕社
渡船場の橋桁の牡蠣卵浪打つ
油ぎる浦賀湊の山若葉
紫蘭咲く浜の細路地浦賀町
咸臨丸船腹いろの黒つばめ
黒船の浦賀の燕黒礫
山若葉浦賀のとんび錐もみに
蘇鉄の実ここだく黒船寄りし湊
一湾の南風吹き上げ山若葉
乙鳥の黒素っ飛んで浦賀沖
卯浪切りずんと浦賀の渡し船

風奔る岬のあぢさゐ行て見ん
 蟻地獄石ころ一つふるまはん
 かがんぼはかやうに物に掴まるか
 だらだらと枇杷の実落とすむかし今
 桜の実一つ一つの夢あらた
 相模灘卯浪に揉まれはだか島
 打ちまじり吹かれ荒磯の浜大根
 あぢさゐの彩の違ひを見て行ん
 まんばうに振り落とさるゝ扱は夢
 にはうめのそこそこ咲いて実のなる木
 花そてつ黒船の世は嘘やさぞ
 新緑にまみれて来たとき好き
 賢かうもお日様向いて桜の実
 燈臺の下のあぢさゐ色をまし
 朝の内まいまいつぶろの呼ぶ雨か
 見つけたる毛虫辻つま合ひにけり
 海照らふ魚付林の総若葉
 荒蔓の勝利を得たり真葛原
 一とほり海月泳いで見せ呉れぬ
 器用に生きることとはともあれ棕櫚の花
 天保の好みの彩を濃紫陽花
 地を吹く風百足の脚を取乱す
 南風に奏づは弁天様にまします敷
 あぢさゐの彩味つかぬうすみどり
 風味ある風が吹きけり桜の実
 鴨足草坊への径の上すべり
 向日葵は雨の晴れ間の日を荷ふ
 あめふらし散らかり遊ぶ磯の牧
 日痛みし風痛みして庭牡丹
 筋揚羽海より来たり飛び去りぬ
 稿飛ばし机上へ吹き込む五月風
 海見んと一段のぼる濃紫陽花
 ここみどりかしこみどりや浦祭
 山百合に幾たび替る風の向き
 寢床より起キ立ツ吾に大南風
 出不精の五月の風にあやからふ
 実梅落つ一夜一夜を重ねけり
 定年の墓の棲みつゝ家となり

追風旭鷲山を搗(か)ち上げて
 海・山の醜名を負ふて夏すまふ
 淡交のやがては切れて棕櫚の花
 黒南風に氣勢上らぬ岬の鳶
 舟蟲をびゅうと吹いて南風逸れし
 図書館を覗いて戻る街薄暑
 櫻若葉翻弄されるまま日暮
 木鋏を庭に鳴らして薔薇の季
 高倉健
 一語一語考え話す健の夏
 物騒な杜となりけり鴉の巢
 櫻若葉揉まれに揉まれけふも晴
 緑陰の下風に背を吹かれゆく
 緑陰の枝見上ぐれば白き鳩
 にはうめの花の季いま実結ぶ季
 ユリの木の花沢山や市民の木
 夏掛や床づれといふ尻こぶた
 雀いろどき家の奥まで青嵐
 緑陰に潜む鴉の目の何處
 風凄く櫻若葉を押ひらく
 櫻の葉吹かれて躍る祭月
 風五月吹かるゝものは皆浄し
 佳きかぜをふるまはれけり夏座敷
 此のほどの梅雨のはじめの雨なりけり
 いざいざの鎌倉にこそ乙鳥
 青嵐一方は山一方は川
 布袋草浮世にも似ぬ世に棲みて
 緑為す松の深みに何の鳥
 吹かれゐる夏の櫻の鉄火肌
 洗濯のかたづけ物や夏畳
 杜奥の楯のすはりや梅雨間近
 自墮落になる柿の花日和風
 泰山木の蕾打つなり雨追風
 けふ立夏の風や机上を上すべり
 子子の貌振り上げて振り上げて
 葉影混む杜の木梅雨へまっしぐら
 毛虫木より落ちて地べたを一もくさん
 五月蠅しと手に振り当てる浮塵子かな
 胸元へあらいそがしや団扇風

黒松の芯の高力低ク東海道
海見えて松の芯立つ東海道
打ちけむり神鳴雨の三崎方
雨音の顕ちて渡れる南瓜畑
火炙りに算を乱せる黒毛虫
隣る葉に毛虫の移る忙しき
夏むきの肌着を出すや六畳間
夏からや躰鍛へる遠歩き
つれ衆の替って釣れる金魚つり
一ぱいの麦湯呑み寝る覚悟せり
洗濯のかたづけ物や夏畳
海風に舌を当てるや浦島草
この暑さ胸元何ンべん扇いでも
天人の衣を所望三尺寐
結構な商家の構え柿の花
油断して吾が出来秋の布袋腹
すつとした顔になりたる心太
校正の気をやすむるや心太
読み切るとひとり気負へば青嵐
葉の上の花の揺れづめ山法師
葉の暗み花浮き立たせ山法師
山法師いま翔び立たん構えかな
照る曇る泰山木の葉の深み
菖蒲湯の熱きに五体ずんぶりと
家ぬちに風を通して葛ざくら
庭先の石にねむれり蝸牛
鳴神の雲踏み外し踏み外し
あぢさゐの白定まらぬ一回忌
夕若葉吹いて納まりつかぬ風
しゃうぶ経ていまあぢさゐの主かな
海を揺り山を揺り立て大南風
木に水に橋に子亀に青葉風
武具馬具と昼寝覚めたる人云うか
けふの出来事妻から話せ葛ざくら
天が下菖蒲の折葉立葉かな
杜若空には雲の覆ひ物
夏すまふ力士の叩く尻こぶた
降られてはその後晴れては今年竹
楠・銀杏・櫨わかばの放つ風

ぴんしゃんと一八咲かせ染物屋
舟虫がちよろちよろ足の踏み場なし
細う吹く風引込んで葵路地
青葉照昆廬遮那佛の御胸まで
毛虫の悪事妻譏ること譏ること
岩に手を掛けて退ければきよと蟹
かう吹いてかう来るかぜと端居せり
子燕の巢より覗けるあたま数
屯して数を頼める葱坊主
著莪の葉の薄びかりせる水子佛
我が家の薔薇隣家の薔薇に遜色なし
花ざくろ「雨に唄へば」口衝いて
花ざくろこれから梅雨が深くなる
薔薇高く咲いて面目立つるごと
十葉の呪い咲きも閻魔堂
女貞同級生の家に咲く
深梅雨の鼻毛ちよきんと散髪屋
梅雨の髪ばさと刈り込む散髪屋
梅雨の貌かうもり傘の翳帯びぬ
天気予報梅雨入朝から晩まであめ
勝機あり棕栢生々と咲けるそら
葛蔓の殴りかからんばかりの空
懐旧
片剣の蠅取蜘蛛に勝機あり
堂裏に鬼の八重歯の額の花
東京 港区 自然教育園
東京の梅雨空あほぎ勤め人
東京の梅雨空仰ぐ日もありし
ぴしゃびしゃと梅雨の五反田アスファルト
蝙蝠傘（かうもり）の品定めして梅雨車中
東京の梅雨季車中に傘林立
肱を曲げ傘懸け梅雨の車中にイッ
十葉もいつちようまいの梅雨の花
ぽこぽここと叩いて梅雨に入る椹
松平讃岐守下屋敷跡
松古りて大蛇（おろち）になりぬ下屋敷
下草の白光放つ梅雨の森

黒揚羽一息入るゝ大樹の根
くろもぢのすらつと梅雨に入りにつけり
木雫落ちふたりしづかの閑破る
葉の下に何かもぞもぞ花浅沙
らしょうもんかづらも虫に喰われ梅雨
木苺を一つどうぞと奨められ
雨滴にはあらず蒼のなるこ百合
葉ざくらの雨振りかぶる音を聴け
あぢさゐの七変化見て若からず
目の前でまた向き替えぬ糸とんぼ
この森に子を為す鴉の居着組
叩かれて雨にくたんとなる浅沙
あっちの森こっちの森の梅雨鴉
ぼっちゃん梅雨の音立て沼の主
カサゲを掻き分け掻き分け沼の風
若葉季によきつとヨウシュヤマゴボウ
梅雨鴉あっちの森で啼いてガア
毬あぢさゐ誰もつかねば吾がつく
緑陰に深息ついて枝鴉
緑陰に眼凝らさば鴉ゐる
葉ざくらの暗きに陰謀こらすごと
愚図ついで空も彩得ぬあぢさゐも
あめんばう雨後の沼辺に足慣らし
毛虫垂る糸の辺りを横なぐり
交る鴉吾にわざわざ寄って来て
雨に又風に撓める太藺かな
雨のあとからつと晴れて杜若
バス停
降られては清正公前虎が雨
ひそひそ声洩れくる梅雨の診察室
深梅雨の臍毛の患者煙草喫ふ
花には花吾には吾の持ち時間
空蟬の縫る姿に辛苦あり
寒雀枝のそれからそれへ跳ぶ
黄粉餅喰ふたる顔の撫掃除
ふくいくともくれんの芽のかぶり物
蜘蛛の囿を次々破る昼の興
くちなはの出立ちすがた鏡池

見てゐる間泰山木の葉を落とす
泰山木落花雨溜む神の庭
スプーン状泰山木の新ら落花
小机に埃の頭てる梅雨の家
梅雨晴間晴ればれとして丹の鳥居
泰山木落花は錆びて幾日経し
端折り着の水玉模様夏近し
胸元に当てて夏着の柄選び
ひさびさの外夏着に袖通す
わが好みのアロハ色褪す駱駝柄
砕け散る昔の色の花ざくろ
でで虫の縮むところと伸ぶところ
昔の色昔の雨に花柘榴
蛭蓆叩きくる雨迅きかな
義理堅く咲いて泰山木の花
義理堅く咲く木の花や梅雨が来て
我が家の曇雨まみれにて目の前に
あぢさゐを照らす竹林月夜かな
蛤の饒舌雀の頃に似て
泰山木の花の辺りで雨消えぬ
ユスリ蚊のくんずほぐれつ既に梅雨
さりのよきところで止めて葛ざくら
蟻卓を徘徊梅雨は紛れなし
アスファルト搏つて砕くる花ざくろ
明るさも略々同じ布袋草
心太食うてうたたねでもするか
あぢさゐの上になばらひろびろと
昼の雨明るく降るや布袋草
けふも亦降られあぢさゐ暗くなる
六十余年濛々合歓の花の下
夏椿咲かせ淡々雨の花
跋扈して世迷い言云ふ藪からし
ふむふむと公案喝破瓜の種
毛虫をば焼けとのたまふ天のこゑ
すべてこれ泰山木より落つ木の葉
葛ざくらなど食し午から家にをり
泰山木降らす木の葉を愉しませ
乱雑にその葉を落とす泰山木

あぢさゐの花剪りをればぼつと雨
あぢさゐの色づけること急なりし
毬あぢさゐ一つ一つを搏ちにあめ
悉く柩の毛虫焼かるべき
さみどりに一奔流の樟並木
あぢさゐの藤御納戸に定りし
平らかや額あぢさゐを吹く風も
毛虫焼く準備万端整ひし
がらごろがらやがてとすんとはたゝ神
午からの庭草取りもその一つ
なかぞらに洞然として花了ふ桐
櫻若葉昂然注ぐ雨憮然
あぢさゐの今を見頃の朝かな
十葉の晴れても降っても曇っても
一向にあぢさゐの彩載らぬ頃
枇杷の実は雨欲しさうな顔したり
ユスリ蚊のお祭り騒ぎ始まれり
あたり皆潮吹それでも浅蜷掘る
あぢさゐの化粧映えする雨上り
別の葉に体重移し蝸牛
あぢさゐの葉を打つ雨と花打つ雨
紋白蝶（もんしろ）のおじゃましている花
館
この夜半騒々しいぞはたゝ神
梅雨入り宣言太鼓以てすはたゝ神
唄も出て潮来の伊太郎あやめどき
籠り居の梅雨の日々またよかざるや
人の頭を掴みにくるか梅雨鴉
人の頭を掴みに杜の梅雨鴉
あぢさゐの葉の深緑花未だ
あぢさゐの花あさみどり雨を待つ
あぢさゐの葉の浅緑深緑
まっさきに倚るかきつばた濃紫
額の花平らかに平らかに
螢見に行かんと軽く腹拵え
あぢさゐ見物果たして一寸早きかな
朝から蒸す谷戸の螢見日和かな
扇子いっぽん挿して句会へ出向きけり

青梅の清浄月に入りにつけり
螢袋この谷戸十戸小じんまり
駄菓子屋に灯の点る頃螢どき
螢出づ辺り十葉潜む闇
蛇苺薄気味悪く谷戸暮れて
蜘蛛の糸この道行きし人有りや
罷り出し初見の螢頼りなげ
螢袋足音鎮め通りけり
川縁の家にて螢の宿を聞く
川高鳴り螢出支度整えて
吊忍早々つりて履物屋
螢出る迄の四方山話かな
ここな家こんなに早き夏椿
パチパチとけふより扇子の持ち始め
螢出づ時分そろそろ足下暮れ
草螢葉末ほんのり泛き上り
谷戸深く螢育む水の音
谷戸の灯のほつほつほたるの出も間近
ほたるぶくろ翅音共々暮れかかり
螢情報水道局に問い合はす
雲怪しく暮れて螢の初点燈
ほうたるを誘ふ水のこゑ蜜々
立話合間合間にほたる飛ぶ
樹下の闇深く初見の螢飛ぶ
ほうたるの初お目見えの此の明るさ
ホタルの句書き取る暗さ如何せん
宵はなのほたる火の未だ頼りなき
ほうたるの深く息して水草かげ
一匹は上づるやうに飛ぶ螢
大蛇のごと螢の闇を凝視して
おのづから我も深息ほたるの辺
ほうたるの二息三息今灯る
ほうたるのモールス信号打つごとし
界限に子鴉が来て常の景
遊園地あぢさゐ色の風船もて
あぢさゐの空を翔ぶなり海賊船
図書館へあぢさゐ色のシャツを着て
あぢさゐの上の素敵な海の照

あぢさゐにシャンソン流れ港町
坪畑の胡瓜の棚を三段に
あぢさゐは海ふちどりて絵になる景
十葉の葉は錆色に卯月果つ
苜蓿の夕日見送る白法師
海紅豆木影を深め昼の海
あぢさゐに失念のいろありありと
あぢさゐに失望のいろありありと
あぢさゐに期待する彩出でにけり
あぢさゐの待たれぬるかに彩させり
遊園地楽器ズンチャカみどり立つ
海はもうてぐすを引いて海紅豆
手放しに海が招くよ花ひるがほ
母
あぢさゐに染らんばかり八十路の掌
海紅豆セザンヌの絵に入るとし
ヨットハーバー白光放つ海紅豆
軽鳧の子の見よう見真似の毛づくろひ
軽鳧の子のふるんふるんと水浴びて
泰山木清浄と雨上るべし
伸びをする雀の居りて梅雨晴間
観覧車卯月雀と順を待つ
観覧車卯月の鳶が掠めゆく
苜蓿の葉のぼこぼこと雨を受け
苜蓿の間より雀首覗かせ
海洋公園イルカの風船先立てゝ
螢見の話など出て夕餉あと
稔ほたる灯京ほたる連れ立ちて
あぢさゐの葉裏好めるかたつむり
切通し越へてかまくらあぢさゐどき
草なるも時計幾つもぶらさげて
ねむ若葉今年の戦ぎ見せにけり
垣薔薇のさんざん咲いてその名残り
獣皮めく葛蔓奔り出しにけり
曇天に古色蒼然山帽子
風下モに十葉の香の流れけり
どんよくに太りて崎の南瓜蔓
一葉一葉しつかり立てゝ南瓜蔓
ぼつと来て蟻奔らす雨急に

十葉の葉のあをあと雨意俄か
網かぶるメロンは高くつきにけり

晩涼の相ををりをり礁波
棒切れでかまえば蠋螂ご立腹

下田稔さん

枇杷出回る頃ぞ兄弟子見舞ひしは
病床の兄弟子枇杷のごといづか
甕の金魚いつか失せれば買ひ足して
甕の金魚覗きに出でて梅雨晴間
目次に目あそばせ梅雨の日の机上
疲れば梅雨の読み物寝転びて
おめでたき今誹諧や蟻地獄
金亀虫湿り気帯びる灯を取りに
金亀虫飛んで来ぬかと灯を点す
お気に入り常着四五枚更衣
三ツ四ツ拾へる実梅に朝の香
かたばみの花嬉ばす朝日かな
老梅は律儀に徹す実のたはは
実梅落ち痛恨のこゑ挙げにけり
常の景展き泰山木の花
もぎ立ての梅を漬けませ梅雨晴間
植込みの中に落梅奔り込む
鴨足草茎も細るや昼の雨
子鴉を揺すり直すや青嵐
おほぞらを揺すり直すやはたゝ神
かたばみの花愛らしく取り澄まし
馴れもしてかしましからぬ鴉の子
鴉の子空の端を占め常の景
葬の淵を覗きし思ひかな
おもしろうなふて蚊の姨翔たせもす
ぶつかれる糠蚊のたぐひ払ひけり
人知れず蕾み泰山木の珠
泰山木高みに咲けり仏がほ
枇杷むさき花が実となる季来たり
母
繕ひもの月は卯月と名を替えて
遠雷は陰口に似て崎つ方
金亀虫さうかさやうか灯を遣ろふ
蟻地獄さうか左様か餌をやるふ
夕焼けに顔を燃やして発句修羅

いちにちの足早に過ぐ風知草
次に咲く蒼はいづこ夏つばき
降り癖がついて卯の花濁すあめ
腹ぺこの往時沸々諸の蔓
ライラックの同属にして女貞
ハナムグリ好みて招べる女貞
つつましく漢の名貰ひ女貞
ねずみもち炒りて代用珈琲の世
此の年の葉叢に紛れ青くわりん
ひめしやらの昨日のいろに零る花
今日のいろ昨日のいろの夏つばき
ひめしやらのきのふの花に隣る花
くちなしの花広げ降る雨しとど
妊れる鴉に突起梅雨の杜
景気よき国のアメリカ産チェリー
櫻より孕み鴉のこゑ落とす
空ら梅雨の仁王へ飛ばす紙礫
柁垣うどんこ病のなすがまゝ
若葉風桶の樹間を抜けてふく
夕立あと蟻等川止め喰らひけり
緑陰の深みにはまる思ひあり
その奥に楠の緑陰楯の緑陰
緑陰の奥処に鎮座神輿倉
中空に素の香を流す泰山木
境内に素の香を通す椎の花
著我咲いてつるつる迂る古径
蚊ばしらの柱を何處へ持ってゆく
足の爪きる音梅雨の一ト間より
夏椿一日にして花古び
背後より我が頭掴みに夏鴉
境内にどかんどかんと夏けやき
なめくじの上目遣ひをせるごとし
大楯をぐるりと梅雨の荒雫
潮に先づ足を浸して浅蜷掘
ねぶの花その瞬きのおぼつか
百段攀ぢ泰山木の眺めかな
つつかけで出て庭先の蟻を見ん
ひるがほ咲く送り迎えの園児らに

旅はよきものと仰ぎて青松笠
羅を上手に着なす水海月
豆腐に張る水のなみなみ今年竹
ざくる散る凶事相次ぐ世となりて
蟻地獄に蟻遣り世相占へる
雪隠裡竹皮を脱ぐ音のして
はてもなく空木の花を零すひる
夏掛を胸に戻して又寐かな
風俗文選
「豆腐ノ辯」読みてさらりと昼寝かな
本降りとなりて螢の泣き寝入り
紙を切る音のそりそり梅雨一ト間
まくなぎの手のつけられぬ莫迦騒ぎ
あやめ咲き小野小町の身だしなみ
まくなぎにこの世の狂気移りけり
遠（おち）の人身を二折に芹を摘む
はたゝ神杉に拳骨くれにけり
鳴神の剃刀持って振り回す
葎切の軽口聞かん湖尻道
浮き苗に雲の黒むや安曇郡
木橋より浮世離れの海月見て
大楯の隣の椎の花了る
くりくりと沙羅の荅の新比丘尼
白妙の沙羅の荅の新比丘尼
花八つ手晦日ばらひの世も在りし
持ちかけてこの界限の溝浚え
七節の棒の細身をおっ立てる
業平を遠祖とせるかきつばた
あぢさゐののっぺらぼうと名乗りけり
あぢさゐののっぺらぼうに雨ざんざ
抜かれじと車前草の足踏ん張れる
妻
両親の未だ健在合歡の花
鼻のほうと耳打ちせるごとし
蠶螂の如く出歩く俳諧師
紙魚を詠むこころ世過ぎの足しにせん
床ずれの今もはつかに更衣
泰山木見んと据えたる頸の骨
老鶯の間髪入れず玉のこゑ

鳴神の招き寄せたる真黒雲
藪鶯竹藪替えて逸るこゑ

御威光の具足をみする大百足

団扇手にとりてぬるめの風起こす

あぢさゐの萌黄を打ちてあがる雨

布袋草自慢の腕の力瘤

冷し酒世迷い言など申すなよ

世迷い言申す御仁と冷し酒

五月雨の遠近（おちこち）を打つ寐入りば
な

口々に何を歎ける花ざくろ

合歓の花夢見心地に朝々暮々

すててこに雅俗二道のホ句作り

興ざめの破れ傘とはなりにけり

十葉打つ雨ここかしこおもしろや

杜に入る緑陰のかぜ一文字

一日経て色振り変はる沙羅の花

著莪叢の凄みを増せる木下闇

一つづゝもげて落つはな夏つばき

風絶えることなく吹けり合歓の花

昼顔の昼来て免許更新日

昼顔にべそかきさうなけふの空

でで虫の角のほとりへ寝ぼけ貌

道順はいつもの合歓の咲ける道

昼からは青空覗き合歓の花

葉桜の木影いちばん深き頃

目まとひの其処と思へばまたこちら

目まとひの幻術変幻自在なり

泰山木の葉籠りの花雨搏てり

そよ風の何ほのめかす合歓の花

にんだうの花の自墮落雨の底

花一つすぐれて白し夏つばき

用足しの寄り道にして合歓の花

禿めくうひうひしさも合歓の花

訪へる風もてなせり合歓の花

十葉の庭に目を遣り夕間暮

指触れて霜おしぬぐふ女貞

泰山木己が葉を搏つ雨を聴き

あぢさゐの彩を狂はすこぬか雨

打たれ揺る雨の十葉目の限り

泰山木高みに咲いて月に逢ふ

帰るさの螢握りし掌の臭み

どこまでも酔漿草の葉の土堀いろ

榭の花くさぐさの虫蒐めけり

青苔の祠を搏てる柀雫

夏櫂頭ぐらぐら吹かれをり

緑陰の石畳浴ひ風通る

着たきりのままにて父の日を迎ふ

台湾バナナ船に揺られてどんぶらこ

安売りのそれなりの味網メロン

深梅雨の亀虫お臭うっちゃれり

お臭の亀虫が灯を取りにくる

泰山木打ち始めたる雨の音

舟虫の潮じめりに海時化する

手も脚も腹も化粧ふて女郎蜘蛛

十葉の打たれひまなし雨の昼

父の日の初孫走り回りけり

寝返りを打ちて蚊のこゑ遠退けぬ

日は雲に俄曇りの深山朴

振花の今を盛や五輪塔

葛を打つ白雨のそなたこなたかな

栄螺の腸（わた）良薬にして昼の酒

亀虫の匂ひ持ち込む梅雨の家

ほつりんとひるがほ雨に暮れ残り

父の日の常着の袖に手を通す

かたばみに赤錆いろの夕日差す

父の日の家中に風通しけり

紫陽花の葉つばず濡れ雨臭し

のらくらして運動不足鴨足草

年金は雀の泪集め汁

年金にて総てまかなふ豆の飯

散りはなを見よとさくらの散れるなり

ごきぶり打つ年金暮らし板に付き

冷奴年金暮らし足が出る

あぢさゐが飛ぶ飛ぶ回転木馬（メリーゴー
ランド）

噛みしむるほろ苦人生栄螺の腸（わた）

鬼貫のまこと懐し豆の飯

献上の房州枇杷の大きこと
口の辺に探りあてたる瓜の種
なめくぢの言上届き雨三日
甕に振り甕を溢るゝ五月雨
水馬走り慣れたる今朝の水
己が影くろぐる曳いて蟻行脚
濃く淡く蟻の影曳く百度石
たわいなく降られてぬれてゆく卯月
あぢさゐの彩押し移る風の中
螢袋けふの雲より明るくて

自画像

端居して孫の手をもう借りる齡
傘（からかさ）も海鼠も顛つる骨の音
口にしてなまこの立つる骨の音
深梅雨のかうもり畳めば骨の音
六月二十四日 十三回忌
ひばり逝く月が巡りてその月に
さくらんぼ娘チエミの両えくぼ
ゆすらうめ鈴の青実に目を細め
紐引いて火取虫うち鎮めけり
かたつむりでんでん太鼓鳴る中を
甲斐甲斐しく若葉日を撥ね馬手葉椎
夏の風樟の樹間を流れけり
でで虫の大いなる伸び朝朗（あさぼらけ）
風通す夏は柱の季節かな
梅雨の床泰山木が目に見ゆる
小言いふごとく榎の法師蟬
薺をゆがめて風の吹けるなり
泰山木葉の照り合ふて梅雨晴間
存分に泰山木の雫切る
柿のはな記憶はいつも散る盛り
柿の花夜を日を継いで散る盛り

横浜 自然観察の森

なまなまと葉裏を歩く草螢

谷空へ高く螢の男時かな

竹林の闇奥まりて飛ぶ螢

大螢降下わくわくする子らへ

びいどろのやうや螢の光の暈

目もあやに硝子玉めく螢の暈

草の香の満ちて螢の酣に

応々と點じ双つの螢かな

上になり下になりして戀螢

堪能のほたる下火となりにけり

鼻衝いて木の香草の香螢沢

闇を来るつかかけの音螢狩

草々のつと匂ひ立つ螢籠

宵はなの螢そこそこ居りにけり

螢狩しろしろとある道あかり

しろしろと道の続けり螢狩

扇子いっぽん腰に落として螢狩

あぢさゐに倣うて空の萌黄いろ

出色の螢が一つ空のぼる

ほうたるのサマリヤ人といふところ

竹林螢の宿はこの奥に

谷戸に湧く終の螢に肌冷えて

ゆく螢おいおいそこは人の道

草の香に螢のよよと息継ぎて

ぽっぽつと葉を透き螢の豆ランプ

刻満ちて沼の螢の勢揃ひ

ほうたるの彷徨ひ出でて人の前

気に入らぬ風にいやいやする螢

ほうたるの息を吸ひ込む漆闇

べべべんと道行螢現れましぬ

道行の螢川越えゆきにけり

特大の螢カンテラ引っ提げて

視野に入る螢と視野を出づ螢

大茂み小茂みほたる育めり

螢果てうんともすんとも云はぬ闇

高くとぶことを好みの螢とも

ほうたるの今日の興行終りけり

螢引く闇に暫く佇めり

螢臭き掌をおし広げ見せにけり

子供らの夢の大きき螢の暈

谿風に上ずって飛ぶ螢あり

拍子木が鳴りてほうたる罷り出ぬ

火を惜しみ貧乏くさき螢とも

螢呼ぶこゑの太くて脊ナの闇

夕風を待ちて螢のデビュウかな

馬のごと昭和の御代に生まれ落ち

汗をかき日々を勇んでああ昭和

走馬燈僕の時代が遠くなる

蓮葉に水晶の玉ぶちまけて

諸の蔓疎開せし世にさかのぼる

恪勤の日のかずかずや吊忍

ほてい草自慢顔なる腕かな

梅雨入りの湯舟にでんでんむしの唄

空豆を剥きつゝ妻の生返事

恪勤の日々もうはるか空豆に

あぢさゐの一ト雨ごとに富める彩

端居しておもひ巡らす眼となれり

腰痛のくしやみするにも力入れ

蚊帳潜り出でしところて覚む昼寝

白雨を潜り潜りて街雀

遺されし風情そこそこ蚊の居る世

蚊の憎き世のもう遙か彼方かな

藪蚊打つその業衰えてはおらず

薬漬けの世にて夏バテせぬ薬

相棒の寝相や団扇持ちしまゝ

脂肪のる躰羅もて包む

皆昔しほうたるの香も蚊帳の香も

蓮の香のただよふ中を蜻蛉釣り

蜻蛉釣り畦にしゃがめる子の頭

蜻蛉採り蓮田の中の子の頭

四人(よつたり)の昼餉焼茄子ほおばりて

飲食のいつもの顔ぶれ麦湯汲む

生り節きちんと食事とりにけり

夏瘦て三度の食事軽くとり
しんがりはさてどんなもの花火待つ
生節食うべ元氣をつけにけり
祭りの喧嘩男は似たりよつたりで
蟬音が蟬音呼んでそれから後は無茶苦茶
峠にて別れのシーンハルジオン
時代ものラストシーンのヒメジオン

箱根行

滝音のいんいん葉叢深めけり
夏の日のかつと射し込む蛇骨川
滝の風浴衣の裾を煽りけり
滝裾が青葉の間より覗きをり
滝水の白瀬をなせる蛇骨川
岩を噛む滝つ瀬の水蛇骨川
女貞のはな覗き込む蛇骨川
蛭袋溪谷奥へ奥へ伸び
滝水の勢ひ受けとむ岩一つ
宿の下駄蛭袋に響かせて
箱根路の何んだ坂こんな坂竹煮草
箱根路を怪しみ通る鴨足草
射干や川に面して宿の建つ
沢蟹を踏みさうになる箱根みち
川に出て滝音に顔あらはるゝ
箱根路の沢蟹奔る下り道
岩たばこ宿創業は明治なり
露天湯にすずしみゐたり栃の樹下
露天湯の手拭絞るやみどり差す
薫風に吹かれ湯壺に首三つ
湯送管腹も温げに瑠璃蜥蜴
曇りゐる箱根七湯若葉冷え
ほたるぶくろ宿の浴衣の裾ほとり
兜虫ぶんと湯宿の灯を取りに
灯を取りに箱根の山の兜虫
来客に宿の子みする兜虫
赤松に蟬が来て鳴く夏はじめ
よたよたとあぢさゐ電車坂のぼる
あぢさゐ電車又又スイッチバックして
登山電車右に左に岩たばこ

あぢさゐ電車喘ぎに喘ぎ塔ノ沢
雲助の五月闇抜け箱根越え
箱根山中沢蟹踏まな下り路
熊四手の花序に強羅の風湧けり
青すすき仙石原に通るかぜ
空模様怪し強羅の竹煮草
宿探す強羅の蟻の後に蹤き
竹煮草箱根朝から薄曇り

夏休み今年もごろ寝通しけり
水鳥の袂頰ちて二筋道
手を抜きし故の師走のジタバタよ
顔立てて鼻勿体ぶった様
月はなや夏場の簾吊りにけり
あたるてふ言葉ほのぼの春炬燵
ものぐさも年相応に夏は来ぬ
夏旅の手配年金又減らす
いざりうをのげに恐るべき昼寝貌
ごろ寝の夏妻よ厄介かけます
節分の鬼振り回す紙の棒
銭葵昔氣質の立姿
天空より狐跨る茶枳尼天(だきにてん)
うっすらと埃の載れる冬の梅
蟻地獄息を凝らして魔が潜む
待針の豆腐褥に骨休め
朝霧に夏鶯の気張りかな
鼻の老うて仏に近き貌
御勝手にお唄ひなされ年忘れ
吹かれては正気にかへる合歓の花
囀りの歌姫にしてラテン系
暑に対す女の気性男の気性
初蛭切なき彩を点し来る
吊忍下世話に過ぎるよた嘶
助六の蛇の目が恋し春の雨
川音につき動かされ楊の芽
山百合の吸い込まれゆく夜気の中
八十八夜曆に力ありし世も
行き過ぎの一つや二つ蠅打てる

葬の内輪話をせるごとし
死ぬ死ぬと云ふを大暑の口癖に
死ぬ程の暑さ人能く生かしけり
布袋草程の明るき世を欲れり
鱧などに浮かれぬ東夷なり
踊巧者踊見巧者風の盆
来し方の佳き事思へ金魚玉
嘶家の扇のごとく器用なり
云ひにくいことを云ふ奴冷し酒
お十夜のお婆の白河夜船かな
曇ろうと照ろうとさらしなしようまの日
顔見世に生きて女のしつけ事
松葉牡丹咲かす家などトンと失せ
夜神楽や些細なことを大仰に
ところどころ昼寝などして日をかせぐ
荒雫梅雨ならではの泰山木
椎の花やたら妄想掻き立てに
し残したこと年越してやればよい
冷房を利かし過ぎてはしゅんとせり
ややこしきは皆先送り年を越す
腕によりかけてや女郎蜘蛛の糸
けふからの夏を向ふに廻したり
づかづかと荒梅雨家に踏み込み
柱まで目の突き進む夏座敷
嵌め物の類ひあれこれ夏座敷
夏座敷楓の風を取り込みて
そこそこに暑さそこ退け水打たん

さういった訳で胡蘿蔔喰はぬ訳
電柱の葛行先を探しをり
母なりに嫁なりに梅漬ける家
かぶりつき少年臭き青蕃茹
毛虫焼くは天恐れざる所業なり
土地柄の花鳥賊の味愉しまん
青くさき書生っぽ胡瓜生りにけり
冷素麵見た目も味の内也と
鰻喰うて間延びした顔店を出づ
皮剥の小さき鯖振る鎖夏法
莫迦戦争諸が主食の座につきて

茎を喰う芋もありけり名を忘る
里芋は山芋おもひ夕月夜
煮凝の半信半疑平目の目
当節の蜜柑キリリとする処なく
ヨルダンのサッカーボール大みかん
溜息をついて梅雨空見渡せり
皮剥の革財布などあらまほし
緑陰の深みより風湧き継げり
四角ばる青柿の面（つら）蟹に似て
冬瓜の老人食を出されけり
ザングリと芋の鬼つ子掘り当てぬ
雨がちで西瓜の味も地を払ふ
ただ甘き玉蜀黍を蔑めり
ただ甘いだけの贗物玉蜀黍
山芋の播り粉木に鉢踊り出す
べったたら市最頂の店がありて立つ

鍋料理高き垣根をとり退けて
銭湯へ夏の先取り甚平着て
まくなぎの喧嘩両成敗にせん
まくなぎの聞く耳持たぬわからず屋
ほうたるの竹林隠りまたあした
ぜいたくなもんや火鉢に用無き世
昭和に生れ胡瓜の古漬鹹め好き
気ぜはしき歩き方にも酉の市
世の中の成り行き任せ七変化
杏の核真つ赤に蟻の総掛かり
恋蛭思ひのたけを見せにけり
さぞかしと空蟬の背に手をやれり
芋殻焚きなど大切にしましようや
干大根おてんと様のぬくもりに
凄みても根は小さな枯蠟螂
妻
七難を隠す初老の髪洗ふ
目端利く冬の鴟とはなりゐたり
背を撫でて空蟬の労ねぎらへり
切干しに見ゆる女の怵え性
はらからの昔火鉢に張りついて
梅干しを干して女の苦労性
一ねむり暑さにめげてしまはぬやう
草々に気力戻して水を打つ
風の起つ頃まで待ちて水打てり
けだるさが目に見えて去り初嵐
岩たばこ岩より水の滲み出て
ここいらが花野の端と目で区切る
いかなごの釘煮出されて茶のうまし
コップに挿す宝鐸草に根が生えて
齢ばかりとる梅の木の実のぼつちり
気性勝つ人に空似のこの蛭
西洋あじさい
御本家のあじさいる凌ぐあじさいるや
漂鳥といふのだそうだその椋鳥も
雀蛤と化せる次第をつゆ知らず
ほつりんと剃り残されし梅雨の髯
真夏の日日本列島照射せり

真夏日のさあこれからが大変や
雀らが歩く広場の夏旺ん
朝から扇ぎどうしの破れ団扇
雀らがちゆんとも云はぬ暑さなり
初老とは木陰に涼むやうなもの
日を追うて旺んなる夏如何にせん
すててこが離せなくなる夏休み
昼を呆けみて蓮の実の交じる菓子
とぼけたる貌のうまづらはぎの旬
草河豚のどうにかこうにか喰へる奴
棒立ちに青蠟螂の気色ばむ
クラーのああ埃臭サ試運転
巣作りの鴉針金横啞え
水打って炎帝なだめなだめけり
たいがひにせよとまくなぎ振り払ふ
甘えびに命がのびるぬくめ酒
大胆に肌着を脱げる簾内
全身であらがふ鰻に止どめさす
煮付けの平目白身の代表選手にて
甘鯛の釣られし貌の驚きやう
母
日傘さし次男の世話を焼きにゆく
身を馴らす他無き夏の始まれり
これよりの夜な夜な蒸す日眠られず
家に風通し常着のすててこに
夜をうとうと暑さに我が身馴るゝまで
のうぜんのかき付けられてゐるごとし
このところ蒸す日続きて夏見舞
定年のごろ寐の夏を迎えけり
定年の夏のごろ寐を愉しまん
シャワー浴び心身さっぱりさせんかな
持ち古りし駱駝の扇子ガタが来ぬ
ぬるき風あほひでばかり古団扇
風入れて風吹きぬける夏の家
この大暑逃れんための一ねむり
蒸しに蒸すこんな真夏夜もういやだ
斯く蒸せばひらきなほりて大昼寝
擦り切れの団扇片手に家居かな
大昼寝して沙悟浄の国にかな

思ひ出すやうに遣へる団扇かな
すててこのすっぽんぼんは佳かりけり
大昼寝腹這ひ伏してマンタのごと
蒸し蒸しの蒸しの始めの日なりけり
蒸し風呂の一夜夏掛け股挟み
釣り銭の音の寂しく海鞘を買ふ
すててこに馴れて家中のし歩く
昼寝とは暑気やり過ごす為の智慧
すこし濃き臍毛つまんで端居かな
すててこや訪問客に狼狽へる
すててこは誰が発明愛用す
生ぬるき昼餉を食して三尺寐
蟻殺めばそに駆け寄れる蟻一つ
スタイルはさよりに優る水着かな
三拍子揃ひて鯛の活き作り
アクを以て山獨活己が身を立つる
青簾吊るや寝てよし覚めてよし
端居して模糊とした眼を庭に向け
蟻たちの作る世原始共産制
干潟ある頃の浅蜷の導水管
昼寝覚む身ほとりなにがなし寂し
天気予報当る世となり虎ケ雨
さくらんぼ甲乙丙の丙の味
添え棒を朝顔の蔓捲き始め
子鴉のそれと知らるゝ間延びこゑ
雨の日を挟みて町内祭りかな
風鈴の鳴り過ぎ妻がたしなめる
通り雨海月のやうな傘買うて
茄子漬時が薬と養生す
枝豆のこれがほんとの旬の味
蠅追ひ駆け蠅虎の岡っ引
夕餉あと味噌汁いろの梅雨夕焼け
梅雨夕焼け腸に似て雲の筋
太刀魚のごとく身を折り昼寝せり
西瓜状風鈴の鳴り出しにけり
金魚柄蚊遣置きゆき呉れにけり
幽霊が出さうな真夏の夜の受像機
扇面の花火の絵柄畳みけり
ナイター洩る隣家近しき覚えけり

父の日の昼寝セットのプレゼント
いろいろな容器に夏の冷やし物
肝吸ひに夕闇募る暑気払ひ
豪遊のあとは皆目昼寝覚
金亀虫遮二無二に玻璃に突つかかり
夏木立突いてはなまる身をほぐす
するすると逃ぐる夏掛手探りに
雲に峰大菩薩嶺に峠あり
つれあいの寝息背らに三尺寝
冷え過ぎは毒を承知の氷水
洗濯物家に暑さを持ち込めり
枝豆の指ざはりよき季節なり
誕生日枝豆の殻積み上げて
醬油壘こくりと夏は来たりけり
やせぎすの身を延べ藺草の平枕
絵団扇の流しに偲ぶ風の盆
旅土産おわら流しの団扇揺り
汗ばむ身すっぽんぼんになりてすずむ
片陰をゆく片陰の尽きるまで
蕃茹の花けふは蒸す日となりさうな
蚊帳吊りし宵闇いまもそこにあり
蚊帳を吊る仄暗き闇覚えをり
ヤツプより届き主治医の夏見舞
外来の予約がとれて盆休み
ハンカチで扇子で扇ぎ待つ患者
暑かりし一昨年術後の日々
扇子開き閉ぢては外来患者待つ
ふうふう扇子つかふ外来患者かな
隣家のラジオ手にとるやうや真夏の夜
熟眠を心がけ夏へこたれず
精つけて夏乗り切らん葎炒め
向かふから祖父に空似の麦藁帽
合歡の花白く呆けて夢の跡
まだ使ふ扇子の寿命尽きみたり
病院は緑陰ナースは白き風
東京に映画観に出て夏休み
扇子はたはた嘗ての経済戦士ぶり
顔頸へはたはた送る団扇風
せっかちと思はるもよし団扇風

台風が湧いて進んで北北東
 獨り言云ひては溽暑とつき合へり
 気圧されてぐうの音も出ぬ大暑かな
 空豆に晴れて定年うまき酒
 汗だくだくざぶんと一ト浴びやらんかな
 広ぐとき風の音する寝莫塵かな
 無為の身の起居悠々蝸牛
 暑さめと己に言葉ぶつけり
 仕きたりの花鳥の絵柄岐阜提灯
 女郎花すらりと長けし立姿
 叩きみてその熟れ具合瓜に聞く
 振花の翩翩梅雨の中休み
 丸裸無手勝流の句は勁し
 首を振る芸も見せけり扇風機
 夕餉あとおやもう鳴くか夏の虫
 朔日のおやもう鳴くか夏の虫
 音もなく路地を駆け抜け黒揚羽
 白粉花あらかたしよげてゐたりけり
 家にごろごろ暑さの持って行き場なし
 死神も嘸や手をやくこの暑さ
 この上は暑さの通り過ぐを待つ
 ふて寝して暑さの通り過ぐを待つ
 耳揃え聞いて確かに夏の虫
 四人（よったり）で聞いて確かに夏の虫
 扇風機かけて迎れる夢路かな
 習ひ笛ひよろひよろ祭近きかな
 寝相即降参のさま熱帯夜
 関節の音畳まるる夏座敷
 夏館夏水仙がよく似合ふ
 簾吊り覗く辺りが浮世めく
 朝風に遊ぶ葉見えて軒簾
 葭簾越しに起居の常の景
 浮世めく簾を家の四辺かな
 葭簾辺り何やら浮世めく
 降りて来て二階の暑さ嘆きけり
 鼻の利く蟻みて干菓子探り当て
 洪茶もて頭覚ませる朝曇り
 丸菓を呑み損ひし朝曇り

ざらつける肌着祭の日の近み
 庭さきに葉叢揺れゐる夕端居
 溜息をついて鰻の日を送る
 ビール酌み夕栄程のほてりかな
 ビール乾し溜飲下がる思ひかな
 麻酔利くやうにころりと大昼寝
 夏さきの女郎花なりすがすがし
 蜂飛来して眼圧といふ言葉
 炎昼の濡れ縁を塗る四つん這ひ
 旺んなる夏の日差しに目を細め
 すててこで出てゆき速達受け取りぬ
 のそとゐて山椒魚（はんざき）のごと家居
 かな
 夏見舞ちらほら交じる郵便物
 男っぷり上げて戻れり片陰道
 脳髓に藺の香よく滲む角枕
 籠枕天竺國の夢欲りて
 籠枕頭すつきり目覚めけり
 籠枕風よく通る座敷なり
 旺盛に朝の峯雲も食欲も
 頭の裡のもやもや抜けりラムネ玉
 体調を保たんが為大昼寝
 軒簾ばたと打ちて風ありぬ
 心臓の不具合抱え夏百日
 目覚むれば日盛り峠越してをり
 めいっばい風の吹き込む夏座敷
 日盛りの枕外して寝惚けごゑ
 朝の蟬うんざりする日が始まりぬ
 定年の身過ぎ悠々大昼寝
 肌合ひのよきを好みてすててこ党
 なりふりを構はぬ齢ひ水を打つ
 初孫は家駆けめぐる水馬
 聳え立ち風吹き込める大夏木
 打水外れ路地くる人を釘付けに
 打水の生垣越えて土けむり
 打水の音の漣枕辺に
 打水のしとど葉欄に当る音
 うだる日の祖父の犢鼻褌姿かな
 階段の壁が遊び場守宮の子

夏は佳き綿の肌着に親しむ日々
やあ守宮お主とこゝろで何代目
うだる日は昼寝に如かず鰻の日
うち延べて鰻の寝床どれ一ト寝
けふの計おもひ巡らす朝曇り
アラブ風装ひをもて立葵
唐（から）を経て日本へ来たる立葵
青空に來し方おもふ立葵
眩きはあぶくのごとく朝曇
旅プランここ涼しさう恐山
夏旅の場所選びしてすっぽんぽん
あぢさゐの脱色朝から蒸しさうな
腹に掛くタオル一枚大昼寝
百合大輪じはつと気温昇りけり
毛髪の間にはほろつと汗生まる
陸中の鮮魚喰らはん夏の旅
避暑に來て仏ヶ浦といふところ
昼寝してまた舞ひ戻る恐山
炎昼の病院通ひご苦労な
家通る風筋に寄り夕端居
訪問客あれば団扇をあふぎ出づ
暑に曇る眼もとより頭の裡も
昼寝してすっぽんぽんの腹ひやす
おやおやと腕に止まれる初蚊見る
耳許に初蚊の名乗り上げにけり
初蚊打ち損ねし音の大きかり
初蚊打ち損ねし音の残りけり
効き目なきおんぼろ団扇ひつきりなし
部屋部屋に使ひばなしの団扇あり
隣室に置き來し団扇取りにゆく
この方か初蚊の逃げてゆきし方
二階に母階下にわれら昼寝どき
何遍も暑さ凌ぎの顔洗ふ
団扇置き昼餉に呼ばれゆきにけり
昼寝覚む身起し浦島太郎めく
うたたねの団扇だんだん重くなる
夏の蠅唸りゐる中寝落ちけり
かすむ眼に蠅と見えしは黒子なり
妻はいまシャワー浴び來しアフロデイト

藪つ蚊に筒抜けならん汗の音
藪枕にでこぼこ頭馴染みけり
水打てば土けむり上げ土応ふ
昼寝覚瘦せぎすの身の残りけり
泡沫のなほ立ち昇る昼寝覚
遠くをみる目つきして妻夕端居
昼寝どき彼の世此の世を往き來して
路地に降り涼みごころの夕雀
炎熱のけふ一日を乗り切りし
瘦身のガタつく大暑の日でありし
夕端居風もやうやく腰上げぬ
水打って向かう三軒両隣
久に見る鏡の眉の茂りかな
手をやりて六十路の眉の茂りかな
投函に出でて躓き來る夏の月
夏の月寝苦しき夜の家並の上
お社で祭稽古の神樂舞
夜な夜なの祭囃子の習ひ笛
祭前神樂太鼓のでんでこと
祭前神樂太鼓が夜陰より
夏の月まんまるに出て夕餉腹
老經濟戦士あほげる夏の月
いくとせを忘れゐたりし夏の月
懐旧
夏の月赤く術後の尿のいろ
耳に毛の生ゆる齡ひや明け易き
聞き覚えあるこゑ洩れて夏の宵
ゆび指す方赤みがかりて夏の月
朔日の耳傾けて夏の虫
寝返りを打ちて鰻の日の寝相
月替れば風の名替り祭月
緑陰に莫迦げて大き忠魂碑
せはしなや躰に当たる団扇の音
嵌めてゆく肌着の釦貝の涼
明易の耳と眼を睽きて
明易の容器に熱湯注ぐ音
明易の眼見据えぬ黄の白花
取り散らす団扇や朝の暈の上
夏の夜を鳴きゐし犬の声も絶え

扇風機けふの勤めを待ちみたり
明易の布団の寝窪ありやなし
尿に起つ折に垣間見牽牛花
使はれし団扇そのまゝ畳の上
明易の布団に坐して遠眺め
ダウンライト絞り晩夏のタンゴ聴く

膝這ふ蟻小奴めと手で振り払ふ
杜は翳深め祭の前後かな
心棒に狂ひを生ず真炎天
懐旧

肥後守持ち夏山へガキ大将
棒切れを使ひて銀杏落とす業
臍昇る蟻に息切れなかりけり
死神に踏み込まれたるカンナの家
夏櫛かたときも風手放さず
いつもより大きな蟻をけふ見つけ
元氣よき大蟻にして家横断
つかつかと真昼間の蟻廊を馳す
板の間をつかつかと蟻大きな奴
子鴉の発声練習にも似たり
家奥より炎天を見て目が据はる
ぶつかつて物音生まる昼寝どき
うたたねの片手うつつに蚊を払ふ
正体を斯くも頭はに稲穂のヤゴ
涼しとも閻魔の怒気をふりかぶり
何處へでも首を突つ込む蟻の性
向日葵の海へ睦く巨匠の瞳
向日葵の枯れてくろぐる巨匠の瞳
噴水の整ひ過ぎてよそよそし
人一倍欲張る蟻に呆れ果て
白桃や躰は水に浸かりきり
泥のやうな睡り極暑を遁走し
くわりんらの俗談平語佳かりけり
文字摺草つむじ曲りを受け継いで
眉茂り人品いやしからざるひと
蟾蜍鎮座まばたき一つだに
海照りて鬼の手作り岩を灼く
灼け白む岩の一つに如来の首
舟灼けて鬼の手作り岩巡る
炎帝の仏ヶ浦は奥の院
やませのこゑあな恐ろしき恐山
牛頭馬頭の徘徊暑し恐山
霊場巡り水母のやうないでたちに

恐山夏の鴉に出会ひけり
恐山灼け箸塚を一つ置く
箸塚の灼かれ突つ立つ恐山
夏の虫賽の河原に見届けし
蟻を吹く肺活量の小さき吾
蟻を吹く肺活量はそこそこに
虚子に「風が吹く仏来給ふけはひあり」の
句あれば
仏来るけはひを風に老手虚子
夜干梅もしやの雨を氣遣へる
夜干梅匂へる中に寝つきけり
梅を干す後姿の空似かな
三日目の夜干しの梅の香なりけり
尻尾めく夜店の電気コードかな
祭果て紐で括れる屋台店
本祭り蛸の踊れる屋台幕
緋目高の段ボール解く屋台店
小地谷産金魚と親爺受け答え
水打って屋台の親爺活気づけ
先ず水を張って金魚を流し込む
いつもの場所いつもの金魚すくいの店
一ト年ぶり金魚すくいの禿親爺
夜店の間電気コードの宙ぶらりん
水屋よりホースを伸ばし水打てり
金魚つり皆に囃され二十四
綿飴がぶつかりさうになる夜宮
祭提灯馴染みの中華蕎麦屋あり
祭の夜何か弾けて若人ら
腹巻にお札数ふる夜店蔭
不景気など何處吹く風の祭の灯
蝉の羽化遂げつつあらん夜の杜
産土の杜の洩らせる夜宮の灯
藺枕とタオルを抱え昼寝どき
焼きおにぎり二つほおぼりあと昼寝
炎昼の焼きにぎり嚙む音はつか
風鈴の南部南部とよく鳴れり
風鈴の鳴る日鳴らぬ日けふ鳴る日
風鈴の饒舌いささか閉口す
風鈴の間に間に祭りの遠囃子

ドボルザーク聴いて夜涼のとほる家
シンコペーション真夏夜刻むジャズののり
コスモスの三色（みいろ）早咲き誕生日
素裸を朝からのしむ誕生日
水飲んで一息つきぬ日の盛り
昔からサイダーが好き誕生日
誕生日朝風呼べる鉄風鈴
職人のころ根こもる鉄風鈴
長身の鰻よろしく寝転ぶ図
寝そべって土用鰻のごとく居り
寝そべってそのまま昼寝水底のごと
風少しありて助かる鰻の日
昼餉のあとごろり鰻にでもなるか
炎天を跳ね継ぐ雀誕生日
にんげんに祭り雀に真炎天
大擗戦ぐ神社に涼みに来て
祭果て神社の茂り深まれり
広前に鳩の戻れる祭あと
寝て覚めてかう暑ければまたふて寝
定年の昼寝三味風に覚む
妻こまめに合間を見つけ夏見舞
まだ鳴かぬ蝉のどうしていることやら
先触れの蝉まだ鳴かず誕生日
昼寝より目覚めて浦島太郎めく
昼寝して素肌になれる風の向き
いろいろな器に夏の冷やし物
炎天を愉しみあるは雀のみ
自堕落とそしられやうがまた昼寝
青くわりんの若木この暑を共に耐え
茄子漬の塩加減よき誕生日
昼寝より目覚めて妻よ今何時
昼寝より目覚め一ト言今何時
誕生日の厚切り西瓜大皿に
診察のそばかす裸裏返す
診察は東の間炎天また戻る
先生に日焼顔見す診察日
目をぎゅつとつむって開いて炎天へ
妻の云う
夏帽子被れというに首を振る

通院の炎天の道ゆく他なし
出歩くに夏草ほどの血気欲し
夏草のみるからに意気壮んなり
暑にめげぬための麦湯を沸かしおく
風鈴の誘ひを受けて風出でぬ
たっぷりと麦湯を沸かす朝かな
腸の水の山彦昼寝覚
ぱたと落つところを見れば豆かなぶん
満腹の耳で拾うて夏の虫
生ぬるき麦湯を飲める誕生日
風死す中うちよろしても仕方なし
冷房を入れず自然の風待ち派
風鈴の少し慌てて鳴りにけり
起つことも面倒になるこの暑さ
腹にタオル一枚掛けて大昼寝
退屈といはんばかりに風鈴鳴り
風鈴の全く鳴らぬ午前午後
ぐずりゐて吾暑がらす庭の蝉
長身を横たへ鰻寝転ぶ図
背に噴ける汗の一粒づゝ感ず
シャワー浴ぶ一回こつきりでは足らず
何しても中途半端にうだる昼
風鈴のそここの風集め鳴る
炎昼に適ふ灰皿南部鉄
取り落とす団扇拾ふも億劫な
蝉ごゑのあの啼き方は手捕られし
お三時の西瓜ともども留守番
ごきぶりをどうしてくれやう睨みづめ
ご対面ごきぶりよりも妻慌て
もり上がる傷跡裸愉しめる
妻
職場より戻りいきなり蝉鳴いた
梅雨と共に去りぬ泰山木の花
一息に西瓜平らげ残る種
横須賀花火大会
花火見るあぎと撫づれば髭強（こわ）し
頬杖に尺玉花火とよもせる
飛び交へる父子の会話花火の間

花火尺玉東京湾を囲まする
シンシナテイキッド花火の六連発
泊船の窓に人影花火見る
船腹に尺玉花火とよもせる
恙無し花火六腑に響かせて
花火の煙ゆらゆらかつおのゑぼしめく
溜息が溜息を生む揚花火
夜間飛行花火の間を一文字
おばさんはますます饒舌花火の間
人顔の花火近々揚りけり
音もなく翼下にひらく揚花火
絵日記の大玉花火揚りけり
現し身の肝で受けとむ大花火
膝立てて男見上ぐる大花火
海風来てさっと花火の煙さらふ
くろぐろと人の頭暮れて花火待つ
花火待つその連れ合ひの浴衣柄
花火果つコンテナヤードに灯の一つ
点る灯の船形どりて花火の夜
泊船のデッキの人も花火見る
男一人膝立て直し花火みる
揚花火連打ドンプスドンプスと
花火見て山下清めく男
小気味よく肝打ってこそ揚花火
うなばらに花火の垂らす金鎖
黄の鍔の麦藁帽の花火なり
花火果て息吹き返す東京湾
物ごとに終りがありて花火にも
不景気の底をうち抜く揚花火
マグマ噴く如し花火のエピローグ
傾けるシュガーステイク紅茶の涼
ピザ屋の窓海と鷗と扇風機
土用次郎入道雲の聳ち損ね
納涼船東京湾に灯を掲げ
席より見ゆ土用太郎の鳶の海
ピザ店の大扇風機顔煽る
炎ゆる日のピッツアヨーラの海鮮ピザ（ピ
ザ職人）

客の方向いて挨拶扇風機
どの客にも愛想よくて扇風機
客に風送り律儀な扇風機
くそ暑し扇子縦にも横にもす
群れて啼く蝉と独りで啼く蝉と
ひとさまにお構いなしに啼く蝉も
水打って息吹き返す老婆かな
新聞を妻読み漁る朝曇り
暑ければあちらこちらと居場所替え
あちこちと居場所替えてもこの暑さ
けふも裸朝から野球観戦す
風鈴の音に昼餉の顔見合はす
昼寝して一汐木めく吾が瘦軀
蚊のこゑの警戒警報圏に入る
草木の翳深々と土用入
寝苦しさ我慢比べの団扇風
真っ直ぐに向き合ふ時間鉄風鈴
砂交ふ風が吹くなり土用入り
屋上にビール呷れば目鼻に風
竹に風引つ掛かり鳴る土用入
深まる空吹かれ仰げる土用入り
夜陰馳せ土用太郎の救急車
土用の入り寝床に夜風通はせて
夏休みゴジラ映画に夜を更かす
初蝉を啼かす追風吹きにけり
寝転べば腹の水鳴る土用入り

旅立ち

旅立の足軽やかに片陰道

みちのくの青田眼に滲む頃の旅

福島

夕雀ほてり覚ませる夏木立

茂る木にほてり覚ませる夕雀

安達太良の夏の雀の埒どき

福島の桃の夕焼けどき長き

安達太良の青田夕日を蓄ふる

福島の桃のいろして合歓堤

黒塚の辺りの青田暮れてくる

東北道

匂ひ合ふ青田と青田の中の鷺

東北道なほ北へ伸び合歓の花

青鷺が青田に降りて何漁る

みちのくの青田が暮れるまで走る

古戦場ここら一帯青すすき

みちのくの蜻蛉の眼して一人旅

みちのくは青田一枚にてつながらる

一枚の巨きな青田みちのくは

夏霧の覆面をして青蔵王

東北道北上合歓の花盛り

ぽと点きて青田の向かう人家の灯

花巻のもろこし日和となりにけり

いっぽんの合歓咲く彼方古戦場

東北道桃の福島通過して

空梅雨の東北道をひた走り

外灯がぼつんと点いて青田の辺

下北路

海峡の夏星の下鳥賊釣り火

海峡の真ん中辺に鳥賊釣り火

津軽海峡鳥賊釣り舟の火を強く

鳥賊釣りの漁火鬼の目ん玉大

陸奥湾にひやひやのぼる夏の月

夏の月青森ヒバの森の上

夏落氏子総出の宮掃除

下北の牧草の夏旺んなる

海峡と青嶺の間の下北路

海峡のこちらは内地宵待草

草苳つて海峡に向く小神社

青森ヒバ半島の背をなしにけり

下北の半島巡り大虎杖

下北半島付け根の箱根空木かな

向日葵の一寸背伸び青森湾

ししうどに海峡の紺深まれり

夏の露青森ヒバに木天蓼に

マサカリ半島突端の大待宵草

青田の上日本一の津軽富士

俳句行脚真夏の下北くんだりまで

鳥賊と海胆さざゑちりばむ半島図

旅自慢などしてバスは青嶺越え

バスの旅盛夏の下北くんだりまで

大間崎

海峡の冷やっこければ海月見ず

夏の露昆布干し場の留石に

日焼顔揃えて本州最北端

夏の露大間港の家並の上

大間崎やうやう明けて夏鴟

夏露の碑一つ本州最北端

海峡のうすうす明けて待宵草

待宵草咲かせ本州最北端

待宵草ちらほら本州最北端

浮塵子のごと日の出をよぎり海猫の群れ

海を飛び津軽海峡夏鴟

するめいか干し場に夏の朝の月

海峡は紫紺に染り平目漁

海峡は紫紺に風ぎて平目漁

海峡にひやひやと聳つ夏の雲

海峡の潮滔々舟虫に

海峡の舟虫にして黒光り

津軽海峡旬の鮪を引き込みて

昆布あらかた乾くと鴉の胴間声

大間崎石を重しの干し昆布
老蜃の広ぐアカハタ一夜干し
黒鮪黒潮に乗り大間沖
するめいかどんどん乾く星の下
下北の一夜干し烏賊星の下
下北の烏賊を干しましよ浜風に
郵便の一日一便夏岬
海峡の海霧の合間の松前町
海猫の二タこゑ三こゑ海峡明け
海峡の鮪肌いろ朝の海
朝月いろ烏賊釣り船の船腹も
烏賊釣り舟電球に凝る夏の露
海峡の潮色変ず鮪漁
海峡に朝日差し込む海猫の腹
津軽海峡ひやひや明けて海猫の糞
繋がれて夏の露置く烏賊釣り舟
海猫がすくと降りてマストの上
硝子の泛子ごろり夏場の大間崎
待宵草覚まし大間の磯鴉
海峡は紫紺に大間鮪漁
海峡のいわをいわをに夏の露
海峡に夏暁の海猫飛び交ひて
海峡の朝露帯びて待宵草
明易の函館山は紫雲の中
海峡の正面朱夏の松前町
夏暁の海猫飛ぶ彼方竜飛岬
するめいかを先づ筆頭に夏の色

佐井人の海胆突棒のかがいし
突くたびに舳先ゆらゆら海胆採舟
突棒の上下してをり海胆採舟
遊船の勇みて海猫をごぼう抜き
やみくもに遊船はしる海霧の中
遊覧船咽せんばかりに海霧湧きて
海峡の海胆を探せる箱眼鏡
ししうどの花の宴や極楽浜
断崖に甘草一点磯巡り
頭上過ぐ海猫の美形に見惚れをり
旅土産仏ヶ浦の朱夏の石
遊覧船仏ヶ浦に背を向けぬ

恐山
恐山岩のほてりに目を背け
木天蓼のケタケタ笑ひ恐山
口中に氷一片恐山
灼かる身の心棒狂ふ恐山
灼ける道賭博地獄に縁は無し
恐山吾が曳く影も灼かれづめ
炎天の三途の川を渡らんか
老鶯も下北訛恐山
炎昼のイタコと向き合ふ膝頭
夏鴉血の池地獄覗き込み
おお臭さの賽の河原に夏の虫
風死す中賽の河原の順路かな
恐山山門を出て夏の蠅
恐山一巡りして氷水
灼け灼けて白砂目を突く恐山
賽の河原さまよふ蜻蛉ならずとも
一ト吹きに賽の河原を涼気過ぐ
白道をいっぽん通し恐山
恐山真ん前にして汗引けり
霊場のお食事処素麺喰ふ
墓のごと見据え恰幅よきイタコ
骨に骨置くごとと賽の河原石
灼け土に吾が影縮む恐山
夏鶯賽の河原に経読みに
夏鶯賽の河原にひよっこりと

風死す中地藏の持てる風車
賽の河原塩辛蜻蛉の翅も焦げ
骨片の音して蜻蛉羽打ちける
羅来て仏下ろしに畏まる

恐山日傘抹香臭くなり
現し身の掌赤く戻る恐山
皆灼けて一塵に帰す恐山

賽の河原一木一草一蝶見ず
三途の川渡る蜻蛉の骨の音
奪衣婆に盗み見らるゝ真炎天

灼け地藏嗤ひ出しさう恐山
一涼氣三途の川を渡るとき
炎昼の仏下ろしは昼の上

恐山宿坊暑気にかすみけり
奇怪な蜻蛉の羽音恐山
小判草賭博地獄の傍らに

恐山夏の立木の枝ぶりも
あぢさゐの七色変化恐山
辻辻に日灼け小佛恐山

くさぐさの炎熱地獄恐山
講衆の白衣灼かれて恐山
夏草のいっぽんすらも恐山

二枚目のハンカチ使ふ恐山
恐山黄泉の下見にあらねども
ししうどの藪から棒に恐山

団体割引ありて盛夏の恐山
恐山山地やませのひた走る
老鶯の経読む涼味恐山

恐山巡りの白靴夏々と
灼け石ころ山と積み上げ恐山
恐山地獄巡りの日焼かな

恰幅よきイタコ炎暑の口開く
恐山まだまだいける日焼顔
恐山灼けゐて抹香くさき道

陸奥

物産展に引据えられて去年ねぶた
見得を切るねぶた怪力畠山
一人来て陸奥の青田の田草取

睨いて来る物産店の夏の蠅
バスツアー陸奥の青嶺は肩を組み
帰るさの陸奥の青田が眼に滲みて

三陸路

日焼して地図見ながら三陸路
三陸の気まぐれ天気花木天蓼
淋代の浜のやませに身をすくめ

淋代の浜の松越しやませ吹く
淋代の浜のやませや肌を刺す
海岸に佇てば肌刺すやませかな

太平洋横断発地やませ吹く
片陰に皆へばりつき海の駅
襲ひ来るやませに立往生の松

木天蓼の谿にやませの忍び込む
やませ吹き陸中昆布旨くせり
ぼんやりと夏霧のこる山間部

陸中の磯山の形(なり)やませ越ゆ
赤松の美林にやませ忍び足
陸中のやませに入り日透きにけり

汐木焚きやませの日々を送りけり
陸中のやませ美林に食い込めり
松林に突つ込みやませ五里霧中

赤松の美林を越ゆるやませかな
木天蓼にやませの忍び寄りにけり
陸中の美林やませに咽びけり

海鞘好きの陸中海岸巡りかな
やませ走り来たりて牧草烟らす
やませ吹き上げられ降り草のうへ

話に聞く幽霊海鞘に出会ひたし
海霧止んで海霧又出でて沿岸部
やおら吹くやませに烟る栗の花

たちまちに陸中海岸海霧の中
やみくもにやませ美林を突つ走る
やみくもにやませ煙草の花包む

やませ来て木天蓼の葉を濡しけり
大向日葵やませに視界奪はれて
バスの旅俱にし岩手県の蠅

栗の咲くここまで三陸大津波

この村の津波避難路栗の花
靄好きの陸中野田の栗の花
靄籠めの三陸鉄道花木天蓼
やませ来る岩手日報見開けば
濃霧注意報出て陸中沿岸部
入りこめる陸中海岸汗して旅

北山崎

老鶯のこゑもやませに包まるゝ
帯なして陸中海岸夏の霧
燈台がぼつんと海霧の帯のさき
旅をして陸中海岸海鞘どころ
三陸の濃霧に追はれ遊び舟
松林ずいと分け入るやませかな

陸中 龍泉洞

谿々においてけぼりの夏の霧
青嶺あり谿あり一人鮎を釣る
釣竿を青嶺に向けて川漁師
すかんぼを銜え道中股旅めく
夏川の中州を過ぎて中洲あり
川ぐいと曲る青嶺を巻き込みて
釣人をばらりと撒けり青葉谿
釣人の居る瀬居らぬ瀬青山中
旅疲れ西瓜齧りて癒しけり
夏川に足踏ん張りて太公望
鮎釣の谿底にして豆粒大
夏旅に持参の菓三日分
丑の日の既にたぎりを朝の川
ようこそと宿の燕がとんぼ切る
螢袋よべはぐつすり眠りけり
早立の朝の靄縫ひ峡燕
峡燕群れていちにち暮れにけり
燕より目敏く起きて旅の衆
夏霧のとどまるごとく峡泊り
夕燕雲散桧山はたと暮れ
悠々と暮れて青嶺のいま黒嶺
明易の手に触れ旅の髭伸びぬ
夕燕桧山の黝さ帯びにけり

吾が宿の窓の上下燕の巢

暮るるまで夕燕見てくつろげり
浴衣来て宿の畳にくつろげり
軒燕入り直せるところなり
山梨のここだく峡に露降りて
燕の糞掃きて湯宿の番頭さん
葵の辺湯町の老人体操す
燕らも起き出し峡の温泉場
夏の川いっぽん湯町貫けり
夏川の鳴りて湯町の目覚かな
鰻屋の生簀沈ませ夏の川
味噌汁に夏の三陸産長藻
避暑宿の白樺目覚めよき朝
早立の朝やって来て立葵
山梨の青実ここだく峡の空
旅の衆朝が来たよと峡燕
峡燕滑空長き夕べかな
峡燕朝餉の窓を右左
後方に山百合飛んで陸中路
とびとびに芦と巨岩と釣人と
ずかずかと川に突つ込み鮎を釣る
螢狩宿から歩いて二十分
ドライブイン四方の青嶺に見下ろされ
釣人の青嶺に向ひ一服す
夏川に遠野の河童骨休め
青胡桃溪谷渡る一両車
夏川も語れり遠野物語
日盛りの遠野を過ぎて一路西
滴る山手に取るやうに烏龍茶
夏川の上ミに一村下モに一村
山中に一ト処展け青田村
旅疲れ夏川に眼を落としみて
陸中の青田青田に眼の展け
陸中の青田青田に眼を見張り
山峡の朝をもりもり栗の花
宿の前滴る山の青頭
恐山巡りの素足投げ出せり
早立の香水ほのと曳ける女（ひと）
谿流に土用鰻を活かしをり

散策の湯町に土用鰻の香
せせらぎも馳走の一つ夏座敷
三陸の殻付き海鞘が出て夕餉

浄土ヶ浜

年寄りの部類に入り氷水
やませの魔手蠟燭岩に伸びにけり
遊覧船やませの底を這ひにけり
海猫の空中散歩愉しめり
夏潮にぼっかり泛きて松ぼくり
遊船の空中に海猫いつまでも
海上に夏霧の帯舟逸る
空中より海猫の糞浴び遊び舟
遊び舟手摺りに海霧の冷え及び
海中に落ちて広がる海猫の糞
はまなすに浄土ヶ浜の朝の風
甲高く客引きに似て海猫のこゑ
パン屑を海猫ナイスキャッチせり
掠めゆく海猫の羽ばたき紙の音
はためかせゆく遊船の日章旗
舟遊び鴟の涼気頬掠め
浄土ヶ浜蟹の称ふるお念仏
遊船を降る身例はば揺れ昆布
海霧来ると鴟の嘴敏感に
三陸の磐怪々海鞘どころ

宮古

ちよこなんと赤旗を立て牡蠣生簀
軽きがよし宮古岩のりお土産に
旅土産三陸昆布脇抱え
海猫群るる処が終点山田線
夏の蠅飛び交ひ宮古物産展
夏旅の散財宮古物産店

盛岡

氷水旗の向かうの岩手山
厚雲に昼寝かこてる岩手山
雲中に昼寝決め込む岩手山
日盛りの腹をなだむにわんこ蕎麦

アイスクリームこんもり小岩井農場製

夏霧の帽をすっぽり岩手山

涼しげに南部駄菓子石衣

日焼け顔団体客のわんこ蕎麦

手に涼し南部鉄器の灰皿は

やっと出て岩手時間のどぜう鍋

鉄塊の涼気ずいど南部釜

南部鉄器黒風鈴を土産とす

売物の鉄風鈴に川の風

帰横

納涼船百の提灯ぶるさげて

隅田川涼みがてらに渡る橋

熱帯夜の東京ジャングル走りぬけ

湾岸道路ぐいぐい反りて夜涼の灯

横濱の夜涼満点観覧車

横濱の夜涼の中に解散す

潮浴みの子の海上がる新松子
百日草まだまだ町内路地裏に
一ト泳ぎせんか石蓴を踏みしめて
ビーチバレーの日焼けピチピチガールかな
四年生のひょうたんでかくて不格好
紅蜀葵連休半ば過ぎてをり
汐風の吹き込む校庭浜おもと
渚へは歩いてゆける浜おもと
ペンキ塗る画家は二代目海紅豆
この家の主懐古派百日草
鳩と吾共に晩夏の沖を見る
海紅豆ずぶ濡れの子が脇通る
照りつける西日と照りつけらるゝ黍
炎天に気の触る雀など居らず
合歡の花もやつと朝がやつてくる
雀の他みんな暑さにやられけり
この暑さどうかしているペンキ塗り
蝉と風鈴蝉の旗色悪きかな
それとなく吹いて芙蓉を咲かす風
ペンキ塗る青空がまだ灼けぬうち
隣の子鉢に水遣る夏休み
家々より朝の水音白木槿
浜風に飛ばされながら蝉啼けり
根仕事夏の虫啼く朝のうち
灼け出してもういけないといふ時刻
銭葵質屋の主路地を掃く
朝涼の玉子に上下あるといふ
赤松の幹傾けてけふ大暑
女郎花強き日差しを欲りにけり
朔日のかまつかのまだ丈を得ず
南瓜煮る妻に俳句の出来栄え問ふ
木槿咲く朝を疾走救急車
白昼に眼眩んでもう一ト寝入り
まだ鳴かずどうしたことか油蝉
家内より炎天を見て目が据はる
ただ眠るばかり大暑にねじ伏せられ
炎帝の手をゆるめずに雀灼く
炎帝の黙殺に遭ふ野良仕事

滅すれば火もまた涼し百日紅
煮えきらぬ風鈴の音とつぶやけり
頭（かぶり）振りけふの暑さを諾へる
莫迦げたる暑さに馴るる他なかり
冷房の密室にゐて考えごと
百日紅やうやうあつさ峠越す
ふくらはぎかほど膨るは蚊の仕業
炎帝の小手調べなる立枯れ松
懐旧
疎開の地少年むさぼる河原茱萸
河馬重吉夫妻の逸話敗戦忌
仏壇にせつせと芙蓉供えけり
白木槿に挨拶それから掃き出せり
灯を消して寝入れる迄の団扇風
聞けばけふの暑さを云へり夕雀
雷に蝉網戸へ緊急避難せり
お隣さん軒より覗き雷小止み
鳴神にあたり芝居の一場めく
軽雷のひょうへんぶりにあきれ顔
雷に雨おっとり刀で駆けつけぬ
ピカザザと天地俄にさうざうし
湾の向う安房峰雲の立ち連ね
雷果てて現にかへる顔と顔
雷のあと氷室のなかにゐる如し
小山梧雨兄
酒が徒の直腸断てりと夏見舞
地下足袋の蹠を見せて大昼寝
舟虫の髭一斉のぞめきかな
そこらぢゅうとり散らかして蝉音の中
白粉花天気崩れてそのまんま
ここに来て炎暑一掃通り雨
玉突き玉めく台風天気図に
投票に向けとばかりにいにい蝉
選挙結果いやはやいやや垣朝顔
かまつかのずんと丈得し風の中
青々と百日紅の空灼かれ
猛暑にてひっくり返る畳の上
朝刊をさてと開くや丸裸
暑さうに啼く蝉ペンキ塗り重ね

朔日の朝の裸に喝入るゝ
蟻んこ等浜木綿の莖上り下り
朝曇り歩いて風を起しけり
けふいちにち大儀とおもふ夏雀
白粉花の申しそびれしやうな形（なり）
けふ浜はかつをのゑぼし揚がるといふ
祝 銀化インターネット登場
八朔の水のとりわけ銀化かな
蝉啼けり辺りの蝉音掻き消して
この幹を選びし蝉の喧し屋
「我思う故に我あり」の哲理あれば
わめき散らす蝉あり我に鼓膜あり
夕づける風の断絶蝉しぐれ
朝蝉の誦経のしりきれとんぼかな
百蝉の息ひそめけり朝の杜
このところの暑さに仁王閉口す
寝物語などして暑さ一頓挫
なほ猛威ふるふ暑さにはだけ寝る
人間は現金なもの冷酒乾す
返信を引き延ばしをり蝉しぐれ
敗戦忌止女子と名乗るひとの文
目が覚めて此処如何な國蝉しぐれ
蝉啼ける一途な力吾に無し
祝 鉄之介先生退院
爽やかな尿出るための大手術
先生の予後を芙蓉の見守れる
先生の裸清拭目に浮ぶ
鳴き声が隣に移る蝉の昼
蝉気張る朝一番のこゑなりけり
しやかりきの蝉に沸点ありにけり
蝉ごゑの一气呵成は尿（しと）に似て
蝉ごゑはもう止まらざる尿に似て
肋撫で逸る蝉音を聴きあたり
家の裏家の表の蝉音かな
霍乱の怖れもすこし蝉の道
啼き納め方にも作法法師蝉
空蝉の一つや二つほれここに
窓といふ窓から蝉音飛び込める
食欲を進むるための冬瓜汁（とうがじる）

なまけ癖冬瓜汁より移りけり
とうぐわんを食ふて今夜は何夢む
けむる花曇み込みけりからす瓜
返信を一日延し法師蝉
鼻つまみ損ねて啼ける熊蝉も
とうぐわんを食みし其の夜の大寝言
とうぐわんを食ふて食欲しゃんとせり
からす瓜の花の開閉手品めく
はやばやと眠気払ひに朝の蝉
とうぐわんを食ふて模糊たる布袋腹
途中から割つて入る蝉小うるさし
呆然と一ト日が過ぎて蝉しぐれ
二タ三言寝言洩らせる夜の蝉
さみどりに露のつめたさ青ぶだう
もたれゐる腹を浄めの冬瓜汁
青ぶだう日毎に凌ぎやすくなる
青葡萄一つ摘みて指覚ます
風も出てやつと落つく青ぶだう

霧ヶ峰・車山高原・八島ヶ原湿原
閑散と人の出待てるぶだう棚
八月の富士に向ひて釣り糸垂る
たちまち霧たちまち霽れて富士裾野
稜線に白雲支へ独活の花
待宵草靄に漂ふ須走口
御殿場の霧に朝の蛾まごまごす
厚雲に首を突っ込む文月富士
峠路の片雲奔る竹煮草
中食は青嶺を臨む山彦亭
鞆置き朝のハンカチ使ひ初め
バスツアーバツジ甲州葡萄いろ
山霧の流るリフトに足を垂れ
霧込めの風にふるふる車百合
車百合あらずかしの霧隠れ
たちこめる霧に慥然と独活の匂つ
ゆく雲の明るさ持てり独活の花
ししうどの花ぼっかりと霧の間
獅子独活の霧零切る柵の内
首に巻く白手拭に汗ぬぐう
遠蟬はあの辺りより諏訪の森
霧生んで白樺映ゆる白樺湖
青くわりん叩きに山から棒の雨
レタス打ち八ヶ岳より夏の雨
青八ヶ岳を描くスケッチ覗き込む
馳せに馳せ来れる青嶺青田押す
青栗に結びて八ヶ岳の夏の露
いちめんの灼くる青田の緑に村
八月の雀の仰ぐ八ヶ岳
栗を添え鉛筆描きの八ヶ岳
湖に一蟬のこゑ徹りけり
松虫草霧かいくぐりかいくぐり
松虫草心細げな屯る咲
霧らふ山下り来てホットミルクかな
どこまでも霧どこまでも独活の径
湧ける霧松虫草を目隠しに
霧らふ日も霧湧かぬ日も松虫草
無精髭撫でつつ見遣る反魂草

ぎしぎしの枯れて立ちんぼ流れ雲
獅子独活も昇りをるなり車山
背後より松虫草を覆ふ霧
下山道心に点る夏薊
松虫草残して山を下り始む
気象レーダー霧混む天の奥探る
ししうど咲く車山肩下りけり
山巔に立ち老鶯の気分なり
山頂も果たして同じ霧の景
先生の引率ニッコウキスゲの径
繡線菊の高々咲きに頬ずりせん
松虫草眼下を霧の昇り来る
松虫草岩原を霧波打つて
足許を見つめ登れる薄雪草
顔寄せて頬紅いろの風露草
いっぽんの手拭首に花野行
山巔の霧を切り裂きつばくらめ
登山リフト蝶にエールを送りけり
山頂の霧厳しかり岩の相
暮れなんとニッコウキスゲの終の花
高原の吊鐘人參いろの雲
高原の道端穂芒初々し
グライダー大格納庫霧閉ざす
ししうどの花横なぐり霧暗転
吾亦紅撮りつつ現像する話
吾亦紅霧の冥さを帯びみたり
長旅にピリオッド打つ吾亦紅
ししうどの花の明るさ湧く霧も
霧の中一人で歩く霧ヶ峰
声色も乙女に還る夏薊
もくもくと歩く他なき霧の径
松虫草屯し霧を誘い出す
繡線菊のまだ弾けざる花の端
音もなく霧に突っ込むグライダー
山神の申し子松虫草霧らふ
ししうどの花に小虫の軟着陸
飛んで来し岩の岩角霧鞆
腕さすりさすり白樺林抜け
岩盤みち手をつけられぬ霧をゆく

霧襖老鶯のこゑ珠とせり
どうどうといなし花野を巡る馬
向き替ふる霧の先見て山下の
斑の著く霧潜るたび小鬼百合
一条の霧を抜ける日の光
覗き込む下山路霧を背にしたり
霧を来て鮫肌いろの両腕
芒叢翅をこすりて虫啼ける
吾亦紅自と手の出て爪弾く
繡線菊に溜息つきて立ち止まる
ししうどの花に集まる沼の虫
繡線菊のからくれなゐに一歩寄り
竈馬ひよんなどころに罷り出て
見えてゐて擬宝子震はす虫の尻
石ころ径霧に眼の利く蜻蛉来て
沼の霧動くにつれて人動く
山萩に言葉かけゆく七合目
湿原に飛びて大きな蠅の音
吾亦紅独りごころを通す黝
吊鐘人參羽虫においでおいでせり
ししうどの花を霧今閉ざすところ
霧らふ沼白樺いつぼん立たしめて
吾亦紅見つむだんだん黒くなる
吾亦紅見つめて見詰め返さるる
覗き込むひとを仰ぎて風露草
老鶯のさうともさうとも珠のこゑ
湿原は風湧くところ風露草
松虫草独りごころを大切に
灼くる日がこれから始まる常緑樹
思ひ立つまま家立ちて花野に来
お花畑巡るツアーに参加せり
大花野双眼鏡に納めけり
早起きに寝惚けまなこのうぜん花
お花畑三つ巡る旅決めにけり
山男夏旅の荷を股挟み
昔のこと通勤地獄汗地獄
蝉の森手ぐすを引いて朝を待つ
登山帽に通勤ならぬ通勤車
今朝の秋著く定年一年後

洗面の水に顔浸け今朝の秋
をりをりの風が救ひや蝉しぐれ
仔鴉の鳴くやまうまう仔牛めく
思い立つままに旅して来て夏野
とうぐわんを前にして覚む大昼寝
ファックスの文字も掠る大暑かな
起つ風に一献欲しき蝉しぐれ
旅のプラン練るや颯風横睨み
蓴菜もうまかろ白神山の水
蛭に似しひとの又云ふさかしら言
ごきぶりのどうでもよきが髭を振る
無関心装う顔のいと涼し
夕風に胸撫でおろす蝉しぐれ
暑気払河豚のたたきに舌づつみ
冷麦茶ありて重宝しておりぬ
なまる身をしゃんと正せる冷麦茶
ありふれてゐる定年と白粉花
稲雀窃盗団に似てをりし
自堕落を正せる薬冷麦茶
冷麦茶薬の如く頂ける
かまつかの紅蓮を見栄とおもふ日も
鶏頭の見栄張る葉とも見ゆる日も
白蓮見栄にこだはること止めぬ
女郎蜘蛛見栄張る思ひ斯く深く

ごによごによと云ひて夜蟬の紋切型
 昼寢覚本の積まるゝ六畳間
 盆休み山積みにせる本の山
 晩蟬のこゑ押つ被せ押つ被せ
 垣朝顔八方美人といふべかり
 健啖な土用雀のゐる路上
 先に鳴く蟬音下火となりにけり
 ほれほれと土用雀を翔たせゆく
 まだ火照る土用雀の石ころ路
 暮るるまで土用雀の遊び好き
 ひきがへる飛石の端に片手懸け
 祖父祖母のおもひ新たに芋殻焚く
 節くれの如きが啼ける油蟬（ゆせん）なり
 怪談読む頁押えに煙草の箱
 輩（ともがら）の啼く中蟬の終のこゑ
 ひきがへる定年面を覗き込む
 死期近き蟬に誤算のなかりけり
 ひきがへる一ト瞬きに雲隠れ
 定年の或る日の墓とご対面
 ひきがへる金覆輪の大まなこ
 シヤワー浴ぶといふより滴らす
 シヤワー浴ぶ齢相応の水量に
 芋殻焚く新聞紙は吾が持ち
 芋殻焚く時とや妻に促され
 落蟬のころりと参る姿かな
 なりふりもかまはず蟬の正念場
 思うともけふを限りの蟬ごゑと
 啼きざまもけふを限りの蟬のこゑ
 さるすべり咲きつゝ散れる空まさを
 油蟬鳴いてくわりんを太らす
 土壇場の蟬の声音と思ひけり
 炎ゆる日のイチローを観るビルゲーツ
 手馴れたる炭坑節ぞ輪に入る
 辻曲りまた聞こえくる踊唄
 墓地越へて二夕夜続きの踊唄
 伝心寺墓地を越へくる踊唄
 顔ぶれも昭和生まれの盆踊
 炭坑節踊る世代や夜も更けて

盆踊り腰の団扇を傾けて
 浮袋並べ干しある夜の家
 踊の天星のながるゝやうにかな
 盆踊り八木節空へ筒抜けに
 学校へ自転車で来て盆踊
 校庭に輪をいっぱい盆踊
 景気よく踊のべは炭坑節
 盆踊たけなはいつかこども退け
 校庭の夜の向日葵に踊唄
 喚く蟬死期を早めるかも知れず
 用済みの扇風機とはなりにけり
 扇風機座敷の隅に控えをり
 ながらへる蟬長鳴けり高野槇
 呟ける夜蟬は劍客シラノのこゑ
 通り雨ながらふ蟬に落蟬に
 杉の木を選びて終の蟬鳴けり
 その時が来てをり蟬の往生際
 日盛りの路話しゆく婆と婆
 からす瓜手品のごとく花蔵ふ
 よい匂ひして来ぬ土用の焼にぎり
 水戸 潤沼 那珂湊 大洗 笠間吟行
 居酒屋の親爺水遣る朝顔棚
 珈琲を呷り夏暁の顔覚ます
 旅装して電車待つ間のアイステイ
 珈琲スタンド椋鳥のごと止りけり
 八月の日暮れの雀群がれる
 八月の木と木の間合佳しとしぬ
 東京に先づ出てそれより避暑の旅
 とんとんと砂糖ステイクアイステイ
 夏休みやや空いてゐる山手線
 軽装がベスト炎天あるく旅
 夏の朝蒲田で降りて羽田組
 雑草（あらくさ）の放蕩キャンプ場裏手
 網棚に父子のリュック夏休み
 乗り合はす夏の嘗ての通勤車
 蓮田が見え来て土浦もう間近
 浜木綿の髭の翁と海をみる
 揚舟の合間合間のかやつり草

ぎしぎしの枯れざま海は荒れ模様
浮袋抱きかかふ子に海時化て
鯉季寿司食ひに寄る那珂湊
声涼しくブラックタイガー売り込めり
魚市場氷の床にホッキ貝
魚市のアサリ大玉山盛りに
大波の引く音晩夏紛れなし
盆波の生めるあぶくのたゆたへる
ビーチパラソル傾き海は時化模様
よく茂る杜の向うに村ありて
民宿の裏手のへくそかづらかな
八月の海荒れてあり大洗
潮濡れのもろもろ干して海の家
赤浮輪黄浮輪一つ波に乗り
砂日傘より金切りごゑ飛びぬ
水戸つぽもたじたじけふの土用波
土用浪岩岩没す一刹那
土用浪頭（かしら）を天に振り上げて
藪椿の茂みの奥の常夜燈
身を屈めながら地に降る秋の蜂
吟行の背にし前にし土用浪
海神に茂り大きな樟いっぽん
農道のそのまた向うも諸畑
歪性の向日葵教団居着く村
青葭の辺に白鷺の水鏡
蓮咲いて天地開闢以来の紅
息吸へばふつと身を抜け蓮の香
寿司種の鱈の泳げる大洗
曇日の鹿島灘より土用波
常陸山生まるゝ國の豊の秋
束の間に日照雨上れり稲の花
盆踊りきのふで終る高櫓
いちめんの稲穂明りに目の馴るる
退院のその後を聞けり芙蓉の辺
草の上鰻震はす鰻のド
魚跳ねて晩涼の翳曳きにけり
鰻漁潮水に舟洗ひ立て
まなうらに黄昏迫る鯼の影
藤の実は一服の涼長居せり

鯨跳ねてひらひらと沼の風
ひらひらと釣れて涸沼の鯨小振り
大昼寝に似たやうなもの定年後
大きドの底にのた打つ沼鰻
象亀のやうなテントもキャンプ場
草刈ってボーイスカウトテント村
蒲の穂や白鷺宙に脚を曳き
八重葎埃鎮めの日照雨かな
魚信（あたり）なく沼に鰻の大昼寝
逆光の鯼の間髪入れず跳ぶ
波くらしらりと次の鯼跳ぶ間
釣り上げし鯨に陰影生まれけり
海上を峙へ戻る鵜の一羽
魚跳ねて晩涼の風もたらせり
水戸つぽの俳句仲間と磯あそび
やまももの樹下に二人の大昼寝
那珂川の水量のこと遠雷に
秋扇遠ちを流るる川に向き
ざりがにの骸踏みゆくざりがにも
稔田に日照雨明りの差し込めり
蝉しぐれして那珂川の見ゆる丘
句を案じみて唾蝉のごと黙る
蝉しぐれ顔扇いでも扇いでも
つと離れ一人空蝉探すひと
三人が三人扇子取り出せり
扇子もつひとは扇子を遣り木蔭
涼しめる櫂の呼べる風の中
みんなして鳴く出す蝉を探しをり
土用波前に男の仁王立
蝉パタパタ赤松に取り縊りけり
扇子パタパタ遣りつゝ俳句推敲す
蝉しぐれ救ひの風が吹きにけり
鯨釣が話して料る妻のこと
反射炉と燈台巡る夏休み
一休止入れぬ風死す反射炉に
夏菽のかすかかほるとこゑありぬ
しじみは朝うなぎは午後と漁仕分け
時化するぞと牢名主めく舟虫が
磯釣りのバケツ覗けば鯨ばかり

大洗海岸盆の潮けむり
タマキビを剥がして遊ぶ盆休
老人ホームまだ見えてゐる稲の花

貝塚

藪蚊打つ自ずとこゑも添ひにけり
昼顔に降り出す雨のすぐ上る
大粒の雨大岩にめひしげに
素破雨と奔り回れり水馬

八十翁肱の藪蚊を討ち取れり
雨来ると知らせをるなり水馬
大方は老ひて大樹の蟬を聞く

老人を刺すとはふとどき蚊の小奴

天牛の背を一ト息に押え込む

天牛の掴まえ方を披露せり

田蛙の跳ね継ぎ跳ね継ぎ貝塚まで

はたた神貝塚覗きゆかれけり

貝塚に差し込む稲の花明り

天牛を押さふ感触掌に残り

秋草といひて一草引いて来ぬ

蝸に貝塚の貝浮くごとし

棒切れで追ひ回されて蛇必死

はたた神ダイダラ坊を起すなよ

ピカソ展（陶板）

炎ゆる日の笠間にピカソの陶板展

鼻好きピカソの遊びごころの壺

夏バテを知らぬピカソのミノタウロス

童（わらんべ）の眼をもつピカソの鳩涼し

げ

日焼け子にピカソの描く貌ぎくしゃく

ピカソ描く「顔」に日焼け子あつぷつぶ

炎ゆる日に訪れピカソの闘牛士（ピカドール）

黒涼しピカソの壺の鼻図

魯山人旧居

のうぜんのむっと一雨ありさうな

何故に精霊バツタ身の反れる

躰つきへなりと精霊バツタかな
木を替へて雨後の蝸鳴き出せり

蜻蛉の翅ゆるめけり枝の先

尻が白なれば塩辛とんぼなり

糸とんぼ翔たせぬやうに間合とり

指先に精霊バツタからかへる

訓示垂る大向日葵と思ひけり

糸とんぼ尻尾を東西南北に

法師蟬ヒステリックに鳴く奴も

熊蟬鳴きぐるり見回す辺りの木

魯山人旧居晩夏の厠借る

睡蓮の合間に蛙飛び込めり

にびいろのすいれんの葉にのこる雨

魯山人旧居茶室に蟬を聞く

法師蟬突如トーンが変りけり

あさがおに夏も了りの尿の音

かうもり図の円卓据えて夏座敷

魯山人旧居涼気の徹る土間

石庭に雨後の蝸徹りけり

石庭の石組み泛けり蝸に

食道楽蝸屋敷遣されし

蟬聞きつ田螺が徒の魯山人

笠間稲荷

秋風のそろと笠間の石狐

提灯吊りふうせんかづら乙なもの

目の馴れてふうせんかづらの在りどころ

秋立って笠間稲荷の太柱

蒸し暑く古称は胡桃が下稲荷

大向日葵天気一旦持ち直し

蝸の途方に暮るるこゑの中
 蝸の途方に暮るるこゑと聞く
 店先に水打つ鰯の洋服屋
 はたと佇つお盆休の床屋の前
 さうかさうかお盆休か散髪屋
 槐散る樹下いちめんのうすみどり
 槐散る路たんたと通院日
 通院の幾年になる蓼の路
 八月の暗室に入り胸部撮る
 三人の面搔き消しておがら火果つ
 迎火焚く横を挨拶して通る
 新宿の地価折り込みの氷水
 暗室に胸部撮らるる敗戦日
 日盛りの老人割引利く映画
 風の来る方を開けおき芋殻焚
 夏野にて特攻語る老作家
 戦時下映画深夜に及ぶ敗戦日
 巻貝の真白鎮まる終戦忌
 青空がまるごと灼けて玉砕日
 筆書きに質屋の盆の休み札
 夕日背ひ鳴く蟬破れかぶれかな
 カウンタに西日差し込むカレー店
 エチオピアカレーに乾すや夏の水
 馬車道のポプラに夏の三時の日
 涼まんと帆船模型置く茶房
 炎天をマリオネットのごと歩し来
 ハンカチをベルトに挟む齢でなし
 昨年はずっと降られし芋殻焚
 落蟬のごとく仰向きぐうらた寝
 被るのがめんどうなだけ夏帽子
 蟬わつと鳴き出す前にしておくこと
 芋殻火の白きほむらに膝染めて
 芋殻焚く煙閣底にとどこほり
 炎天下出歩く妻の帽子好き
 夕かなかなほとぼり覚ますやうにかな
 鼻の利く蚊なり酒の香嗅ぎつけて
 蝸や椅子の片脚浮いてをり
 散水の葉蘭打つにやぼたぼたと

梨貰ひ大きい方をののさんへ
 梨を剥く皮のぶらぶら定年後
 網戸打つ火取虫にや今の音
 かなぶんをぶんと飛ばせる夜更けの灯
 稲雀分派岐れてお稲荷へ
 田を翔つて廃屋襲ふ稲雀
 せきれいの煙管の筒を叩くごと
 定年の先々のこと地蟲鳴く
 蟬しぐれ潮時が来てすつとひく
 母交ふ茶請けに千葉の落花生
 案山子らの寛ろぎ佇てる晴夜かな
 作務衣の紐三つ目結ふて炎天へ
 み仏に供す落雁下ろし食ぶ
 家内を覗いてゆける白日傘
 畏くも玉音放送花かぼちや
 青天の下お稲荷の森灼かる
 脳髓にしみつく法師蟬一つ
 はや背丈子に追ひ越され夏休み
 肉声に肉声ぶつけ油蟬
 濃紺の作務衣に蟬音徹りけり
 作務衣著てころろ広らに朝草刈り
 高校野球
 応援はもちろん地元蟬しぐれ
 青天にもってゆかれし大飛球
 地に叩きつけて打球は土用浪
 ピッチング入道雲の高さより
 松商の打線の厚み雲の峰
 汗飛ばせライトのバックホームかな
 割れ鐘の蟬の独壇場に入る
 使ひ減りする鉛筆や初ちちろ
 青空を抱えて蟬のみごとな死
 颱風は颱風として薬のむ
 颱風は眼中び無しつくつくし
 蚊を前に渦巻き線香発明譚
 秋出船メリケン波止場に佇めば
 ゑのころの原っぱ雲の展望台
 除虫菊そもそも蚊取り線香は
 蚊を酔はすのみに止むる線香にて
 蚊遣り焚く明治の香りそこはかと

颱風の目玉の中のしじみ蝶
小吉と土用鴉のご託宣
向日葵の王道ずんと地平線
向日葵の王道青すすきの霸道
颱風の気配に庭の蚊も避難
あらあらしく落ちて来るなり葛の雨
蚊遣豚最後の焚きし何時のこと
はっ秋の風にたはむれ川原草
枕上ミ蟬に替れる今朝のあめ
芙蓉押し雨に伴ひ来たるかぜ
颱風の前ぶれの風雨誘ふ
大風が来て葉鶏頭泳がする
またありぬ愚図颱風の雨のおと
葉鶏頭嵐を前に鎮まれる
小雨降るばかりよ蟬のあつけなし
飛行機も脚を奪はれ颱風裡
夜来の雨蟬も葉陰で聞いて居る
颱風の前ぶれの雨バタと来ぬ
颱風の続報土砂降り十津川村
その昔
颱風の雨の断続トタン葺き
いよいよかかまつかに風募り来ぬ
颱風の見通し逐次お茶の間にて
風前のともしび燈台颱風裡
颱風の出方を待てる外房線
鴨川の鴨映さるる颱風前
その歩みバスよりのろき颱風来
風来坊颱風こっちへ向って来
颱風の雄叫び挙げてゐる足摺
颱風や瓦搏ちつく樹が凶器
颱風の腕力のほど身にしみて
颱風に懲りて刈込む月桂樹
颱風警報四つが四つ全て出づ
颱風のその後を同じ予報官
颱風を高みの見物とはゆかじ
颱風の雨の暗闇猫の鳴く
天地の間颱風一掃す
颱風を家にて迎ふ定年後
颱風に備ふ警報取り揃え

颱風ののろまマラソン選手並み
颱風の災難に遭ふ蟬のこと
颱風のなほも北上陸伝ひ
だらだらと雨降るなかの蟬のこゑ
颱風来玄関にわかには物置場
颱風の合間蛮勇ふるふ蟬
吹き込まぬ方の窓開け颱風裡
颱風の隙ちよいとつき蟬鳴けり
腹中に見下げられをりお諸の屁
夏瘦て花王石鮫また逃す
要するに秋らしく詠む其処が駄目
一人吟行今こだはりの昼の蟲
颱風の何時過ぎるかと昼灯
羽蟻翔ぶ為の最小限の羽
胡麻を播る鉢支ふ手をとやかくいふ
蚊に喰はる妻が夜中にむずと起き
蚊に刺さるとか云ひキンカン塗ってをり
留守居また言ひつけられて昼寝する
まだ使ふ団扇を傍に置いて寝る
颱風のあとのなんだいこのあつき
蠅叩遺品のごとく扱へる
胡瓜漬ぼりぼりやりて昼餉了ふ
梨といふ天然ものの水の味
「中原道夫俳句日記」恵送受く
ひょうたんから俳諧を出す粋なひと
少しづゝガタのくる家颱風圏
国際俳句国際俳句といふ御仁へ
哲理とは無縁なところ草の花
事は足り秋暑の旧版広辞苑
虫の夜を漁る旧版広辞苑
褒貶はふうせんかづらの彼方かな
干竿と萎れ朝顔家裏に
秋蟬に引導渡す母郷の陽
こゑも褪せ茶の出がらしのやうな蟬
称名寺さまの薨の颱風禍
また聞きを妻の話せる野分あと
一つ見て千の羽蟻が脳髓に
颱風一過羽蟻もぞもぞ出る夜かな

机に稿に羽蟻の落下傘部隊

灯を取りにきたぞと網戸の外の蟬

原稿に降りし羽蟻に迫る指

ペン皿の谷の辺りを羽蟻這ふ

そこから這えば潰さるがおち夜の羽蟻

押っ庄（ぺ）せとわが連れ合いは蟻嫌ひ

灰皿に灰を落とせる終戦日

灰皿に灰横たはる終戦日

颱風一過パンパカパンと晴れわたり

夜更けの虫煙草ふかしに起きて来ぬ

一列にお行儀よくてチューリップ

春の絵本桜の木伐るワシントン

クリスマスカード人形のテディにも

珊瑚樹の実や百日をうち過ぎて
 灸花今はかうして日を送る
 葉鶏頭勢いづいて来たりけり
 処暑処暑と今朝方の蝉さう鳴くも
 首都圏ニュース稲の作柄やや良と
 夕飯の支度そろそろ蝉音減る
 旅宿の予約がとれて夜の秋
 まろまろと蝉の脾腹と吾が脾腹
 似通うて蝉の脾腹と吾が脾腹
 文面は二様にとれぬ秋燈下
 モダンなる家の良夜の玄閑燈
 どかどんと犬へこまする大花火
 振り仰ぐかほに花火の三原色
 もう一丁肝っ玉ひやす花火欲し
 腹に滲むいけいけどんどん花火かな
 晩酌や遠蟬しぐれ風に乗る
 法師蟬手拭絞って顔に当て
 夏枯れの斯くも俳壇お佛壇
 花火見る若き夫婦と乳母車
 紫薇花下に極楽おもへとや
 夕蟬の法師が語りかけてくる
 楓（フウ）の木とおもふが疑問早落葉
 何の木か知らねど杜の早落葉
 産土の祭りも了り早落葉
 野辺の草コップに挿して涼しめり
 蝉ごゑのヒリつく中を投函に
 昼顔のぷるっと雨滴零しけり
 単純で明快が佳し花芙蓉
 こおろぎが畳のうへに上がり込む
 教室のみんな窓開け蝉しぐれ
 蝉よ虫よはじめ大切もう寝よか
 日に三度通るこの径灸花
 ゑのころの首振る土手に鯨釣れり
 喜多方ラーメン秋風に鳴る商ひ幡
 曇日の心地好げなる百日紅
 曇日の彩に安んじ百日紅
 グラビヤ版岡本眸
 こおろぎの風貌詩人飯炊くか

俳句の業負はずに済むなら花芙蓉
 えらきこと顧み啼ける夕の蝉
 明け暮れに芙蓉の侍る路地住ひ
 定年後峯雲つくづく見ることも
 自嘲
 晩夏を病む五十肩とは若々し
 夏暁の体操おいち・に・さんと手が回らず
 晩蟬の明けても暮れてもこの一手
 ももすずめ蝶に功成り名を遂げぬ
 火に掛けて焼く間みすゞの鯛の詩
 尿（しと）せんと厠踏まえぬ初ちちろ
 夏枯れの初老の尿（しと）の音と聞く
 屑籠の編目細々ちちろ鳴く
 何でも入る屑籠があり秋爽に
 昏倒の蟬を箒に懸けにけり
 鳴く程に蟬の非力を思はする
 手に届くところに秋と屑籠と
 重宝な屑籠にして虫の宿
 身ほとりに大き屑籠露けしや
 燈火親し籐の屑籠侍らして
 屑籠へどさりと秋の紙の音
 四六時中颱風のこと考えをる
 自墮落な昼寝肋が泛いて見え
 空蟬の眼が雨音聴いてゐる
 初孫の智慧のつき方瓜の種
 子かまきり
 かまきりの雌にはあらず種（たね）違ひ
 かまつかの雨に搏たれて大きくなる
 蝉しぐれの中に身を投げうたたねす
 キューピー人形砂に埋もれ秋渚
 よそゆきの水玉模様天道虫
 反橋より亀を見下ろす秋麗ら
 鳴きたがる蟬を引つ込め秋の雷
 廃屋に謀議を凝らす稲雀
 反橋と珊瑚樹の実が照り合ふて
 肌着となり一人蝉聞く男かな
 夏櫛樹下に憩へる忠魂碑
 秋の池雲のごとくに亀泛ける
 一山の一木ごとの秋の蝉

珊瑚樹の赤貧洗ふがとき実よ
けなげにも蟬が櫂に取り付く囚
横綱の櫂に蟬は胸を借り
鬼やんま飛行高度を上げにけり
一山の蟬音天衝く孔子木
一山の蟬と楷樹の梢の蟬
達者なる足腰秋のあめんぼう
大櫂一本づゝの蟬しぐれ
蟬一つ取り付く島もなき櫂
鶏頭の大小万霊供養塔
蟬殻を子に見つけさせ驚きみる
それならと紅葉の頃の宿をとり
苧麻（ちよま）知らず東海道の一筋も

蟬の法華経

忍辱（にんにく）の鎧に蟬の啼き通す
不受不施と日蓮坊を慕ふ蟬
良医の喩
顛倒せる蟬の太つちよ一凡夫
方便の一つに蟬の小便も
ご法話に蟬随喜して靈鷲山
啼き了へし蟬のころりと仏国土
けふも又蟬の頭陀行櫂の木に
「法師品（ほっしほん）」称えて蟬の生ま
る也
世尊に掌合はせるごとく芙蓉閉ず
大施主のこゑを代弁油蟬
森深く蟬八百の眼（げん）瞠きて
往生の手形に写経法師蟬
息つけり蓮華数顆のかほる中
三乗
選ぶなら櫂の木食頭陀行派
羽化の蟬地涌（じゆ）の菩薩の化身にて
空蟬
身は空に放ちて蟬の糞掃衣（ふんぞうえ）
定年は如何にと蟬の頭陀行者
法師蟬多宝如来のこゑ以て
忍辱の心の裡を法師蟬

成仏を明日に蟬の富楼那（ふるな）の弁
蟬音断ち鞞彦の釈迦説法図
銀砂子撒ける蓮池（れんち）のいと涼し
芙蓉咲き生・老・病・死持ち回り
蟬は木に登る六根清浄と
喚く蟬二百億劫（こう）経て成佛
虚空会（え）の説法蟬のこゑ借りて
念力をキリキリ蟬の大神通（だいじんずう）
蝸に三十四身変化佛
竜口寺蟬音の念彼（ねんぴ）観音力
昼寢覚六牙の白象降り佇ちて
蟬は今普賢の行説く大団円

かまつかのてんでこ舞の風の日々
防災員古手の妻の防災日
集会へ家庭防災員の妻
戸締まりを寝しなに問はる防災日
秋蟬として一日を長びかす
新諸の臭ふと鼻をうごめかせ
圧力釜シュシュポ蒸かす走り諸
新諸の昼餉のかほりして来たり
新諸の一ケ半にて腹膨る
甍瓜（かもうり）など酒の肴の大雑把
妻の寝顔すやすや虫音の高音部
窮屈な形（なり）の苦瓜もぎにけり
余裕派といふ一派あり夕蝸
橋脚の鳥貝吹く秋の風
産土の祖霊を宿し蟬の殻
一政の小品に似て蟬の景
蟬の瑠璃ちらつと脳裏掠めけり
亭々とあすなる晩夏の翳もてり
二学期の始まり告ぐる母のこゑ
夏休み了るをごねる隣の子
新諸を水に濯げば紅はしる

にんにくと煙草の話文化の日

胸の上に掌を組み蝉の涅槃の図
八重葎鬱蒼の夏了りけり
日付表示時計購ふ敬老日
葉蘭打ち秋意深むる漫ろ雨
猫鳴いて横切り消ゆる秋の雨
雨ありて芙蓉を発てるヒメシジミ
籠枕雨音庭にひろがれり
傘たたむ音の聞こゆる籠枕
定年の物相頭籠枕
日が差してはつと墓域の鶏頭花
秋口の法華経祖師に届くべし
人好きの蜻蛉もゐて釣日和
一湾の風横切りて番鴨
通し鴨小田原評定して居りぬ
群るゝ鴨沖に寄合あるごとし
海猫のこゑ美声に遠しワルナスビ
秋風に法華経誦すこゑ切な
釣人を尻目に漕げるかいつぶり
棧橋の先に鮎跳ぶ弁天屋
何計る鴨の寄合沖合に
文様は八つ目の蛹葎食ぶ
ゑのころの貧乏揺すり止まざるよ
鴨群るゝは寄合に似て何計る
閻伽を汲む音の森閑秋の昼
ボールペンかすれぬ昼の虫の音も
諸喰ひつ妻の教科書世界地図
水面を飽かず眺めて鯉の貌
ゑのころに風吹くばかり鯉釣れず
鯉釣の装備の一つ烏龍茶
やおら射す日照雨に蝉の鳴き募る
芙蓉の上風のゆきかふ夕べかな
胸に掌を組んで落蝉みまかれり
蝉喚く午前や午後や稿急ぐ
昼顔の昼の深さや虫すだく
堂縁に蝉殻一つ置いて来ぬ
満腹に良夜の町の遠明り
大露の柱叩いて佇めり
胸板の手術痕撫で厄日の床

二百十日一生の厄既に負ひ
唄ふごと金魚の口付きよぎりゆく
栃木雷処
八溝雷聞きて那須雷腰上げぬ
落蝉の累々とあり榊根方
落蝉や榊の薄暗がりの中
榊抱えこゑふりしぼる秋の蝉
榊の実を嗅いで納得ゆきし顔
吾に迫る二百十日のはたきの音
厄日なるハタキの音に迫立てられ
こほろぎの玄関にゐて鳴く声か
白露の亀怪訝さうなる顔を向け
老人のお手の物なる芝刈機
むづかしき顔して郁子を詠む御仁
行ずりの墓地の塀越し槍鶏頭
にこにこと寺の石榴の和尚顔
青柿や雷親爺首出す家（懐旧）
実ざくろや法事の木魚ぼこぼこと
まんじゅさげ此処を黄泉路と違へ咲く
ひよろひよろと優（やさ）彼岸花茎を立て
玄関にて鳴くはこほろぎの居候
台風の戸締り妻と手分けして
夏葎雀翔たせて止まらせて
大宝院
称名寺一坊跡の夏ずいせん
金沢山（きんたくさん）弥勒院跡まんじゅ
さげ
反橋を濡らして秋の雨あがる
一斉に雀発たせて夏葎
秋雨を避けんと寺の簷借りて
めひしばに雨のそこそこ降りあがる
秋燕この雨何時か上がるだろう
側々と雨脚白しまんじゅさげ
眺めあるだけで冬瓜そを買はず
呑み込んで理解しておく雁供養
お隣の芙蓉が咲いてホツとする
蝉しぐればちぼち四時と教へられ
まんじゅさげ生ふその辺り塚山か
あをぞらに首入れ秋のきりん草

秋風が立つて秋場所立ちにけり
台風が揺らしテレビの走査線
吾と古り二十世紀といふ梨も
これやこの二十世紀の梨名も古り
安国論寺

蟬喚く真言亡国禪天魔！

秋湿り桜大樹の樹脂匂ふ

翅のある蟻が翔ぶなり颱風下

忽然と羽蟻の現るる台風下

芋煮会時代遅れの君とわたし

おおいやだ本の上這ふ夜の羽蟻

顔映す颱風一過の潦

お風入れ細胞に似て日本絵図

門前の並木蟬音の隙だらけ

赤ポスト今にも来るか颱風雨

駐車場あちこちに殖えぬのこ草

四角張る柿や青さの抜けて来し

松窓乙二

秋簾乙二のごとく籠りけり

はつらつとくわりんの母体青湛え

其の数の如何ほど秋のあめんぼう

壁に蜘蛛大型台風通過中

大蜘蛛と留守居颱風やり過ごす

颱風の最中の気まぐれ天気雨

植木ひっくり返し颱風余波の風

南洋へ勇魚のごとく船南下

ラバウルへ南下勇魚のシャリアピン

シャリアピン号にはだかる雲の峰

スコールを潜り潜りて船南下

甲板にて星座教室天の川

船の旅プールではしゃぎ夜はダンス

サイパンの灼けし白砂に目を射られ

バンザイクリフ直下口開け夏怒濤

アロハ着て島を一周レンタカー

ホテルの壁びっくり仰天守宮出で

颱風来島へ横づけシャリアピン

スコールと指さす右舷左舷かな

ずかとりトラック島の珊瑚礁

ガヴァジューストラック島の日陰選り
椰子の間百葉箱のやうな家
ラバウルへ上陸蟹と目が遭ひぬ
タロ芋のとてつもなきを掘る島人
洋上にもこと双子の雲の峰

蓼の道ここら硬くてつんのめる

秋晴れて象のだぶつく胴廻り

塵つつく土用鴉の業つくばり

定年のとある日に炊く栗御飯

樺ゆさゆさ颱風のお通りだい

はためくは芭蕉か曇り硝子越し

洗濯物まとめて干され野分晴れ

さんざんな目に遭ふ公孫樹野分晴れ

台風 of 蹴散らす杜の櫓の葉

台風の行方蜻蛉の現るるそら

台風の雨ぶったたく函の家

台風に息をひそめて函の家

台風なぞへっちゃらと家勇み出づ

台風なぞ平気の平左壁の蟬

がらがらと戸を開くる音野分あと

颱風は蒲うち倒しうち倒し

颱風の詩なぞ無きかと本を繰る

雨漏りの家とはなりぬ大野分

白一線蜻蛉の翅の下の波

雲飛んで急に明るき野分空

颱風に坐すのみほんろうさるゝ百（もも）
木

颱風は目の上昼餉の昼灯

定年や人事のごと颱風遣り

台風 of 目に入る穹に目を上げて

台風 of 目玉緩緩わが頭上

台風 of 目玉上ゆく痛快や

台風 of 一つや二つ屁の河童

台風を迎ふも泰し定年後

戸といふ戸にザザと吹きつけ颱風雨

いざ颱風来ませ万端怠りなし

颱風に馴れて添木の手際よし

眼前の樟を揺さぶる暴風雨

野分の小枝送電線に触れたがる
立木薙ぐ風の鈍刀颱風裡
台風のあとにけろりと青きそら
ひたる湯に透きて無月の爪のいろ
無月なり湯舟の底の粗き砂

山形行

出立

旅立ちの一步踏み出す露の空
頭の濡れて露の暁光電車かな
新宿の空にびっしり露のビル
秋色の烏龍茶壘車窓に立て
秋あかね通りすがりの大石田

羽前長崎 芋煮会

蕎麦の花何とかもちて旅の空
老眼の少し進みて蕎麦の花

トコトンと左沢（あてらざわ）線蕎麦の花

羽前山辺羽前金沢（かねさわ）稲刈りどき

途方もなき稲穂の寄する小学校

芋煮鍋そら噴く芋をさあさらえ

芋煮鍋据えて女の甲斐甲斐し

男一人混じる身をかし芋煮会

芋煮会連れの女の三人と

出来秋の山形米の「どまんなか」

ぎしぎしの錆びを蜻蛉の貰ひけり

鍋蓋におたまの鎮座芋煮会

鍋尻をなめて芋煮の炎のまはり

ふるふるのちぎりこんにやく芋煮会

芋煮会差し入れありぬ香の物

見渡して芋煮の鍋の据えどころ

焦げ跡のしるき鍋蓋芋煮会

鴉みて待てば芋煮の鍋噴きぬ

芋煮会里芋いろの昼の月

芋煮会煙の行方に昼の月

芋煮会果てし磧に灰の飛ぶ

芋煮会蠅も仲間に入りたがる

焚き跡の煤け岩かげちちろ鳴く

米倉の大阪壁に秋あかね

秋晴れの飴玉舌に転がして

栃の実のおやおやこれは双子にて

栃の実入れポケットぽこと膨らめり

栃の実を拾ふと云へど一つで足る

栃の実にポケット膨らませてあるく

陸羽西線

陸羽西線稲田の風を呼び込みて

陸羽西線刈萱の峡狭まりて

新刊の書に似る稲穂明りとも

山形米はえぬきといふ田を一望

棒稲架の 一列縦隊托鉢めく

向き替る風のまにまに稲雀

雑草のぼつんぼつんと早稲田なか

真ん中がへことやられて風倒田

稲雀飛び発ちどきを誰が合図

稔田に交りて稗のまんめんじん

稲雀飛来選り取りみどりの田

稲雀稗田は通り過ぎにけり

稲田中長けたる草の稗もどき

蕎麦の花はや戻りてよそよそし

嘘のごと日照雨の上る稲明り

鈍行の中まで稲田の照り返し

鴉群れ豊作の田を嘉しけり

無人駅電車待つ間の草ひばり

前ドアーのみ開く電車秋野ゆく

古ぼけし駅の木柵あきつ止め

かたまつて母系家族の藁ぼっち

土偶めく棒稲架庄内平野晴れ

駅前の自転車サドルに赤とんぼ

羽前ゆく芭蕉ならねどすすき道

古口

最上川舟下り

朝霧や四十八瀧下り船 子規

子規はまた芭蕉を追ひて水の秋

赤のまま子規も辿りしこの舟路

見当をつけてゆく径赤のまま

埃くさきあきつに蹤きて渡しまで

犬蓼の風に溺るる舟着場

舟着場一服つけて昼の虫

コスモスの揺るる最上の舟番所

舟着場足許染むる鳳仙花

芒越し見え来し幡の舟着場
朝靄の団々秋の最上峡
最上川のぼる川鶴の三羽連れ
最上川野分の濁りうち延べて
最上川野分に揺られ木っ端舟
波荒く木片を揉む暴れ川
最上川川面のいろの秋あかね
早朝の藻屑蟹漁最上川
八目鰻（やつめ）捕る川の向かうの頑固爺
朝靄を鶴鶴抜けて最上川
朝靄の幾つ生まるる竹瓮漁
朝靄の止どまり流れ鰻漁
秋霖の川面ゆるゆる最上川
最上川雨一ト払ひ朝の虫
草ひばり朝方の雨一ト払ひ
鶴鶴も朝の勢ひを最上川
最上川青鷺の佇つ向う岸
纜は岩に括られ蟹捕舟
秋草の中に転がる破れ竹瓮
日に晒され雨に叩かれ破れ竹瓮
最上川磧に朽ちし破れ竹瓮
草刈って最上川べりさっぱりす
刈草を抱へて投ず最上川
藻屑蟹屯すあたり笹舟寄す
蜻蛉の上ゆく蜻蛉最上峡
舟下り芒の天を頂きて
対岸の廃村葛に覆はれて
最上川あきつの止まる破れ竹瓮
蟹漁の雨脚白し最上川
蟹捕りのドをうち沈め最上川
雨叩く最上川べり破れ竹瓮
秋風にだば発ちますと舟下り
最上川中洲にゆらと芒長け
露どきの魚の眠りに棹さして
牛膝こんなところに舟下り
舟縷々と下れり露の最上川
船頭の羽前訛も峡の秋
船頭の地下足袋さやか舟下り
もくもくと藻屑蟹漁濁り川

胡桃食う熊の話も舟道中
最上川秋風中洲の萱を吹く
集落の終の一人（いちにん）草を刈る
秋あかね峡の冥さを纏ひ飛ぶ
最上峡秋天を抜く土湯杉
最上川下り舳（みよし）に分く秋気
青鷺は置物のごと舟下り
一ト吹き秋風の幅最上川
最上川舟唄水の秋寂びて
秋興の舟唄下る最上川
最上川秋興の渦巻きては解く
初嵐片頬を打つ舟下り
コスモスの風にのんのん舟着場
鶴は下り白瀬は上り最上川
白瀬起つそこに秋見ゆ最上川
最上川舳（みよし）へどんと秋の風
渦巻いて秋興深む最上川
磐いろ野分のあとの濁り川
草薙温泉
旅先のもくず蟹めく目覚めとも
湯を浴びて羽前最上の夜長かな
宿裏に竹瓮捨てあるむかご徑
うつらうつら川床の鳴る夜長宿
最上仲秋夜は遡る川の音
秋雷の一つ転がる山向う
山を抜く大稲びかり最上川
最上川川面を奔る稲びかり
稲妻のバリと水増す最上川
稲妻に夜来の雨の最上川
鶴鶴の連れ飛ぶ朝の最上川
やや寒の朝靄低き最上川
最上川瀬鳴り露けき枕上ミ
川は秋峡に朝もや呼び込んで
するすると朝の一舟蟹捕りに
秋霖をついて朝より八目鰻（やつめ）漁
露けしや朝一番の下り舟
木っ端めく朝の一舟鶴鶴過ぐ
袈裟懸けに蜘蛛の糸張る最上川

杉鉾の一天高し最上川
昼の虫電車はなんぼ待てば来る
駅員が朝刊を繰る蓼の窓

新庄

秋津いろ煉瓦造りの車庫の壁

粽結ひ

秋乾き家苞とせるミゲの束
干しおとぎり草の一束家包に

本合海 渡し

渡船場の大岩かげにちちろ鳴く

本合海の渡しに群るる秋あかね

石榴たわわ本合海の渡し跡

まゆみの実透けて翁の発つ渡し

花芒最上川べり埋めつくす

かやつり草翁も泊てし川港

最上川いつも揺れあるすすきの天

焦燥にかられぬあきつの群るゝを見て

最上川芒ぐるりと彎曲し

彎曲し秋光満つる最上川

ゑのころの影も吹かるる舟着場

芒より芒へ流れる真昼かげ

日は燦と川原すすきの真昼かげ

本合海の渡しに向う稲の海

最上川渡しに吹ける秋の風

渦ゆるく生れて秋暑の最上川

秋の風最上川面を吹き広げ

秋燕濁りやまざる最上川

翁寄る渡しに秋の峰雲見る

花すすき雲より淡く雲のいろ

花すすき雲を飛ばして最上川

をとついの風の爪痕風倒田

秋蛇に遭ひて女の気色ばむ

最上川此岸彼岸の曼珠沙華

数珠玉の葉叢潜りて水鳴れり

木隠りに森の小人のまんじゅさげ

最上川流れ片寄る芒の瀬

昼の虫すだく渡しの大巖かげ

花すすきと白瀬照り合ふ最上川
鯉を捕る秋の日中の最上川

秋の日にぬくむ渡しのごろた石

舟着場までの道のりあきつ群れ

秋の蛇滑り込むなり川原草

最上川波吹き窪め初嵐

秋風に吹かれて翳る川面

稲抱いて天日まみれのいなごの貌

散策の最上川べり秋の鳶

蜻蛉を錐もみ最上川の風

花すすき奔れば最上川奔る

花すすき河の流れのやうにかな

秋風のぶつかる本合海渡し

川波の頭もたげて秋の声

濁り河渡る秋津のつと紛れ

女郎蜘蛛揺さぶり最上川の風

最上川たつぷりと見て稲田風

芦雀いっせいに発つ川港

子規忌

糸瓜忌の腹立ち紛れに吐きし言

糸瓜忌の癩癩玉が破裂せり

癩祭忌虫の居所悪き日ぞ

秋晴れの日の子規庵のガラガラ戸

俳句革新叫びし居士の庭へ鴉

持病ありて

子規忌なるわが心音も高く搏つ

糸瓜忌の傘立に傘十四五本

子規庵へ

風冷えて蕎麦うまさ日の上根岸

青ふくべに覗かれ居士の六畳間

文字露けく子規の見聞カタカナ書き

日和よく木斛の実の唐金いろ

子規庵のつましき間取り昼の虫

子規庵の屋根這ふへちま蔓八方

秋の蚊を発たせ巡るや居士の庭

ひやひやと白き面テの居士塑像

ひやひやと居士の遺品の黒メガネ

これも遺品愚庵の露の狗置物

子規庵の素通しガラス戸冷まじや

子規庵の暮秋の曇明りかな

ぽつねんと居士の座机昼の虫

この間取り子規ならずとも糸瓜棚

子規庵の戸袋の反り鶏頭花

棚ノ下糸瓜ノ一句書キトメテ

子規庵の糸瓜一葉黄葉して

子規庵の糸瓜と糸瓜の間合かな

ひやつく日笠森おせんに遭はず往く

これやこの子規庵の柿雨湿り

子規そこにみるごと露の六畳間

露けしや子規の自筆のカタカナ書き

自筆露けく子規病相と記す写真

子規庵の電燈の紐露けしや

子規遺品着物の端切れと蒲団切れ

鼠骨贈

地球儀は露の大玉子規臥す間

子規居士の体温計とやいと露けし

遺品露けく体温計も寝そべりて

居士臥せし居間より露けきものはなし

子規庵の糸瓜こづきて立去れり

子規庵出て風のひやつく上根岸

子規庵の糸瓜に柿に小糠雨

癩祭書屋主人臥せぬし居間うそ寒

糸瓜忌の天気どんどん悪くなる

悪くなるいっぽう子規忌の空模様

糸瓜忌の鶯谷で落ち合ひぬ

傘いっぽん携え子規忌の上根岸

子規庵へ子規忌の友と連れ立ちて

子規庵のふくべ仰げるへちま面

谷中の墓地

からかねの消防ポンプ慶喜墓

慶喜公墓所の立木に小鳥くる

桐の実に青空覗く谷中墓地

日が射すと思へば戻るゑのこ草

椎の実のここたく谷中の無縁墓所

女らと墓の椎の実拾ひもす

寛永寺

秋風が当りて上野戦争碑

ぎんなんのおお泉上野戦争碑

堂囲む高梢に鴉寛永寺

風の日のぎんなん拾ひ始まりぬ

上野山

からりと晴れ梧桐の実の鳴るごとし

梧桐の実を透く日差し芸大見ゆ

不忍池

蓮の実の巢窟勁く日が射せり

蓮の葉をめくりにかかる風のさき

蓮の葉の一つ激しく吹かれぬる

定年や黄ばむ蓮葉と鉄気水

定年や遠目の蓮の吹かれざま

蓮葉の吹かれ裏見す定年や

相搏てる蓮の遊びごころかな
煽られて蓮の棒茎ごつつんこ
秋日和蓮の葉脈日に透けて
風上ミに顔向けてああ蓮の香
大きな木の葉石燈籠を打ちて落つ
焼鳥の香を搔き立てに秋の風
くさぐさに子規忌も三日経し小雨

草津行

湯を浴びに黄葉始まる草津かな

吾妻峡

吾妻晴れチヨイナチヨイナと稲を干す
こんにやくの葉の黄ばみ初む吾妻晴れ
律かげ廃屋木造小学校

西ノ河原

湯滝鳴る雑木もみぢの色深め
霧籠めの朝は一際湯川の香
いち迅く草黄葉して湯川の辺
硫黄の香虎杖黄葉したりけり
濃く淡く湯川河原の花すすき
石像のベルツの額に露の玉

小鳥来る髯のベルツのその頭上
胸を張るスクリバ石像黄葉冷え
秋天下ベルツの髯の一文字
黄葉どき噴ける湯の嵩湯気の嵩

湯の川の硫気濃ければ霧深く
霧籠めにおどろおどろし湯釜の名
しびれてはうめく草津の夜長の湯
やや寒の朝湯文人気分かな
巽の湯出て息継ぎぬ夜霧の中
ななかまど一際硫気濃き晨（あした）

露天湯に靈芝（れいし）のごとき老いの尻
川床に湯花川原にすすき咲く
湯花咲く湯川のうへの空澄めり

湯の川の川床雑木黄葉いろ
榎黄葉潜り硫気をふふむ川
腰掛けて西ノ河原の石ぬくし

ななかまど湯川岐れてまた岐れ
黄葉冷えつゝのる湯川に手を浸し
夕風に一弁欠けし反魂草
川床の湯の花に射す秋日差し
霧籠めの草津茶店に靈芝売る
露天湯の余り湯黄葉の下潜り
露天湯の囀ひの外の花すすき
露天湯の堀越しに見ゆ花すすき
青どんぐり湯川高鳴り流れけり
ビジターセンター
備え付野鳥図鑑を繰るやや寒
秋あかねちよんと湯神の石祠
草津の湯浴びればヒリと黄葉どき

湯畑

湯畑の秋のとてつもなき湯量
霧籠めの湯畑を過ぐ登校児
足湯して旅人同士冷えを云ふ
上気して湯畑巡る宿浴衣
霧に濡れ婆ちゃん湯の花ひさぎをり
札状の束見せ湯の花売り朝寒
明治十一年 ベルツ 昭和十年 ベルツ花
草津訪問
碑（いしづみ）にその名露けきベルツ花

起き抜けの朝寒の顔締む硫気
湯畑の湯気こちよし湯ざめ顔
足湯して湯畑眺む宿浴衣
湯畑の硫気霧籠め鼻曲る
湯畑に洩れをり宿の夜長の灯
やや寒の湯揉み赤帯赤湯文字
足湯して顔のすうすうする朝寒
湯畑より湯の香蹤さくる霧月夜
連れ立ちて湯畑巡る夜長人
夜長宿ぎうと袴めく草津町
湯畑の湯花搔くおと爽やかに
うそ寒の足湯大方女どち

草津町 共同湯巡り

風の湯出る妻に露けき声かけて

霧の日の朝湯うめてもうめてもや
霧冷えの肩へ掛湯をふんだんに
箒・塵取露けく下がり共同湯
ぜいたくや長夜の掛湯ふんだんに
朝湯より戻る足取り湯中り呆け
土地人に夜寒湯うめて叱らるる
痺れくるこれも湯の味夜寒の身
草津夜寒くそ熱き湯に身を沈め
やや寒の朝湯にぬくむ果報者
朝寒の手足痺るるまで長湯
朝寒の一人で使ふ共同湯
くそ熱き掛湯に痺る肩夜寒
節黒の杉板囲ひ夜長の湯
霧冷えの肩うち沈め地蔵の湯
もうもうと湯気立て蒸籠の朝ばたらき
霧雨に温泉饅頭蒸かす湯気
巽の湯夜寒の肩に掛け湯して
霧に湯気逃がす高窓共同湯
霧冷えの五体煮川乃湯に痺れ
共同湯巡り夜寒の下駄鳴らし
長き夜の熱きが薬地蔵の湯
地蔵湯の秋の灯洩るゝ女下駄
夕霧にチヨイナチヨイナの時報かな
地蔵湯の道順聞いて夜長人
坂一つ上がりて露の地蔵の湯
饅頭の蒸籠湯気噴く霧の町
夜寒さの煮川乃湯にすっぽり入る
朝寒の地蔵湯に湯を使ふ音
コスモスの束ごと揺れて草津町
湯疲れは先づ足にくる霧の径
草津夜寒こんな湯加減殺生な
草津朝寒我慢比べの湯となりぬ
浴衣着て妻も飛び入り湯揉みシヨウ
鼻唄爽やかお医者様でも草津の湯でも
肌冷えれば入りて草津の湯三昧
秋扇使ひてさます草津の湯
六合村の初物めうが家苞に
文次郎さん
古る友は霧の草津の時計屋で

露むすぶ宿の屋根屋根草津町
草津うそ寒とんだ熱さの掛湯浴ぶ
やせ我慢して入る夜寒のぐらぐら湯
湯花咲く夜長の宿の湯引き樋
霧の夜のあまりに熱き地蔵の湯
霧越しに磨りガラスめく草津町
草津町霧に宿の灯点り初む
まんじゅうの湯気の淡さに町霧らふ
朝市の巾広いんげん家苞に
影絵めく草津は霧と坂の町
長き夜の足湯の効能話かな

光泉寺

櫛落葉軽く肩打つ化石の句碑
湯けむりにふすぼりもせぬ月の貌
霧籠めに一茶の句碑のふすぼり貌
文字面の「草津道の記」露けしや
一茶句碑風にばらけし芒の穂
句碑二つ肩を並べて霧に入る

殺生河原

秋寂びて殺生河原の石を積む
殺生河原雨脚白しノリウツギ
黄葉して砂礫のなかの樺いっぽん
傾いて霧に卷かるる樺いっぽん
ゴンドラゆく谿は霧籠め硫気籠め
霧に呼びかく殺生河原の拡声器
殺生河原風に穂を解く瘦せ芒
水草紅葉木道いっぽん貫けり
霧零殺生河原の火山弾
熔岩原の樺を離るる朝の霧
樺黄葉始まる眼下草津町
霧に擦るマツチのボウと硫黄の香
霧呼んで賽の河原のごろた石
熊笹の上をさ走る朝の霧
一本の樺立つ他は一切霧

白根山

霧籠めに「狐に注意」の道路標

火口への道攀づアキノキリンソウ
火口への足取り軽く花すすき
霧に点り岩間の残んのまつよい草
瞬く間山霧霽れて濃りんどう
立枯れの一木霧の山巔に
火口湖の色吹き替はる秋の風
乳白の湯釜呑み込む山の霧
霧籠めに人影のごと枯れ立木
火山礫火口へ零れ秋の声
鉄イオンふむ湯釜の空澄めり
秋風の吹き渡るなり酸性湖
山巔の霧の中よりこどもごゑ
硫黄臭き山巔の蠅腕に来る
束の間の霧の晴れ間の濃りんどう
本白根山より硫気ふむ山霧（ガス）
白塊の山霧が押し寄す山母子
黒豆の木の実濡らして霧這ひ来
撥ね上がるバツタや火山弾の上
霧霽れて意外に勁し白根の陽
火山弾ごろつく斜面ななかまど
岩っ原山霧に吞まるる山母子
火口湖の霧は頑固に困を解かず
もやもやの霧の白根を下りて来ぬ
霧探りフォッグランプの二つの眼
樺の幹朝霧に溶け込まんとす
象のごと霧の一塊樺に寄す
湯釜・水釜・酒釜なべて霧籠めに
湯釜・水釜・酒釜の空澄みにけり
ななかまど白根山頂一带に
ななかまど白根の空を深うせり
山はもうはだら黄葉の岳樺
岩っ原霧の白さの山母子
火口壁霧に色増すななかまど
火山弾上にぬくもる秋の蠅
山霧に足をとられてずっこけぬ
りんどうの真上りんどう色のそら
りんどうの蒼のいろと花のいろ
最悪の山霧（ガス）に見まわれ瑠璃湯釜
旅先の甘栗を割る霧の中

ななかまど次々山霧に吞まれけり
霧を裂き湯釜へ射せる真昼の陽
白根嶽暫し青空閉ざす山霧
山霧濡れの岩を背にして監視員
山巔の霧霽れてきて湯釜見す
監視員詰所の前の濃りんどう
湧く山霧の韋駄天走り濃りんどう
残念よ無念よ湯釜は霧の中
恨めしや湯釜は霧に覆はれて
つき出しに草津の苞の茹で零余子
まんじゅさげ平ノ将門兵挙ぐ地

最上川拾遺

ゆく水に稲舟を見ず最上川
秋雷に全幅を見ず最上川
橡の実を後生大事に一つ持つ
秋風を懐へ入れ損ねけり
大石田の岸に臨みて雲の峯
濁り水どんと舟つく最上川

子規庵拾遺

子規居士の座机にさすへちま翳
子規庵の見取り図なぞる秋深し

草津行拾遺

ベルツ博士の端正な髯一位の実
零余子も売る草津のスーパーマーケット
六合村の零余子ずっしり袋売り

ひところの勢ひは何処泡立草

泡立草空き地におしくらまんじゅうす
牡丹の芽安住敦の気骨かな
秋風に安住敦の渋い顔

安住敦と云へば擦れ鳴る芙蓉の実
妻が布団干す気になれり賜日和
留守中の一事持ち出す零余子飯
ちまちまとよく抓みしよぶだう殻

ご本家の猫なで声や秋の昼

芙蓉咲くこともふとしたことのうち
秋の昼眼を振り回す眼医者かな
三回に分けて味はふ苞零余子

晩年のはや箸捌き菊脛

晩年の序の口にして新走り
さふらんや一ト日は些事の積み重ね
さふらんの紫がかる硝子壺
さふらんの想ひを描くやうに咲く

蓮葉のゆつくり揺るる疾く揺るる
蓮葉の大きな葉には大きい風

眼鏡の度進むとおもふ芙蓉の実

戸を開けて秋の爽気を取り込み
ブラウンシチュウ灯と火恋しき頃となり
それとなく秋は来にけりポタアジュに
コスモスの空へ風船離せし子
あきらめがつきコスモスの吹かれざま
初物の茹で栗なれば割り餘さず
栗虫ある栗に当たりて歎くこと
運動会近しよブラス風に乗
箒置き茗荷探しのおん母上
妻

抱へくる相撲土産は重るもの
いとこどりして立つ句評ふかし諸
半茹での硬さは熊でも喰う栗か
栗硬きは茹で足らざるや出来悪しや
茹で栗の当たりはずれを妻に云ふ
またも来て猫の寝そべる干し布団

蠋螂の一劍客と出会ひたる
蠋螂の背筋伸ばせる姿勢かな
蠋螂の構えはト伝無手勝流
蠋螂の一棒切れと渡り合ふ
蠋螂のけふは網戸に来てゐしか
蠋螂と戦争一つ日の下に

蠋螂も戦(いくさ)もキツと身構へて
蠋螂の面子立たぬといふ貌す
蠋螂構ふごとくに始まる戦争も
先づ出方窺ひ戦(いくさ)も蠋螂も

秋風も戦(いくさ)もひよいと起こるもの
戦争は斯くして起こる秋の風
秋の風ひよんな弾みで戦争に
秋風や金も出さなきや口も又
秋風の一吹きよりも淡き日々

秋の蝶白もよきもの穂を離れ
秋の日の移ろふごとく無為の日々

秋風や懐深く句を蔵す
色脱(ぬ)けて平々凡々鶏頭花
かまつかを引っこ抜くにはまだ早き

ゑのころのうぶが吹かれて転びづめ
ゑのころはうぶで真青で澄みきるそら

殖え過ぎし金魚貰ふに金盃
餌付きの金魚貰へり義弟より
水も入れ替へて金魚の新居の秋
貰ひ来し金魚のその後鉢覗く

鴨がやがや世間話を沼の上
鴨がやがや云うて蓮葉を枯らすなり
女三人鴨を尻目に長話
蓮より鴨へ目移りして困る
少年時代と云へばざりがに捕の島田
肝油球秋は脂の補充どき
寝すごして根深汁の香ただよふ中

降り出して木犀我に返りけり
木犀の香の濃く淡く風の筋
木犀の心遣いの香なりけり
木犀のちようどここらが風下にて
木犀のにはへる家路人心地
おのが香に木犀我を忘れたり
酔い痴れること金木犀に如かず
気配りのゆきわたるやう金木犀
木犀の香り秘めある八百荳
木犀の花に気づける裏通り
木犀の家木犀の家隣
跳ね上げて雨の木犀にほふ径
雨籠めの木犀ここらからにほふ
木犀のかほり始めの後知らず
いつ見てもこの家の郁子は実らぬ郁子
くわりんの実蟻の門渡りなかりけり

バツタ跳んで横浜未来都市のうへ
待宵草間遠に横浜未来都市
南仏料理卓に一輪挿しガーベラ
和服の胸張りていそいそ菊日和
箱根越え胸毛の馬子凶広重忌
犢鼻褌の渡し人足広重忌
留女の藤沢宿凶広重忌
かまつかの駈けだしさうに若冲忌

巻貝の置物しんと若冲忌
苦うるか好む晩年始まれり
それなりの常着に後の更衣
世を離る顔に木犀かほり立て
あり余るもの木犀の香と時間
柿冷ゆるそんな季節となつてをり
ほたほたの柿に手を焼く啜っちゃえ
柿ほったほたなれば包丁役立たず
どうしてもそこへ眼のゆく芙蓉の実
颱風のいい加減さに振り回され
女郎蜘蛛糸張る計算通りかな
晩年の既に始まる揚げ零余子
遅蒔きの枝豆を以てずんだ餅

待宵の空を垣間見家に入る
ありあわせの物もお月見支度かな
遺されし川の薄を採りにゆく
お月見の支度すすきの雨払ひ
月祀る定座は大玻璃戸のほとり
点る灯の月の明るさ雨名月
雨名月に替はりて点れる灯
軽雷の飛び入りもあり雨名月
雨止めば確かめに出て今日の月
うしみつの雲を払ひて今日の月
雨にほふ雨名月の夜半の庭
雨名月寝しなに覗くそらの方
ほととぎす山を台座のまがい佛
かんばせの石の風合秋の風
秋寂びの神韻震ふ那智滝凶

夫婦のみ住める家とや秋明菊
午のニュース秋明菊にながれをり
金木犀零れて塀のこちら側
木瓜の実のその面つきの皆曲者
赤い羽根つけてニュースを矢継ぎ早
玄関へ石段六つ金木犀
臍毛濃き運動会のお父さん
綱引きに力出しきるお母さん
搔き落とす泛子玉につく烏貝
一茶忌の福神漬を噛み鳴らし
まるめろの義理堅く実を四つ付け
木犀のかほり衣に憑き髪に憑き
地に展く金木犀の一星座
女郎蜘蛛おつとり刀で駈け寄り来
女郎蜘蛛装（なり）スマートにしてキュー
ト
いつも賑やか菊咲き犬の吠ゆる家
突っ切れる木犀の香に隙ありぬ
虫食いくわりんたうたう落ちてしまひけり
初鵲と妻云ひ立てぬ厨方
物腰のしづかな木なり金木犀
朝夕な家人を律す金木犀
箸休め妻と聞き止む鵲凜々し
引続き晴れて十六夜十七夜
十六夜の妻の誘ふ庭の月
十六夜の畏き楠の月夜ぶり
雨月なるきのふに替はる月夜ぶり
十六夜の襟搔き合はす月のもと
焼酎づけくわりん多くて散財す
一円玉じゃけんにされて財布寒む
空青く晴れて無冠の鶏頭に
初鵲のひびき両耳喜ばす
老人の証左の木の葉髪つまむ
蠶螂の暢気な父さん歩きかな
蠶螂の反骨試す棒の先
初鵲の気骨朝の気貫きて
日向好き枯蠶螂の妙好人
心臓の唧筒高鳴る朝小寒

この枯れざま川原すすきの吹つきり方
このうへなし川原すすきの吹つきり方
枯るゝこと愉しむ川原すすきかな
鼻のよそ見大事といふ貌す
定年の鼻の朝寒卵とじ
牛膝つくこと厭はず廻り道
一病に五つの葉色鳥来
寝呆けまなここすり起きれば鵲一途
初鵲に耳の通りがよくなれり
木犀の落下脱色して木屑
玉子焼ひっくり返す鵲のこゑ
じゃがいものごととき物言ひ道教はる
懐旧
事務机深く坐りて雁来月
なまる身を歩いて正す雁来月
木犀の葉のごとくにほふ晨
初鵲やそれとなく待つ一転機
木瓜の実の道楽息子よく肥えて
腰掛に腰遊ばせて鵲日和
定年の起伏し鵲に気圧されて
よう来たと鵲を讃えて日々老化
一日一日空澄むごとく頭澄む
木犀の家から家へ郵便夫
コスモスの花にはとつても適わない
零余子散る東海道は丸子の宿
火の見の下槍鶏頭の小火ありぬ
悪食の何でもはいる鵲の腹
その効きめ百も承知の案山子翁
葉書出す住所はゴム印ペタリと秋
報復テロ何時首擡ぐ草の絮
かまつかの赫つとイスラム原理主義
報復テロ警戒せよと悪声鵲
かまつかや報道一ト日テロ一色
アナウンサーテロ告げ止まぬ朝の鵲
臨時ニュース告げある胸に赤い羽根
墜落にテロ説浮上うすら寒
テロ難ず鵲の高声聞きあたり
テロ続報二転三転鵲日和

周到なテロと石榴の石頭

影法師ひやびや落しテロの巨軀

鱒刺の一撃をもてテロありぬ

爆弾テロ石榴ごろりと机に置かれ

口ごもる石榴と腹蔵無き石榴

降って沸くものに荒鴟・自爆テロ

弔旗垂れ雁来月はな紐育

鴟曰くあなた任せのテロならず

天高く法螺貝吹けりテロ退治

火の恋しさとて戦の火は焚かず

火の恋しとて戦争の腰上ぐる

秋空へテロを一網打尽のあみ

そぞろ寒テロ討取りの腹決めて

鷺の嘘鴉（あ）の嘘どっちもどっちかな

頭では判ってゐるがテロと呆け

アフガンのテロの嘘聞くそぞろ寒

秋風にどんだんすすむテロと呆け

テロと石榴お天道さまはにこにこと

サランラップに何でも彼でも包み夏

池上本門寺 お会式

万灯を設えけふの蒲田駅

日蓮忌昼から混める池上線

菊に差す夕日お会式日和かな

本門寺

両の掌を湯呑みにぬくめ御命講

万灯を押し立てのぼる百余段

お会式の赫つと灯の入る妙見堂

風吹けば熾るがごとくお万灯

風吹けば風のいろ帯ぶお万灯

万灯の濃き花淡き花交え

万灯のころもち濃く風の出て

池上のお山をのぼるお万灯

万灯の傘浮き上がり浮き上がり

万灯の花傘揺れては揺れかへす

万灯の花傘来る来る波打って

お手綱のこよなき真白御命講

お手綱の白に始まる御命講

本殿の提灯真白御命講

お上人寂すお山へお万灯

本門寺団扇太鼓に湧きかへる

本門寺坂下に詰むお万灯

お会式の道筋財布の拾ひ物

この山の鴉疇へ御命講

お会式の屋台店たちかるめ焼き

塔頭の万灯支度堂宇にて

この山の鴉がさはぐ御命講

鳥さわぐこの山暮れて御命講

日暮待つ万灯据えて妙見堂

星空に御会式提灯高掲げ

墓域

死してなほ墓に大小猛り賜

どんぐりを拾ひて置ける露伴墓

人騒の墓域に及ぶ御命講

日蓮忌墓と背合はせ屋台店

夕鴉のころ滾らせて本門寺

松本幸四郎

槇の実のやたら打つ墓高麗屋

雷蔵の墓を袈裟切り鴉のころ

小鳥来て中村八大ねむる墓

墓のうへ鴉が唄ふぞ田谷力三

墓所に降る木の葉を聴いて露伴・文(あや)

幸田文八十六の露の墓

露の大石蝸牛庵大人の墓

猛り賜五重塔を聳えしめ

五重塔背らに露の露伴墓

木を離る木の葉くらりと露伴墓

櫻もみぢ一片文(あや)の閑伽水に

櫻もみぢ始まるどころ指させる

町中

万灯を泳がせゆくや風の中

さきがけの万灯一つ橋渡り

万灯の川風受けて橋の央

万灯くる提灯二つ幡三竿

万灯引く衆の白足袋白法被

ご住職万灯に添ひ歩きけり

団扇太鼓紺の腹掛けして搏てる

団扇太鼓ドンドコ打てばコリヤコリヤと

万灯の提灯持ちはご住職

万灯引く法被に山号寺号かな

辻曲がるときの万灯波とゆれ

池上の万灯の湧く星のそら

万灯は月の明さに浮かれ貌

婆の打つ団扇太鼓の腰捌き

先導の提灯ゆらり万灯来

万灯の花懐といふところ

御命講芙蓉に洩れて医院の灯

万灯と万灯の間詰まり来ぬ

浮かれ足団扇太鼓を打ちに打つ

風の中万灯そろりそろり来る

万灯に子を高々とてんぐるま

家包の葛餅膝に池上線

うち過ぎぬ団扇太鼓の二波三波

夜風出づ万灯いろの綿飴に

大巧寺

二階にて謡ひの稽古石落日和

謡曲の稽古始まる実石榴に

朗々と謡ひの通る秋明菊

陶器めく郁子に紫一寸入る

杜鵑草手にし座興に啼いてみせ

蟻螂の罷り出でたる石畳

本覚寺

お会式の触れ書き寺の板塀に

梅檀の実のまだ青き寺に寄る

妙本寺

山門下自然薯掘りの自転車か

妙本寺とんびのこゑも秋寂びぬ

山茶花の白片砕け鴉の昼

猛り鴉古刹の空をうち抜きて

谷戸のそら櫂もみぢの幽かな揺れ

秋寂びの櫛に瘤あり達磨大

常栄寺

萩優るぼたもち寺の植込は

芙蓉の実知恵を蒐むるごとくなり

くわりんの実一つ置きある石の門

オブジェめく木瓜の実数え五つほど

ぼたもち寺寺門の萩に乱れなし

鳥ごゑの横一文字杜鵑草

安養院

海よりの風青芭蕉破るべく

蜘蛛の囀の端を宝篋印塔に

庭石に二つ茗荷の忘れ物

妙法寺

閉園にまだ間がありぬ三時草

庭園をゆつくりと見て白式部

穂すすきに十夜の夕日長々と

語りかくこゑあたたかくお茶の花

水引の生ふ赤門に赤仁王

秋寂びて神韻帯ぶる杉の幹

水引草黙りこくって苑巡る

秋の蚊に追はるるごとく苑を出づ

お茶の花目札をしてすれ違ふ

日の暮の鴉啼くのみや松葉ヶ谷

松に夕日釣瓶落としの松葉ヶ谷

猫じゃらし妙法寺道暮れ初めて

安国論寺

安国論寺海棠枯れて隙だらけ

女郎蜘蛛安国論寺の中空に

安国論寺遠くで柿のベタと落つ

安国論寺白きつつじの狂ひ花

安国論寺背らに鴉の谷戸を負ふ

暮ぎはの安国論寺鴉しきり

白山茶花砕け墜ちよと鴉の啼く

いちぢくの匂ひ群がる葉叢より

光明寺 十夜

鎌倉の波おとなしき十夜かな

十夜寺海の方より夕日さす

十夜寺そこと聞きゆく日暮道

海の方明るく暮れて十夜寺

柿たわわ十夜寺さす道の辺に

お十夜の寺の徑聞く柿の家

十夜寺はるかに犬の散歩道

お十夜のゆで栗のまだ干ぬところ

お十夜の笹あをあと灯にひさぐ

菊の鉢掲げ思案の十夜僧

耳たぶのごと二提灯十夜寺

お十夜の灯も売るとし屋台店

お十夜の植木屋大方菊ひさぐ

十夜寺雑貨売る灯の立て込んで

露地売りの笹の目くきやか十夜寺

お十夜の境内搗きたて餅ひさぐ

お十夜のおでんの湯気が参道に

天界へ我をいざなふ十夜鉦

唱ふ坐は雲上にあり阿弥陀経
雲上に経誦す思ひ十夜寺
気が付けばここは濁世の十夜堂
太柱背にして坐る十夜講
十夜法要堂を破らんばかりの鉦
堂抜いて心耳を洗ふ十夜鉦
百畳に善男善女十夜講
十夜講凡夫に交り尼ごぜも
十夜寺お堂に通る海の風
十夜僧向き向き唱ふお念仏
口揃え凡夫十夜の阿弥陀経
十夜僧袈裟の匂はんばかりなり
十夜講肅と引声阿弥陀経
十夜講頭ぐらぐら一凡夫
婆の足くずして聴ける十夜講
お十夜の引声念仏通る堂
燈火親し引声念仏はおもむろに
十夜鉦打つは老僧柱陰げ
十夜法要囃す鉦方念仏（ねぶつ）方
堂上に車椅子上げ十夜講
渡殿を四方に巡らし十夜寺
なむあみだで終るご法話十夜講
婆の眼をこすりこすりつ十夜講
投げ入れに斑入りのすすき十夜寺
十夜講畳を擦りて坐につける
御上人退堂十夜法要果つ
「お帰りはお怪我なきよう」十夜僧
雛僧より十夜の栞頂きぬ
蓮池に灯の洩れてをり十夜寺
くらがりに鯉の躍れる十夜寺
鶺鴒の木のとくて立派十夜寺
月の出の方を指さし十夜僧
お十夜の雀も峙さす頃ぞ
くらがりに人の溢るる十夜寺
潮の香す十夜参りの戻りみち
敗荷の掌をくしゃくしゃにせるごとし
バスが来て十夜帰りのひと拾ふ
お十夜の小坪の海はおだやかに

茅花野を駆くるテリアはぬいぐるみ
手つかずの芒が光る岬鼻
秋草やまだ空地ある駅なりけり
夜盗めく風木犀を襲ひけり
泡立草なほ錆び足らぬ引っ込線

くわりん五つばかり秋日の泰けさに
 締めまりなき一日鴟も聴かず暮れ
 けふ鴟を聞かず仕事もはかどらず
 昼からは鴟に追ひ立てられ執筆
 そぞろ寒さそへるものに秒針音
 定年は鰐の退屈地でゆく秋
 尾のごときものが一閃鴟なるや
 風受けて雨は錐揉み山毛櫨若葉
 鰐のごと日向ぼこして生欠伸
 天つ日に呆けゆくばかり芙蓉の実
 片づけてはならぬ机の物に秋日
 屑籠は大き程よし露の家
 洗濯物干され大犬蓼の脇
 草叢に南蛮煙管の忘れ物
 首傾げてしまふ草の名杜鵑草
 この家に何人おはす郁子の棚
 郁子は実にこの家の主見たことなし
 一本の川遺されて薄叢
 身だしなみ紫苑は高く括られて
 菊好きの女主は菊の間
 この家には犬が居る筈菊日和
 こともなく心音搏てる紅葉晴れ
 何といふ雑木紅葉の化粧ひ方
 見納めの水草紅葉鼠捕
 石榴より硬き頭のテロリスト
 柿鈴生り遊び忘れし子の殖えて
 散歩道木犀はもう匂はざり
 秋の昼とある電話の受け答え
 色鳥を呼び寄せ江ノ島弁財天
 秋簾蟬か何かがぶつかりて
 近隣に鴟のこゑ殖え月半ば
 朝鴟のうはごゑ雨を告げるなり
 芙蓉の実頭揃へて枯るる景
 秋雨の響けるなかに頁繰る
 雨音の展がり始む敗荷田
 敗荷の辺にてながなが馬鹿話
 人臭きくわりんの匂ひ掌に移り

十六夜の月懐に身を置けり
 これ以上裂けやうもなき石榴描く
 黒船の現はるごとく初鴟来
 木瓜の実やこの家の主留守なりき
 庭先にまっさきに来て朝の鴟
 朝の鴟聞けば身過ぎの力湧く
 初鴟のこゑ近隣を巡りをり
 家裏に廻りて啼けり猛り鴟
 十六夜の木叢草叢翳深く
 枯れてもや姿優しき芙蓉の実
 朝鴟にキツとなまる身正されぬ
 雨来ると鴟触れ回る庭伝ひ
 初鴟のこゑ聞き止めぬ一丁目
 小半時鴟が遊んでゆきにけり
 七五三二人掛りで帯結ふも
 木瓜の実の一目瞭然垣根越し
 論すごと鴟は単刀直入に
 葛湯溶きつつ「俳句にもある處世術」
 鷹化して鳩となるとは莫迦げたる
 朝刊や刻経ず別の鴟が来て
 新橋の飲み屋の裏の照紅葉
 新橋の裏路地稻荷黄葉敷く
 秋麗らぬいぐるみ置く心臓外科
 いちじくは子供に還り食うぶもの
 無花果は今も洩垂れ小僧の味
 少年は手当たり次第無花果もぐ
 泥拭ひやる万年青の実久しぶり
 庭土の薄光りせり石露の花
 庭土の瘦せて光れり石露の花
 鴟切なし雨止む気配さらさら無く
 さざんかの早や花散らす粗忽者
 さざんかの花散らす雨あはただし
 台風の数二十と三が来る
 朝の鴟寝惚けまなこを揺さぶり来
 嘗て見ぬ程の女郎蜘蛛に遭ふ
 濡るる身を固く引締め雨の鴟
 垣越しに見る木瓜の実のありかかな
 秋咲きの薔薇の傍ら雲がゆく
 芙蓉の実一つ一つの想ひごと

朝鴉の有無を言はせぬ一ト声ぞ
小佛めく光湛えて石露咲けり
易々と過ぐ日物足りなき夕鴉
暈に手つき立ち上がる十夜婆
徒食の身ぶらぶら石榴にも似たり
見る者をつつみ込むいろ芙蓉咲く
ずぶ濡れの鴉高槻の枝を去らず
高鴉や信ずるものを一筋に
後ろ向き初鴉雨にいちめられ
初鴉に朝の一刻盗まれぬ
あさあさの鴉に親しみ机拭く
初鴉のきのふよりけふ身近なる
出し忘れの葉書投函鴉の道
テレビ切るその後長夜のあるばかり
朝刊の一面を読む鴉日和
箸を取るその手を止めて鴉を聞く
虫の夜といふには虫を知らず来し
虫の音を聴いて寝落つ日けふも又
鴉になら順ずるころ大いにあり
悼飯島晴子
秋風をこんな呼吸で詠めと逝く
先手とる気概を鴉に呼び醒まされ
都合よき虫を配して一句成る
都合よき虫の一つに鉦叩
初鴉とおもふ確信深むあさ
虫の監視き何かを掴まんと
今日のこと明日に持ち込むなと夕鴉
なほ聴けば本格的に地蟲鳴く

画業八十年 片岡球子展
片岡球子ドカンと冠雪富士を置く
ゲテモノにして錦秋の球子富士
酷評に球子怯まぬ冠雪富士
冠雪富士球子はいつも前向きに
面構尊氏の鼻冷まじや
北斎の構図の空を雁駆くる
三浦 晴子さんより自然薯を賜る
自然薯の届け物とて捧げくる

自然薯の偏屈を押し通す形（なり）
一家言あるべし山芋掘りとして
形状から推（お）してこの荷は自然生
自然薯のそれと知らるる長包み
自然薯に付きぬし土の赤みかな
自然薯の物言ふごとく零す土
自然薯の東海道を来し荷なり
自然薯とおもふ荷ほどき面白く
傷まずに自然薯届くダンボール
自然薯の荷を解くここをかうやって
念の入る自然薯の荷を解くとせん
自然薯のこれは美味さう赤土質
自然薯の包みを開ききりにけり
自然薯の包み開けば土の香す
自然薯の三本蔓もて結はれ届けらる
髯づらの自然薯蝦夷（えみし）の顔したり
得心の自然薯掘りの主顔
自然生（じねんじょう）背筋一本通りたる
根性の据はり方見ゆ自然生
自然生両手に載せて計らる
掘り主の手際思はる自然生
自然生そを掘り当てしときの笑み
苦虫を噛みつぶす顔自然薯にも
何で臍曲げてしもうた自然生
自然薯のかうなるまでの紆余曲折
自然薯の我ならではのねぢれやう
自然薯の怪異は美味の証にて
油断して掘り上げられし自然生
添え文に自然薯掘りし山のこと
添え文に主の掘りし自然薯と
福相の自然薯現るる包みより
自然薯の髯蓄ふは富貴の出
ひょうひょうと風のごと来て自然薯掘る
蔓を見る自然薯掘りに流儀あり
察するにけふは上首尾自然薯掘り
蟻穴を出づる地べたに踏みきり
日本に棲むがらんぼの種は七百余
毛嫌ひしてごきぶりを打ち止まぬ妻

虻は菜に吾は句に溺れ花菜畑
鼻を師とせるおもひなくもがな
鼻にはぐらかされて帰るのみ
凍みに凍む虚空蔵さんのどぜう髯

楢山の楢枯れ木（ボク）に還るころ
 温泉（ゆ）巡りの一人旅には濁酒
 友垣の一人よ旅の濁り酒
 湯どころに一人なぐさむ濁り酒
 ほうき茸ほうきの先を指に乗せ
 炭焼の木の混める山遺りしか
 木訥の木（ボク）の心をもて枯木
 僕キツネ私タヌキで店師走
 強霜を振りかぶる村朝日差す
 茸の名いちいち聞いて茸鍋
 炭焼の齋の落人村に泊つ
 霜解けの木雫さらまたぎ村
 枯木宿キツと秒針時刻む
 宿炬燵山の長夜を如何にせん
 紅葉谿野岩鉄道錆鉄橋
 霜降りぬ遠ちの空林空山に
 朝日さす霜の空林空山に
 舞茸は杉葉をかむり土産籠
 ひら茸を栗茸を指す箸の先
 箒茸抛り込んだるぐらぐら鍋
 山の出湯浴みてバリバリしげれ髪
 山宿の障子に夕日暫し映え
 鍋物はおらが在所の茸攻め
 山鳥の脂浮くなりきのこ汁
 茸には山鳥の合ふあつあつ鍋
 茸の名いちいち聞いて宿夕餉
 山宿の炬燵火熾り真っ赤っか
 一匹だに魚影の見えぬ枯木谿
 木の葉降るお品と嘉助の山墓に
 枯れ木（ボク）の山毛櫨のおいらん木杓
 子かな
 木の実どき木地師丸める当り棒
 栓の木の盆におかわり枯木宿
 山宿の炬燵に俄湯冷め身
 今日枯野に枕す野州湯西川
 山宿の炬燵の酔ひがまはりけり
 濁り酒とろつと炬燵火はかつと
 山宿の炬燵と夜を俱にせり

一人酔ふ夜の又よろし濁り酒
 魚潜む川あり山も枯れ深む
 このぬくさ足覚えをり初炬燵
 炬燵火をいつそう強くまたぎ村
 木の実どき落葉どき過ぎ落人村
 前山に初雪ありぬ眩しみぬ
 楢山は尾羽うち枯らす山となり
 天辺はもう枯れ初めぬ紅葉山
 紅葉山一つ隣の山枯れて
 朴落葉ざつと千枚日陰道
 何の木か白臘いろに黄葉せり
 涸れ川の岩又岩の橡落葉
 川風に落葉吹き飛ぶ露天風呂
 枯山の重畳落人村に入る
 山並みにまだ日の差せる夕紅葉
 山間の一軒宿の冬紅葉
 心臓を病みて十年紅葉狩り
 枯木抜け川原へ透る夕日差
 いのこずち何時より汝と道連れに
 箒茸舞茸平茸買ひ迷ふ
 枯山を渡り歩けば眼も枯れて
 杉叢の幽明昇る蔦紅葉
 日は傾きゑのころ草の幽明に
 天辺に楢の枯葉の一二枚
 白骨の楢の枯木をデッサンす
 しろしろと霜強き日の楢の幹
 枯蔓に谷川の音韻きけり
 桐の木の冬日と睦みある上枝
 水楢の高々黄葉仰ぎけり
 落葉の時雨梢を渡る音暫し
 ばさと落ち天狗の団扇めく落葉
 南平山 平家埋蔵金伝説
 黄葉せり平家の黄金埋もる山
 道迷ふ朴の朽葉の幽界に
 楢山の枯れ日向朝日受け
 葉脈に強霜の頭つ朴落葉
 大椀を伏せし容に枯木山
 湯煙も枯山色をして出湯
 落葉道吾が足音を聞くばかり

さくさくと走り根ひそむ落葉みち
落葉みち続き煙草火どうしよう
落葉みち温泉（ゆ）にゐるここちまだ続
く

出湯出て空つ風背に受けゆけり
枯尾花漂ひ初めぬ落人村
山茶花の白し自決の世は絶えて
茸採りいやになるほど落葉踏み
温泉駅前の楓の冬紅葉
日光にととう着きぬ冬紅葉
投函の小銭ひやつく共同湯
湯の宿のロビーの鉢の猩々木
鶴鴿のつつつつ霜の岩畳
霜の日の下野新聞ひろげたり
霜を置く屋根のいちめん出湯の里
前山のぽかぽか黄葉共同湯
踏みごち愉しみながら落葉みち
編みシューズ落葉の匂ひかきたてて
林間の風に落葉の一二転
枯尾花のすれっからしの穂先見よ
枯草のうち伏すさまもありと
枯木山夕日が外れ俄寒む
共同湯木戸開け着膨れ婆ぬつと
撥のごと落葉降るなり落人村
寄生木にぐるり榭山枯れ始む
光芒を放ちつつ昏れ枯木山
枯木風日に三便のバス待てり
露天湯の首の上なる枯木空
夕日差いま枯山の八合目
枯山の出湯名付けて薬研の湯
夕鴉にすつと湯ぼてり引きにけり
温泉（ゆ）が好きで落葉の頃の出湯巡り
共同湯屋根の落葉の分厚かり
樺の果穂これから山に雪が降る
盤台餅竹串に枯れ及びみて
黒土の畝沿ひからまつ落葉せり
ずんぐりと榭の前山枯れ一色
枯山の頭が見え山の共同湯
枯山を歩き来し身の湯に痺れ

共同湯戸口開ければ枯木風
アミフクロ・ホウキ茸等売られけり
一枚ベラ味噌ベラ造り山枯れどき
榭山毛櫛の落葉や落人村歩く
この枯木その枯木にも寄生木が
山毛櫛枯葉山の日差しに背を丸め
山の出湯じんじん沁みる枯木どき
露天湯の岩場の蔭に冬草生ふ
露天湯の落葉の側に身を沈め
露天湯に木の葉共々浮かびをり
舞上がるここち山枯れどきの温泉（ゆ）
に

湯煙の翩翩冬雲の団々
湧水の音の何處かで山毛櫛枯木
涸れ川を挟み二つの露天風呂
枯るる身に熱湯をこそ山の出湯
露天風呂冬の河原の風を入れ
枯尾花いっぽん昏るる空ありぬ
舞い込める山の落葉と露天湯に
露天湯のあふれこぼるる湯と落葉
またぎ村前山も枯れ急ぎをり
冬菜干す山家薪を山と積み
前山を一望にせり枯木風
葉形に覚えのありて通草蔓
匂ひつく枯山を背に一軒宿
蔦黄葉一二三と駆けのぼる
枯山をはたと羽音の発ちゆける
いのこずち汝と何時より道連れか
がまづみの消え入りそうに霜置く実
枯れ蔓のざんばら髪も落人村
枯蔓の幾筋混迷深めけり
拾ひ上ぐ紅葉の中の艶（あで）紅葉
枯蔓の横暴極まりなき立木
観音堂櫛落葉に埋もる道
前山に向ひ冬菜を洗ひをり
舞茸のうづくまりある鼠色
枯蔓の根の断ち切られ断末魔
枯蔓の末路を晒す川つぶち
林間を覗き込み云ふ谿の雪

前山の雪を指さし山人は
枯蔓の幹に食い込む莫迦力
熊四手の冬芽の側に枯るる果穂
犬の踏む櫛落葉の音ぬくげ
向ひ嶺に初雪を見ぬ椎茸櫛
崖下の川沿ひ日陰の枯木谿
一つ木に集ふ鳥と柿の数
柿の木を発ちて鶉柿の木へ
強霜の早朝バスに乗り山中
日が落ちるとどんどん落ちるおけさ柿
柿の木から柿の木へ鶉飛翔中
ずんぐりの発電パイプ山もみぢ
残菊の色を譲りて霜のいろ
残菊にうつすら霜のいろ載れり
村中の霜の道来て共同湯
村人のわいわい霜の共同湯
山の出湯霜にこはばる身をほぐす
強霜に湯煙山の生活あり
とんがれる雑木冬芽に霜降りて
冬靄のわきあいあいの川景色
霜の橋旭当れば旭橋
せきれいの霜の色して岩畳
霜降りて枯木枯蔓枯るる山
せきれいの腹より白きけさの霜
小学校見下ろす檜の枯木山
枯木道肩より湯冷めしたりけり
共同湯霜にしばれし身を沈め
着膨れ婆身ぐるみ脱いで共同湯
いただいて落葉の匂ふ共同湯
他所者の厚着もこもこ共同湯
またぎ村強霜の日の射し込める
強霜の一村朝日差し込める
霜解けの湯気と外湯の湯煙と
上々に紅葉仕上がり龍王峽

みのこづちとところでこれから何處へ行こ

日々鈍る足を鍛えにどんぐり山

むかご落つ人目届かぬ所かな

吾一人ゆく路があり花八つ手

この方が面白さうな蓼咲く路

気を変へてこの径とりぬみのこづち

伊達に齡とる亀ならず平泳ぎ

古い母と軽く一ぜん鴟の昼

さざんくわのくわつと散る日でありにけり

髪刈つてせいせい菊の節句かな

滝見茶屋紅葉とつくにおはりぬし

お代わりは言うに及ばずとろろ飯

朝餉とる最中に鴟の一さわぎ

荒鴟は野次馬根性そそる鳥

鴨池を発たんとやっさもつさして

肝腎の菊の葉霜げて仕舞ひけり

遠出しぬ木々が色づき鴟啼くから

写真屋の写真早々七五三

口走る我に驚く夜の秋

鴟よりもハキハキともの言えよ君

玄冬の直言ちよつと筆が外れ

むつつりと楠の枝にゐて雨の鴟

この彩の菊殖やさなか土いじり

観面に置肥え効きぬシクラメン

白粉花は花期といふもの度外視し

凡百の白粉花ながなが咲かす家

努力論

鴟日和ルビを頼りに露伴読む

冬めくや支那蕎麦の上の鳴門巻

濁り酒入つていますか酒屋さん

便り書く釣瓶落としを引き込みて

とりとめもなく秋簾掛けて置く

気後れのして花咲かす山茶花も

年寄の脂欲しくて秋刀魚焼く

イち尽くす後の祭りの山茶花に

懐手する吾が見ゆ庭日向

初鴟に身を貫かれ本を読む

自転車が踏みつけゆきぬ楓（フウ）落葉

首筋の辺りへすつと落葉風

煉瓦路落葉の散らかり始めかな

支那蕎麦の支那竹いろの落葉舞ふ

支那蕎麦屋出でて落葉の転ぶ街

支那蕎麦が恋しや街の黄落期

落葉風巻いて自転車駈け去りぬ

支那蕎麦の胡椒に風邪も吹き飛ぶか

支那蕎麦の割箸サクと割れば冬

とろろ飯腹が覚えてゐたりけり

眼鏡掛け確かむ果して石露なりし

爛熱し当節流行らぬこと云ふな

弁解をするなと鴟のいふごとし

浅漬や毀誉褒貶の世に遠く

冬瓜の見当付かぬ味を召せ

一繋がり石露の天鴟の天

石露の咲く辺りに石露が咲き好日

霜降といへば波駈く安房洲崎

霜降と云はるゝこゑを耳にせり

ぼつねんと石露一日が過ぎつつあり

火の性の石榴ひやびや雨弾く

冬に入る金魚を覗くもう一度

けふ金魚に餌やつたかと懐手

化粧ふ山家に愚図愚図してゐては

あつちの山こつちの山と紅葉せり

日系五世マウイ島より紅葉見に

浜木綿の花を意外な處でみる

妻

検査結果遊走腎とは菊の花

アフガンにテロ前庭にサルビア咲く

月半ば過ぎて芙蓉の花じまひ

儂ごと吹っ切るやうに石露咲けり

霜降と投げ出すやうに云ふ言葉

けん玉の腰を屈めて冬に入る

目に見えぬ檻の中にて日向ぼこ

駆け足で来て駆け足で去る紅葉

うまの合ふ夫婦となりてとろろ飯

すぐ人のせいにする癖ずんぐり鴟

初鴟を聴くに自ずと腕組みす

鶏頭は枯れアフガンの消耗戦

清貧の世を遙かにす女貞

冬めくもの蓮根のサクサク感

啜るたび爺むさくなるころろ飯

躰から脂が抜けて木の葉髪

てんこ盛りとろろ飯などごめんです

眼に入れて痛くなき青ねこじやらし

先づざっとこんな程度の宮紅葉

途中雨にあひて鴨の句考えゆく

電話にて菊花展など問い合わせ

一っ走りして本借りに柿日和

上の牛蒡が下の牛蒡に何やらいふ

新牛蒡どちの雑談牛蒡語で

自然薯の涅槃像とは面白し

横たはる様は涅槃の自然生(じねんじょう)

蘆苞に涅槃し給ふ自然生

山茶花のはらりはらりと薄曇り

湯呑みの湯冷めてをりしか冬隣

探し物屑籠も見て冬隣

山茶花に雑音拾ふラジオかな

蔦紅葉赤くならんと精一杯

この程度の彩合いがよし梅紅葉

かまつかの燃え出すアフガン聖戦下

頃合いの櫛もみぢの彩と見ぬ

もう一寸増しな色欲し杜紅葉

程々の色合い櫛黄葉せり

赤鳥居漆紅葉に負けまじく

石露一茎二茎三茎末だ苔

公園の紅葉どいつもパツとせぬ

仕方なく白粉花咲くといふ風情

露帯びてうぶと云はうか泥茗荷

鴟啼いて遠出をそそる日曜日

逗子市役所

横這いを得意としたる蔦紅葉

全館を覆ふに間あり蔦紅葉

朝寒やまたあべこべに下着着て

雀来よ鴟来よ鶉の実ふんだんに

欠席に○付す葉書十一月

零余子ほくと囁めば中年茲にあり

義理欠くまま十一月のこゑをきく

油揚げ零余子抓みて旅気分

厠花白犬齧てふを挿す

草の絮壊れずにより峡夕冷え

けふひどく冷え込み鴟の曇み啼き

家居長しところは紅葉山に跳び

畑向う国府津の海の鯨日和

花すすき国府津の海の魚(とと)光り

山北 洒水の滝

御殿場線山北で降り紅葉狩り

山北町段々畑の唐辛子

鬼柚子のドタンと落ちて泥だらけ

蔓ものの通草もひさぐ滝見茶屋

この奥に滝あり零余子零る径

滝水で滝るる珈琲水自慢

滝水に穿たる磐減りもせず

滝の前一団去って又一団

岩伝ひしやらんしやらんと女滝落つ

雄滝とは別にゆっくり下る滝

頭の裡のもやもや払ふ滝つ風

滝壺の韻きに和して散る木の葉

正面の男滝を容れて眼鏡澄む

大滝を見つつ頬張るにぎり飯

又求む零余子よくよく縁があり

精一杯雑木紅葉は日を浴みて

足柄の櫛紅葉は神寂びて

そこに見ゆ富士傾けて案山子翁

ハイカーのリュックずんずん紅葉谿

後頭部その上に滝起ち上がる

気をつけをして見る滝にあらねども

七節虫の正体見たりこの枯枝

振り返り振り返り見る滝なりき

貧相な顔して滝の辺を離る

奔放は滝の放てる音にこそ

胸元の釦外して滝をみる

褒めことば呑み込んで滝落つるなり

滝音に我が身裂かれてまつぷたつ

滝研一山は早や化粧ふべく

一文字滝に跨る女郎蜘蛛
滝の前平常心といふ言葉
滝に相対す気合いのごときもの
木の葉吹き飛ぶよ足柄山伝ひ
磴沿ひに吹き飛ばりくる落葉風
隼人瓜風も冷たくなつて来ぬ
鬼柚子は夕日まみれの顰め面
落花生烟より洩るる虫のこゑ
足柄の鴉がつつく柿坊主
どんぐりを踏みて足柄山日和
鬼柚子のさてその香り鼻に当て
鬼柚子の香りといふをふむふむと
捌けたる芒に逢へる足柄路
轉りのごときもの聴き滝の前
鬼柚子が他所訝る峽の昼
川端を駆けて夕日の芒波
芒波打ってこれより下り路
口開けて通草の痴呆仄明り
秋の蜂みさうな山家無音の畑
茸刈りとそこで岐れぬ麓みち
秋興の音立つる水たてぬ水
日本の嫁菜見直す河原みち
寄（やどりぎ）自然休暇村
摘み足らぬ秋草顔に描いてある
朝晩の冷え込み強し柿紅葉
コスモスの一花一花を空に置く
コスモスに展け絵本のごとき景
ころ柿に峽の夕日が滑り込む
野草摘み中に見知りの秋くさも
錦秋の磐起こせる白瀬波
秋水の翳りを帯びて峽を出づ
流水の韻きを帯びて水引草
ゑのこ草日の焦げ具合いろいろに
ゐのこづちズボンの裾の右左
遊歩道目元ぱっちり嫁菜かな
川澄めりざりがに捕りの少年に
嫁菜冷ゆ川はこれより暮れんとす
花びらの並びよるしき嫁菜かな

迎りゆく嫁菜嫁菜の河原みち
又一つ日陰に入りぬ茸山
鋏挙げ沢蟹威嚇するつもり
鶴鴿の発つや羽裏の白瀬いろ
暗色の鶏頭峽は暮れんとす
ゐのこづち一つ抓んで仔細みる
川音の暮れて高鳴るお茶の花
溝萩の荅は蕎麦のまた従姉妹
コスモスや軽く息つきのぼる坂
捌けたる人のごとくに芒枯れ
触るなよそれゐのこづち止めておけ
秋草のこれは棘あり遠慮しぬ
秋草の長きは長く摘み揃え
急がねば日が暮れちまふ芒原
摘み損ねア痛！ママコノシリヌグイ
ゐのこづち家包のごと持ち帰る
道草もいとこ秋草摘み止めず
柿すっかりもがれし空のたたずまひ
踏み込んでこれは一際濃き嫁菜
村人の河原で焚ける茸汁
茸汁焚ける薪に山の音
草叢の中の窪みの秋の水
妻の歩幅わたしの歩幅草の花
けふは大分歩いたとおもふ草の花
川音の近づき離れ芒みち
秋草を摘める長短取り混ぜて
秋草の一つ一つに妻のこゑ
鶴巻温泉 弘法の湯
丹沢の紅葉偲びつ浴ぶ出湯
取り外しきく蜥蜴の尾置いてゆく
蟻穴を這ひ出づ我も我もかな
死ぬ順にふっと並べり初詣
アロハ着てトニー谷のさいざんす
ジんクスなど云ふ齡でなし新茶汲む

自画像

昭和生れ冬来て冬の魚つつく
わが骨肉昭和の魚に生まれ
骨肉に生まれ替れり冬の魚
昭和生れ旨しと冬の魚喰うて
これ煮れば冬が近づく焼豆腐
冬のおぶ茶碗持つ掌にほのぼのと
曜日聞くことが口ぐせ鴟の日々
正月用干柿作り始まり
赤のままやがて大きな月出でむ
ピーマンのやうにむくれて距離置く妻
自然薯播る妻は大佛坐りして
月の出の月に背景あり大き
鴟それをゆうたらあかん止めておけ
はて菓飲みしか小春の物忘れ
自然薯は長寿の菓之ある哉
師走妻算盤はじく眼をしたり
極月の財布の紐を締めどうし
後の月もどきの月が家裏より
買物の帰りに見て来し月のこと
生牡蠣に酒が弾んでもう一本
生牡蠣が酒を追っかけ喉通る
自然薯着く赭土山の産となり
職無しに月は移りて物入り月
この彩に安んじ梅の紅葉せり
つまらなき色して梅のみぢ了ゆ
さるすべりはつかに残す葉数かな
寿ぎの墨の光を載せ賀状
柿の木へのうへうとイつ十二月
空ら風にぶらつく梅の葉数かな
深海の何見て来たか金目鯛
師走てふ物入り月が目の前に
大きな顔して出づ師走の菓代
円覚寺 お風入れ
お風入れ時宗寄進の莊園図
伝開山着用法衣お風入れ
夕鴟のこゑの一撃さざんかに

三十棒鴟も喰らへり坐禅堂
禅林の冬雲動く潦
蔓もみぢ吹かるゝが見ゆ坐禅堂
打ちつけてめりこむ魚板紅葉寺
坐禅堂上を冬雲肅々と
塔頭の十月桜のほほんと
閻王のお裁きの景お風入れ
ヒステリー鴟にもありて畳み啼き
禅寺へ遊びに冬の街雀
お風入れ富士見西行手かざす図
方丈を大きく使ひお風入れ
お風入れ一間一間に守居僧
お風入れ柿渋いろの阿羅漢図
お風入れ丸山応挙は虎が得手
堂畳一段高くお風入れ
額草の籠字真つ黒お風入れ
お風入れ縮れ胸毛の阿羅漢図
風入れの絵図の地獄の責め道具
お風入れ明日は我が身の地獄絵図
お風入れ一間四面の十王図
虫干しの木瘤のごとき阿羅漢図
お風入れご坊控える堂の隅
鎌倉の流行（はやり）厨子佛お風入れ
守り僧の火桶抱えるお風入れ
水仙の葉が隆々と冬館
水仙の蒼持ち初む一葉叢
山内の端の末寺鴟を聞く
鉦いろの蝶の離るゝ石菫の花
塔頭の唐金いろの郁子八つ
塔頭へ一縷の径花八つ手
禅林に荒凡夫めく楓（フウ）黄葉
鳥居より落葉次々駈け出せり
空ら風の通り抜けゆく大鳥居
歩の弾む街の黄落日和かな
朔日の鴟はすかいに二階堂
ぽちやぽちやの黄菊見目よく丈高く
鴟日和間違いなしの鎌倉路
落葉踏む音聞きたくて段葛

街路樹に雀の群るゝ黄落期
眼鏡拭き浄めて拝観文化の日
小鳥来るせきれいな色の美術館
降り出せば雨の山茶花気遣へる

山麓駅造花紅葉も酎に
路上ライブ秋風に唄攫はれつ
窓があり指文字をかく露けしや

横浜 早朝
曙光の川面の鴨のシルエット
曙光の川面に金の鴨撒ける
暁紅の一川鴨の着いてをり
川に鴨横浜の朝動き出す

秩父
バスツアーの番茶サービス紅葉狩
長瀬の川原紅葉と山紅葉

見えて来て秋の秩父の桑つ株
中背の秩父の山の浅紅葉
桑黄葉いろの秩父の日中ゆく
裏山の栗黄葉して菓子処
秋興の菓子圃栗助てふ店に
栗助の番茶も秋の深むいろ
トコトンと秩父太織柿日和
桑瘤に秩父の秋の深まるよ
桑黄葉秩父札所は四散して
河原石いよいよ白く草紅葉
芋茎干し一戸一戸の庭日向

秩父八番札所 西膳寺
紅葉遊山往きに立寄る札所寺
正面の山紅葉して撫佛
昼月に瞑想のいろ秋明菊
臙脂濃く菊は思索を深む昼
銀杏の匂ふ八番札所墓地
ぼけ封じ三尊に山もみづるよ
もみづらんつもり札所の唐金樋
さる御人

ぼけ封じ肌着購う紅葉寺
おびんづるさまに前山紅葉して
木の実降るぼっくりさんの寺日向
零余子あらかた落ちて仕舞ひぬぼっくり寺
難しき貌して武甲山（ぶこう）干柿に
豆柿の落つるに任せぼっくり寺
札所はもう目と鼻のさき柿日和
柿の成る札所寺より札所寺
吊し柿戻る軒に生々し
札所巡り浅き紅葉に濃き紅葉

大血川溪谷 日光山 太陽寺
紅葉狩り手拭いっぼん首に掛け
朴落葉して霊山の谿涸らす
朴葉落つ霊場の磴一步づつ
ご霊場長柄も添えて栃落葉
太幹を舐めて焔（ほむら）の蔦紅葉
葉をくるり巻きて経巻めく落葉
下山して人里いろの柿紅葉
堂暗に赭顔の閻魔紅葉寺
霊場の朴葉あらかた間引かれて
雑木紅葉謂はば中庸てふ色に
手を組んでひとり頷く紅葉冷え
霊場の雑木紅葉の中の櫃
物見遊山雑木紅葉に囃されて
霊場の紅葉ここに点しゆく
扇ぎつつバスに持ち込む朴落葉
大血川もみぢの出来にこゑを吞む
でかしたる山の紅葉にたたづめる
山紅葉見惚れて佇てば手足冷え

中津川溪谷
紅葉褒むモダン・グレート・ワンダフル
ありたけの讃辞投げかく崖紅葉
大岩に水回り込む黄葉谿
踏み出せる一步を軽く黄葉山
溪流の巨岩止むる散紅葉
一搔の爪の露けさ土竜の死
もみぢ季薄目を開けてもぐらの死

川の気に触れて始まる谿もみぢ
日が射して半日村の柿と墓地
山黄葉煌々目から鱗落つ
山水の音はきはきと谿紅葉

雁坂峠

千尋の谷あり底は紅葉して
山伝ひ雁坂峠に夕冷え来

甲府

もう昏るるぶだう黄葉のぶだう村
鶏頭のどきんとする色もう日暮れ
日暮道どきんとするよな蕎麦の茎

首筋の辺りがすうと冬立つ日
立冬の夜風に何か倒る音
立冬の朝の茶柱すいと立つ
人の言気にしてゐては木の葉髪
古風なる小面美人郁子の実は
立冬の翌日翌々日も雨
藜の木へ駆け込むやうに雨の鵓
横睨みして翔び去れり雨の鵓
かう雨が続けば鵓もつらからう
一段と冷え込み鵓の血気かな
鵓の尾と覚しきものが玻璃の端に
庭搏つて立冬過ぎの雨ありぬ
アナウンサーけふ立冬と前置きし
秋も末どうするつもりかたつむり
自選とは由々し朝鵓けたたまし
宮紅葉老い木若木の雑居して
山茶花のかうなる羽目に昨夜のかぜ
婆さまの大事歩きや石露日和
石露の花一瓣欠けて仕舞ひけり
あぢさゐの葉を這ふ秋のかたつむり
くわりん酒を漬けるといふから梯子出す
吊るされて未だ生々し鄙の柿
向ひ山浅き紅葉に撫佛
肌着替ふ埃の見ゆる石露日和
中年には中年の冬服のいろ
立冬のてのひら嗅げばにほふなり
雲脂吹いて机辺の整理冬日向
雲脂吹いてもう一仕事賀状書き
どすんと入り今朝暖房の試し焚き
脂粉の香ほのとよぎれる酉の市
佃煮を買うて戻れり酉の市
挿絵めく小屋建て連ね酉の市
当節の女はりきるおかめ市
客引きの女はりきる酉の市
一の酉客の出足もまあまあで
別嬪の巫女侍らせてお酉さま
風吹いて今夜は冷えさう一の酉

凧一号今夜あたりに吹くといふ
早きものけふは立冬手をこする
立冬の朝の肌着をすばやく替ゆ
景気よき風に押されて一の酉
酉の市すれ違ひざま脂粉の香
焼鳥の煙がもくもく酉の市
酉の市帰りは例の佃煮屋
水商売風のをんなが熊手昇く
お手頃の熊手は店のとつつきに
辻辻に警官の立つ酉の市
風の日の提灯躍る酉の市
おかめ市夜風ぶつかる小屋庇
酉の市社長といはれ男照れ
熊手選る男に鬘肩の小屋があり
熊手買う人を立見の人の群れ
みなとみらい二丁目で見るとも
クリスマス景気よくても悪くとも
鎌倉を帽子が歩く文化の日
葉を飛ばし櫂は冬のたたずまひ
朔日の透きとほる雨さざんかに
鰯が店頭に出て冬駆け足
鰯の唐揚げかりりと冬の音
全て我が骨肉となる冬の魚
間食にモンキーバナナ冬籠
顔揃ひ冬の雨夜の茶碗蒸し
煤払さあこれからが一仕事
煤の日の紙やすりかけ錆取りす
午前中金魚に日向ぼこさせて
これは観たことある映画煤籠
食卓を机替りに師走妻
茶碗蒸し腹に行火を入るごと
初寝覚背中合はせに常の妻
報じをり今朝のさむさは真冬なみ
晩酌に年忘れ唄口衝いて
鯉の影凍りつくよな一日来て
龍の玉こはどっこい正念場
肝据えて大事にかかる年の内
飾り南瓜店頭に積みクリスマス

短日の魚籠を覗けば海タナゴ
 カハハギの口をパクパク魚籠の中
 雲を見て初冬の橋のふみごこち
 光量の今やゝ減りて秋夕焼け
 鯊の颯ゆったり据えて魚籠の底
 エイの子が釣られ魚籠底一人占め
 釣人の鯊より寒き眼をしたり
 繋ぎ舟発つては戻る冬鷗
 杭あれば杭へすとんと冬鷗
 釣人の自転車で去る秋夕焼け
 大方の釣果そこそこ鯊日和
 顎髭の選者の菊の詮議かな
 強くなる雨にたまらず鵲去れり
 お隣の主自慢の柿あがれ
 風流を忘れ末枯れゑのこ草
 お酉さまあれこれ祈る銭の音
 参道を鳩の着膨れ歩きかな
 雨やうやく上がる神社の朝黄葉
 身を入れて黄泉路あかりの朝黄葉
 朝寒の首をすくめて宮の鳩
 ゑのころの魂抜けるまで吹かれづめ
 秩父 西膳寺
 やあ紅葉八番札所のぽっくりさん
 六地藏前垂れ替えて紅葉季
 三峯山裏方紅葉の太陽寺
 石榴裂けたはげがたはけ嗤ふごと
 先送りせしこと溜る十二月
 暇つぶし冬の金魚の鉢覗く
 山茶花の崩るる飛行機日和かな
 なりふりのこと妻のいふ菊日和
 勘違ひして仏滅の返り花
 何一つ捨てるもの無し冬机
 孫が来て蟹さぼてんの花つまむ
 鋤焼鍋春菊投入葱投入
 残りものの鋤焼の味霜強し
 サッカー観戦母ら着膨れ鼻族
 サッカー少年球より弾みグラントに
 雨の日の山茶花冷えは厠にも

雨脚の音立て通る落葉みち
 黄葉して頭を詰めし大銀杏
 屋根・立木・植込み鳴らし冬の雨
 くわりんの実数え直して数同じ
 婆跣む萩刈株に掌を当てて
 指当つる刈られし萩の断面に
 鋤焼がご馳走世代玉子割る
 鋤焼のしらたき嫌い葱嫌い
 花八つ手気安く詠めて貧乏性
 ありあはせの上下着込みけふ立冬
 鋤焼鍋肉煮えたかな未だ煮えない
 山茶花のだらだらと雨零す
 八幡さまの落葉駆け出す鳥居より
 猛り鵲雨が一層強くなる
 雨衝いて来しは目白か番なり
 ステーキ食ふ人参甘しポテト甘し
 葱残す私としてはめづらしく
 木樵虫天気は悪い方に向く
 冷え込みのかう強ければ鵲も来ず
 山茶花の壊れ放題テロ止まず
 雨止んで木零の白菊の白
 家居して庭に見るもの今は菊
 庭石の濡れぶりよかり冬のあめ
 手のこんだ咲き方をする蟹さぼてん
 小菊咲く香りの他に綻ぶもの
 白毛（しらが）殖やす鵲がことしも家に来
 て
 山茶花に駄目押し雨降り止まず
 兄弟しかめつらして青写真
 弟に兄貴づらして青写真
 手のこんだ勧誘電話文化の日
 雨ならば海嬴の尻研ぐ兄弟
 雑学の大家露伴の忌の読書
 冬めくもの紅茶の匙を置ける音
 怖れ入る君の一言爛熟し
 それならば云はせて貰おう鼻翁
 晩酌のけふの肴は赤海鼠
 樽柿の今年もやはり会津より
 咲きつぷりよき横丁の冬の薔薇

猿酒俳諧の底踏み破り
小晦日読み継ぐコロンプス航海誌
雲脂とばし大つごもりの原稿紙
鴟去れり机辺の寒さしんしんと
円覚寺 お風入れ
宸筆もものは紙魚の確信犯
皺む柚子若年寄といふ風情
子規居士の日々の呻吟鶏頭花
上根岸の大人（うし）の宅訪ふ鶏頭花
あれこれと評すも菊の門外漢
けたぐりにあつと驚く和歌ノ山
職退いて相撲観戦十両より
武双山相手に相撲させぬ寄り
角力には組み手が肝心俳諧も
立冬初霜あとは初雪くるを待つ
筆立に扇子冬立つ日の机上
糸瓜咲く横ちよに子規のおしまい顔
どぶろくのひんやりと胃に落つる迄
子規の口吻虚子の瞑目秋の暮
濁酒かたへに天下無用の徒
御三方
大根の清（せい）さん水の流れ見て
乗（へい）さんは椿落つるを篤と見て
升（のぼ）さんは別格柿の味も亦
方便の一つに写生鶏頭花
鴟の説く俳諧大所高所より
造花紅葉安売りズツクの履物屋
落葉風今もタクシーセドリツク
厚着には中途半端なさむさかな
着るものに惑へる寒さ加減かな
俄寒装ひてんでんばらばらに
ぐんと冷え今日着るものに大わらわ
珈琲店出れば添ひくる落葉風
未枯れのはつかに緑のこす草
やつと射す日に柀のこゑ挙げて
鈴懸の肌セメントに似て立冬
鈴懸落葉未だ青き葉と錆びし葉と
ぶらり入る百円ショップ日短か
四、五個の実がなりくわりん今年もや

海の日に蜜柑の目鼻まとまりて
身ほとりに本を殖やせるちゃんちゃんこ
花八つ手花の密なり通院日
八つ手咲く考えごとは朝のうち
街路樹の木の葉舞い込むビルの間
鴟来れば鴟詠む片言相隻語もて
光荣とは旭おし戴くくわりん
千成柚子曰く等類何のその
色鳥やこれだけ森のもみづれば
公園の紅葉眺めて風太郎
脇道よりぬつと夜寒のボンネット
セーター着て目が出る陽気大誤算
冬満月最近建ちし家が邪魔
車窓染む茜通勤の昔より
サインポールくるくる師走の理髪店
ポールぐるぐる土耳其に來たよな理髪店
紛争地帯は
石榴に罅入るごと四つに國割れて
噛みしめて地蛸の甘し濁り酒
武蔵丸
冷まじきものに力士の背中の中毛
肌バシと叩き力士の格違ふ
鶴の首つまむがごとく醬油壘
三世代みんなめかして七五三
婆さまの何處を見つめて日向ぼこ
予報あり関東北部初氷
文鎮の鼻の貌夜も更けた
気圧配置朝晩冷えてあたりまえ
仏教國金色の鳶舞はしめて
我が下す素人診断流行風邪
鼻風邪の鼻が詰りて夜半に覚む
あと二度来て内科診療納めかな
衣をとりて暖房ぬくぬく診察室
蓑虫の身ぐるみ脱いで心電図
心電図厚着を脱いで楽にして
先生の話筒抜けシクラメン
皆着膨れて病院を狭くする
患者着膨れ同病なれば皆寧（やす）し
只葉貰ひて戻る落葉みち

診察待つ暖房に目が霞み来し
鴟の問ふ「代表作は」「次回作」
人様の挙げる句が佳し切山椒
本を見て俳句を作る十二月
冬条雲北海道を二分せり
往生にあらず真冬の心電図
脚幾度組み替え着膨れ患者待つ
ひと先づが次回もとなり年越蕎麦
歳末の地下道痴漢の防止ピラ
眼鏡の度直すつもりが賀状書き
短日のすこし狂ひて眼鏡の度
山茶花震ひ物売りの拡声器
日向ぼこめく一年がもう仕舞
つはぶきの雅びいよいよ戻れば
つはぶきの瞳のごとき日陰花
ざっと拭く机上に顕てる冬の塵
一年が直ぐ過ぎ六十男の冬
呼び方も月が替れば冬紅葉
日めくりの月が進みて神楽月
秋の薔薇揚げば愛想（あいそ）振りまける
横濱は縣廳前の落葉の景
位負けせぬ人たのもし龍の玉
六十の駆け出し男日向ぼこ
落葉逃ぐ箒で足で押さえても
花八つ手路地より覗く人目あり
梅もみぢせると云ひてもこの程度
鯨釣の無口なること達磨のごと
もみづると云へども山茱萸この程度
玄冬の櫛の洞に何もなし
稍寒の投函の音聞いて去る
稍寒のセーターに首突っ込みぬ
鼻尖の氷りつきけり月夜道
徒に凍る街路を歩きけり
霜やけを搔きこはす夢覚めにけり
兀として寒夜覚めたる鼻柱
あのやうに鴟は山茱萸の実を盗む
枯蔓の吹かるゝ方へ老子ゆく
ばうとして昼の焚火にあたりゐる
上っぱり重ね読み継ぐ小夜梟

振り返りざまに荒鴟にらみけり
笹鳴のチヽツチヽツと遠ざかる
鶴のごと新聞を見る冬はじめ
樽柿や萎び具合は我が身ほど
年の塵屑に積もらせ俳三昧
菊一鉢玄閑脇に片寄せて
酔狂の俳諧三昧煤の日も
初夢に現るゝマンボウ疊大
それでもや時節外れの切山椒
またきつとよきことあらむ年迎ふ
もうこゑの出ぬ演歌師と年忘れ
言外に我も老いたり冬のおぶ
小考も大考もなく年逝かす
めでたさの盛付大事歳旦吟
慚愧の臍（ほぞ）古びしを守り年逝かす
大好物コケコッコの玉子割る

日はあらぬ方へ布団の蒼ざめる
出あいがしら朝の冷え込み口にする
千布団広げて夫婦二人分
百薬の長に信濃の濁り酒
「喉自慢」筒抜け布団干せる家
木の葉髪して老いの山一合目
日溜りの布団のやうにうちとけて
千布団眺め背伸びを一つする
天つ日に翳うすうすと布団皺
布団皺直して布団干せる妻
千布団冬青空と対ひ合ふ
日が没し始む布団を置き去りに
千布団即ち猫の翁の座
暖房があるからけふも夜更しす
暖房の音が最もあたたかき
三本の櫂の間合七五三
櫂より櫂へあゆむ十二月
鼻風邪の鼻を抜けゆく日もあらん
游々に根付く句作り万年青の実
冬めきぬ櫂のでんと一社
冬薔薇や束の間染まる雲の縁
石露の辺がいちばん布団広ぐには
見定めることあり小春の本を読む
トナカイもサンタも百円シヨップかな
本日の記事何々ぞ朝の鵞
吹かれては萩揺りこぼす花真白
小春日の日はとろとろとして地鳴き
裸木となりて櫂は更によし
月旦や仁義なき世の龍の玉
小夜鼻匂の軽重を問ふ勿れ
黄落期我楽多文庫拾ひ読み
多少冷ゆ朝や常着の三枚着
武道館裏裸木の多士済々
髯剃の充電回る木の葉髪
地を擦りて婆の蹻音石露日和
リハビリの一步休んで冬青空
冬浅き畳にひろぐ肌着類
草色の干されて淡き布団柄

千布団庭の雀に耳をかす
厨よりこゑあり布団取り込めと
佃煮の蝗の脚が鼻に触れ
佃煮の蝗噛みしむ自前の齒
起き伏しの基本は石露に見倣うて
蓮根を噛み砕く音こめかみへ
蓮根の穴を覗けば黄泉路見ゆ
懐旧
花八つ手敵の母艦が潜む庭
ああこれとおもふ柿食み砕く音
唐突に秋の日暮れて犀の尻
暖房の要る日となりぬ朝ご飯
手をこすりつゝ云ふ暖房入れやうか
手をやれば柿のつめたさ椅子の肘
布団取り込んで一ト日の経つおもひ
花八つ手路地住みの冷えかこちけり
千布団誰が許し得て鳥の糞
千布団取り込む素手に鳥の糞
千布団物を抱へることはよき
常着とす手頃なる値のカシミヤを
風邪引いてだうにもならない頭です
鼻風邪を紛らすための根（こん）仕事
木の葉髪とんと冴えない頭を叩き
鼻風邪にどうどう巡りの考えごと
鼻風邪や犬のごとくに寐そべりて
寒雀群れて割り込む常緑樹
弔ひの落葉臭さを持ち込める
歯切れよき汝のもの言ひ寒雀
老楽の愉しきみせて落葉舞ふ
くれなるの心に映ゆる箒草
傍観の我が身重ねぬ舞落葉
断食月（ラマダン）は海の彼方に八つ手咲
き
ファクシミリ遅々と送れり漱石忌
柎や人を評すに言葉揺れ
遅れ来て割り込む鴉の喧嘩腰
掃き了へし広前落葉の新天地
広前の落葉白鳩分け掃くよ

宝前の落葉あらかた櫛の黄
落葉搔櫛をずいと聳えしめ
落葉搔櫛大樹にとりかかる
落葉搔櫛の根っこをガリガリと
神の庭広く落葉を降らしめぬ
今しもや神の雄ごゑに散る紅葉
薄黄葉櫛と桂の取り合はせ
白日に彼の大冬木まどろまむ
町内の紅葉処を一巡り
一口に紅葉と云へど八百姿態
熊手組八幡さまの落葉搔き
落葉搔腰を伸ばして遠ち眺む
落葉搔八幡さまの土硬し
此処掃けばあそこ落葉の舞ひ落つよ
氏子にこゑ懸けて落葉を搔く羽目に
落葉搔石畳より手をつけむ
溜息の数ほど降るよ照黄葉
地をやさしく搏つて紅葉のひとりごと
竹箒持てば寒山落葉焚
落葉吹く風ひとすぢにとほるなり
今落ちし紅葉のまこと鮮しき
散る紅葉神も瞬きたりけり
蔦紅葉くろむらさきを深めたる
先々にパラパラパツパ散る落葉
枇杷の花日陰を出でて日表へ
一吹きに残る黄葉の皆さわぐ
近隣のもみぢ如何なと一巡り
落葉掃く音いそがしく朝始まる
晴れて声高襟白の冬雀
蟹さばてん今年も花をつけぬ鉢
息白く点検朝の消防車
石狐皓と紅葉の裾明り
金沢文庫 称名寺旧伽藍発掘調査
孔子木黄葉弥勒の寺にかな
櫛もみぢ一色二色三色かな
称名寺絵図さながらの紅葉かな
柿いろの称名寺絵図鴟遠音
冬青草根こそぎにして発掘溝

傍らに発掘の泥冬青草
発掘溝冬の雨水澄みにけり
反橋に紅葉の栄ゆる黄昏どき
頭の赤く冬の遺跡の試掘杭
発掘の瓦片染む冬茜
枯草いろ塔発掘の作業服
発掘の泥土山なす冬はじめ
発掘の断面芦根断ち切られ
冬草へ鴉降り立ち黄泉の景
夕紅葉暫し土器いろのそら
滑落といふこと朴の落葉にも
老艶といふもの蔦の紅葉にも
お宮より落葉駈け出し国道へ
银杏・櫛風趣違へて黄の調子（トーン）
蠮螋と日を分け合ふて日向ぼこ
自覚せる運動不足冬の蠅
飽食は冬の蠅にもヤツと発つ
一年がみな冬休み句を能くす
岡惚れの猫に猫蹤く十二月
冬菊の昶りて白際立たす
冬の蠅小石ばかりに止りけり
日の去れる日陰は嫌ひ冬の蠅
濁り酒入荷上京せるごとく
どぶろくのいろの冬月酒買ひに
どぶろくを振れる笑顔も庄助さん
蠮螋と日向ぼこして小半時
濁り酒今年が廻る酔ひ廻る
干布団当る日放してしまひけり
木の葉髪六十過ぎての男の座
凡雀凡鴉来て年の内
一張羅カシミヤセーター来て参拝
万年青の実数えて残る日数ほど
新年号
俳人の諸氏口あけの春の詠（うた）
海牛のやうに生きたし来る年も
煤逃げも小遣錢でゆける内
日向ぼこ年内といふ柵の内

この年を締めくくる顔吾もしたり
うなづいて年の瀬見遣る除夜の闇
寝床よりむくと起き出す今年もや
五段目の記事屋久島の初詣
ほんたうの処濁して椿餅
今年もや句作言葉の砂金堀
口早につじつまあはすごと笹鳴
盃の四海にめぐらす年心
人日の野に出てのんきな写生の徒
楳の一叢を見て煙草買ふ
初句会確かむ紙の裏おもて
楳の老木立派年が立つ

草原を吟遊の徒の宵の虫
下り道蟹の行者と往き合へる

三溪園

短日のバスのおでこが見えて来ぬ
 シクラメン細身は手頃なる値にて
 桜落葉市電走りし街筋に
 本牧の桜紅葉の皆老い木
 麵麴抱ふ本牧びとに日短か
 本牧を歩けば桜落葉の香
 敗荷のはきだめを鷺高歩き
 地にロゼッタ天に春く冬日輪
 冬日輪ロゼッタの葉を八方に
 敗荷の打ち負かされし姿とも
 口ぼそを狙ふかはせみ冬の暮
 聴秋閣前山紅葉尽しけり
 一杖を傍へに眺む紅葉山
 これやこの猪の鹿蝶の紅葉かな
 大樹にして実のなき木斛冬座敷
 改めて妻の冷え性花八つ手
 縣廳前馳すバス銀杏黄葉いろ
 判子屋の朱肉のごとき冬の菊
 桜落葉して界限を錆びつかす
 冬菊の一つ一つに春く日
 こぢんまりした家ばかり冬珊瑚
 水仙の劍葉叢を座敷より
 この山の天狗秘蔵の烏瓜
 仰ぎみる真正面より紅葉山
 紅葉して一壘台目釜の音
 はらからを誘ひ散るなり夕紅葉
 庭先に劍襖の葉すいせん
 散紅葉からくれなゐに水潜る
 烏瓜正面にせる待合なり
 妻もまた気が付いてをり冬ざくら
 それ見よと顎で促す冬ざくら
 妻の指す視線を追へば冬ざくら
 夕鴨の影が影追ふ水のうへ
 心臓のとつくん錦木紅葉かな
 庭園のいつもの順路返り花
 かたまれる鴨を脇見の鴨一団
 尖塔は松の上なる冬ざくら

貴（あて）人のごとく桂の黄葉みる
 水仙の二夕花咲けり背合はせに
 冬鴉射抜く夕日の御神鏡
 池端の芒の身丈三溪邸
 水仙の身丈三寸冬に入る
 瞬いて妻瞬いて冬ざくら
 鴨はもうねむりに就けり葦ほとり
 昼月が夕月となり蒲の絮
 夕凍みの百の鴉を納む森
 冬茜負うて鳥のねぐら山
 水鳥を呑み込む闇がすと降り
 薄闇に紛る水鳥三々五々
 水鳥の幽紋あたり暮れなんと
 身じろぎのはつか水鳥闇籠めに
 昼月のかろさ水鳥泛びをり
 暮れがての紅葉見ながら味噌おでん
 夕影の忍び寄るごと水鳥来
 自転車に夜も降り止まぬ榆落葉
 横濱の市電はここ迄夜の落葉
 横濱の市電走りし街落葉
 千客の目を細め見る古典菊
 ヘッドライトよぎりて消ゆる夜の落葉
 煮え切らぬ我が身を佇たす冬青空
 遣り残すことが溜りていつしか冬
 干布団日和や吾の出番あり
 冬眠を決めかねてをりかたつむり
 生半（なまなか）のくわりんの少し青残す
 日向ぼこ猫は眼つむり面映ゆげ
 錆止めをあかあか塗りて年用意
 数え日の力が入る硝子拭
 晩菊の想ひ巡らす杳かな日々
 鈍色の枝枝冬の日の粗く
 裸木の檉葉騒を懐かしみ
 葉を落とし了へて骨ばるさるすべり
 落葉搔參道沿ひに熊手跡
 境内に氏子搔き寄せ落葉の山
 氏子どち八幡さまの落葉搔
 皆楓落葉紛るゝものの無し

同型の楓紅葉の全しや
潦黄葉の舟を泛べたる
雨水に朝の櫂の木の葉舟
公務員銀杏落葉を踏みしめて
冬草に木の葉いちまい差し込まれ
銀杏落葉いちめに帆の容して
銀杏落葉黄のさざなみの海を航く
晩菊の日の当る花当らぬ花
晩菊の白こそ自適たのしむ花
晩菊は日の在る内の日に温み
晩菊の花もちよくて晴れ続く
冬菊を浄めて雨の上るなり
誕生日ポインセチアを奮発す
柗のあら咲いてゐる日曜日
落葉掃くことめんだうな目つきして
冬兆すスパゲッティの鷹の爪
熱湯にパスタの踊る冬の昼
炭火焼きステーキににく狐いろ
龍の玉よりもまさらむ穹の碧
藪巻の師走日和となりにけり
拝観のころごろに龍の玉
鴟啼くやけさの曇天突上げて
十二月一日昼の物音す
残菊を午の日外れてしまひけり
極月のおもむき常の日差しさえ
散るところ人には見せぬ冬ざくら
残菊を暗め明らかめ空馳す日
半生を稍過ぎてをり枇杷の花
妥協なき冬青空とうち仰ぎ
気丈夫に福井の女も水仙も
豁然と穹展けたる雪吊に
朝のうち残菊よりも頭冴え
月を越す木守くわりん生らせおく
閑日に馴れ親しみて冬珊瑚
あぢさゐに未だ居て冬のかたつむり
冬来ると櫂の聰明楯の鈍（ドン）
毀れやすき詩を胸中に冬の虹
朔日の創一つなき冬青空
薄塩は定年の味ピーナッツ

敗荷の首垂れ詩囊じり貧困に
三葉虫裏返しみる夢始め
鰯大根五つ違いの夫婦にて
巴里祭定番鳩の手法かな
だらだらと雨ふりこぼす枇杷茂み
年忘れ唄は男気しのび酒
銀杏黄葉唄ふは月夜のサンタルチア
隣人の一日退院菊の花
喪中の葉書またもう一年の瀬に
銀杏黄葉八幡さまの石垣に
けふきりの杜の紅葉とけふも見て
日向ぼこするにも何處か気の引けて
閑日の六十男布団干す
何事もゆっくり布団干すことも
年の瀬もゆつくりと来てマイペース
ダブツて買ふ柿やことしも当り年
林檎と柿食べ易ければ僕は柿
老い脛といふには若き柚子湯かな
火男（ひよつとこ）の踊れるごとくとんど
の火
皆枯れてしまへば醜草初景色
鮫鱧の胡乱な眼して年逝かす
尻込みをして凍蝶の世に遅る
冬草の下葉の殊に赤みさし
無駄骨をおる事嫌ひ木の葉髪
生きがひと云へれば云へる牡蠣の意地
駒のごと馳せくる年の手綱とる
巳年の巳年を越さんと穴籠り

三浦岬 城ヶ島

葉を寄せて大根の肩覗きみぬ

大根の葉にちらちらと夕づく日

畝ごとに遅蒔き早撒き春かんらん

あかあかと夕日が落ちぬ大根畑

難面（つれなく）も夕日失ふ大根畑

大根台地夕日大根の葉を染めて

もりもりと大根の肩磯畑に

大根台地暗緑色に昏れそめて

玄冬の渡舟の跡の鉄腐る

海あかり帯びて小さな蜜柑かな

冬日輪大根台地は弧を為して

大根台地葉っぱが眩し眩しとも

大根台地海指しあるく二人連れ

ちかちかと大根の葉と崎の海

青首に取って替られ崎台地

大根や傾く海を前にして

蟹部落家並の間の大根畑

乾びそむ海月を戻す冬の海

冬麗の浜に海月の乾びそむ

島裏の蟹ヶ家二軒金目鯛（きんめ）干す

金目鯛（きんめ）干す終の紅葉の傍らに

フジツボのだし汁沖の寒さいふ

鵜の崖の白と一流木の白

流木の影玄冬の日が巡る

冬日翳一流木と砂の窪

流木に冬麗の砂零しみぬ

波音を離れコート襟を立て

藪椿林寒潮音を断ち

水仙の径はとんびの島山へ

夜又倍子の実に流れくる鳶の笛

磯畑の大根に鳶のこゑ落とす

北風荒ぶ島クロサギもゐるといふ

磯鴨の海より濃ゆき首の瑠璃

磯鴨の襟首瑠璃に礁空

まんぼうの話などして磯日向

礁波冬の海月のどんぶらこ

玄冬の礁をくるむ石蓴搔

滑空の鳶を鳶追ふ冬渚

翔び方の何處かをかしき小春の鵜

鵜の断崖（きりぎし）真白く氷山にも似た

り

ざうざうと枯篠鳴れり鵜の断崖

島の鳶こゑ逆落とし篠枯らす

花アロエ年々衰ふ海の幸

岩窟の上の磯菊日を蒐む

銀鼠の沖を見つめて根釣人

ささくれし島の磐に根釣人

岩礁の磐より凍て根釣人

海猫の本領發揮島の北風

磯菊の汐傷みして黄の名残

冬麗の波吸ひ砂鉄ふむ浜

冬鷗翳を曳きゆく岩畳

短日の瑠璃の磯鴨岩替えて

火の島へ射す日一条石露の花

篠枯るゝ島うち晴れて鳶のこゑ

枯萱を掴み直して磯雀

鵜を宿す崖の水仙首を振り

水仙の道尽きこれより岩畳

篠を搏つ風に水仙香を飛ばす

水仙の咲く島またまた鳶に遭ふ

礁染む石蓴冬潮澄みにけり

島山の枯れくさぐさに鳶の影

アロエ咲く故に真近し蟹部落

冬の潮透けて石蓴のあを極む

冬麗の礁を離る石蓴無し

崎の鳶大根台地を吹かれ飛ぶ

岩礁の石蓴搔すりて冬の潮

うしろより島のとんびに呼ばれけり

冬渚裏返しみぬ海月の檻樓

冬麗の浜ゆくうしろ海猫の嘴

水仙の避けやうもなき潮飛沫

水仙を根こそぎ揺りて島の風

水の色月の色して冬海月

玄冬の海月打ち揚げられ濁る

冬の潮漂着海月に韻さけり

長汀に放り出されし海鼠ども

北鎌倉日陰伝ひに花八つ手
金閣寺青苔でこぼこしてゐたり
十月桜植う水鉢に生る泡
椎の香に黙つてのぼる男坂
芽柳や鉛筆描きのお堀端
柳の芽木橋渡れば城中へ

水鳥となりきる真白盤石に
煤の日の不眠と云へば日の脚早
老けて映る写真眺めて冬籠
風邪抜けず参加は無理とあきらめて
やれやれと云ふてまた年送りけり
小春の茶の間大滝秀治の話術冴え
禿頭の俳優人生くそまじめ
年回顧暴走男役語る
年の瀬の故人に寄りつく心かな
称名寺さまの水鳥見にゆかん
芋虫のやうに丸まり厚衾
日の移る速さにおいてけぼりの鴨
瘤嫌ふ樟と瘤好く冬けやき
晩菊の庭に一彩加えけり
厚着せる吾を見下ろし瘤擗
探し物師走の妻のせいにする
数え日の櫛に瘤の趣向あり
宿題を抱え佇む年の果
裸木の櫛の瘤の在り処かな
忘年会妻にはありて吾になし
氷る池正面にして弥勒寺
落葉して奥ゆきのある寺となる
万両に土の締りて円覚寺
三度目の正直の籤福だるま
忘れゐてと或る日咲けり鉢の蘭
残菊の白をつつみて夜の帳
冬の日に頭（づ）打たれもぐらたたき
う
木の葉髪搔き搔き喋々長電話
蓑虫の蓑温めぬし日の陰る
掠めゆく零下の鳶の氣迫かな

蘭にほふ家相応のシャンデリア
年回顧鴉退治の話など
鷺鴉指呼に火の性水の性
力強く一つ咲きしよ冬の蘭
孫愛（めぐ）しサンタの口髭借りたしよ
玄関を飾りたててはクリスマス
その内が来年となり大つごもり
生前の話となりて鮫鱈鍋
ペンキ塗り直して年のどんづまり
十二月八日の薄きおみおつけ
産土を守るものとして冬けやき
柿の蒂町内の空つながれり
短日の街見通しのきく並木
定年の吾にもサンタ来て図書券
数え日の猫も私も日をよるべ
今みれば莫迦本ばかり煤払ひ
下田稔さん
枇杷の花仰ぎ故人につながれり
義父よりの歳暮の重み酒ならん
お歳暮は酒か包みを振ってみぬ
お歳暮に庄助さんの國の酒
じっくりと会津の酒を熱燗に
孫
ぬひぐるみトナカイを抱きクリスマス
年の瀬は露天湯なんぞ願はくば
残菊に切羽詰まりし雨となる
まろびゆく落葉の音の揃はざる
数え日のつくづくとある猫の髭
数え日の郵便配達ありし音
数え日の日の入る部屋で耳掃除
鴨の陣絶えず何處かが動きをり
夜の鴨に騒（ぞめ）きのありて納りぬ
抜け落ちるものは抜け落ち雑木林
冬麗の風吹く上のそらを見て
炊事了へ一息つけり蜜柑のまへ
露天湯に浸るおもひに日向ぼこ
すぐ陰ってしまふ午の日残菊に
蜜柑置きよいしよと妻の横坐る
冬木の芽のとんがり具合見て家居

裘のをんな鎧を脱ぐやうに
裘皮ブーツにて現るる
予定表空白ばかり年の内
着膨れて達磨のやうになるにはまだ
煤の日の片づけ本の拾ひ読み
煤の日や本の整理のハタキ掛け
短日の街抜けてゆく最短路
片づけもの本を筆頭小つごもり
熱爛はここまでといふ自覚あり
昼月にその香薄れて冬さうび
干蒲団嗅いで三毛猫通り過ぐ
柵のほひを薄めゆける雨
水鳥の直進の向き切り替えて
水鳥に塵なき水の冬座敷
宿木を暗緑に日の暮れて来ぬ
膝小僧冷えて来たれば酒支度
膝小僧こすり独りの濁酒
日暮れ待つ心に鴨の動きなし
水鳥の羽搏ちごたへのある寒暮
ともかくも無心になれやと冬けやき
裸木の無心が心憎き日や
通院の印つけある古曆
褒めやればお調子づいて白鶴鴿
濁酒己れを見舞ふころかな
残菊のその残菊の日暮れかな
熱爛に心をひらく夜の帳
水鳥の睡りに徹す直心（ひたごころ）
動揺の一角ありて鴨の陣
浮寝鳥闇に没すも暗澹と
舗道擦りまろべる落葉夜の底
すつと出るさみどり銀杏温め酒
残菊の昏れ出してよりいきいきと
へべれけの肩組み合ふて年忘れ
暖房を入れたる部屋を一步も出ず
不用意に罷り出づ街氷点下
ひよいと出て街の寒さにうろたへぬ
一休宗純はたまた蠅虎の貌
小つごもり煮物しながら長電話
熱爛にしどろもどろの受け答え

鴨の来る北海道に空知川
一日の途中途中を嗚啼いて
一日が直ぐ暮れちまふ夕の鴟
冬鴟の性急直ぐに暮れちまふ
錦木の紅葉名残りの夕まぐれ
熱爛に俳句を貶すへボ評者
酒酌まん今宵はまして大つごもり
晩酌の始まってゐし大晦日
寝床出てけふの寒さにしゃんとせり
生ひ立ちを見らるゝごとし蒲団穴
温め酒たたみ鯛の焦げを折る
人参を兎のごとくかりかりと
並木もて街を飾りクリスマス
年の尾をずるずると曳き幕閉じぬ
鰯起し雲の荒行始まりぬ
霜柱切り立つそらに水の音
朝っぱらから霽れて銀鼠冬木の芽
一つづゝ堅固に銀の冬木の芽
咲くもののなくなる庭に万年青の實
数え日の庭師の入る高澤家
鮫肝の冷えを胃の腑に納めたる
蠅螂に横を向かれてしまひけり
松前漬先づ人参の歯当りよ
凍てまじく諸星さゆらぎみたりしよ
小つごもり古刹の亀の甲羅干し
小春日の起床は何處か亀に似て
暖房の音の籠ればうとうとす
姫沙羅の冬芽と云ふに領きぬ
端嚙めばうるめ鯛の鼻弾く
さざめきの一刻ありて鴨の闇
膝小僧に北風まとも自転車漕ぐ
凍りつく夜空の星の間合かな
枯れ並木そを吹き抜ける風一筋
天文学者気取りであふぐ冬星座
冬銀河何處ぞとあふぐ千鳥足
凍て星の皆はつらつと光投ぐ
数え日の訪ふ客にいちいち出で
けじめなくずるずると年の瀬へ
当月もいつしか半ばちゃんちゃんこ

宿木の三つぐらいは冬櫛

朝漬噛む夫婦二人の朝の音

吹き溜り夜の落葉のささくれて

返り花点り居りしがいつか消え

このわたに自愛を深め温め酒

寒がりの家鴨といふは聞かざりき

置炬燵家居続けば根が生えて

宿木より授かる一句懐手

水上に伸ぶ枯枝に薄日差

雪女郎決して詠まぬ男なり

たうねずみもちの実霜を被りけり

朝雀来啼くねずみのこまくらに

煤逃げの先は小遣い銭の内

雪吊の金沢の空おもふべし

数え日の枝枝の輝り晴れがまし

小つごもり昼食（ちゅうじき）味噌漬け鳥

賊焙り

冬の日に透けてウツボの天日干し

初お目見え天気予報の雪だるま

青空が広がり鰯の日本海

べつたらの香を曳き市の雑踏に

小つごもり毛布を足して海老寝かな

雪女郎亦詠む嘘つき野郎かな

元朝の持薬の水を汲み来たり

冬来れば持薬飲む水旨くなり

まだ減らぬ持薬の数や年立てり

夢始め途中駄目だと思ったり

元日のしづけさ戻る大王松

初景色彩るものに大王松

度忘れを揶揄さる年の始まれり

我が咎と気づき気ままずき初笑

初山河大いに羽を伸ばしけり

年の神一步大きく跨ぎけり

年賀状一枚俳縁繋ぎけり

はじめから無理して走る初寝覚

初夢の後半しかと覚えをり

札幌の祭の映像氷点下

着慣れたる常着一着初旦

短冊切り人參年の春らしく

噛み当てる慈姑の芯のほろ苦き

山妻と同床異夢の夢始め

がさばってずらり真つ赤な福だるま

初空と先づは俳句の詠み始め

金沢文庫

逆風をなほゆく鴨の俠客めく
なすがまゝ吹かるる鴨の身の軽さ
日陰またよろしと鴨の蹲る
おのづから一団を為し鴨すすむ
ぽっかりと泛かびて鴨と昼の月
家鴨群る日向つづきに鴨のゐて
鳩人を面白さうに見る
鴨向ふ先は水皺頭つ彼方
鳥ごゑの鋭さ増せり冬椿
北条実時
執権の墓の落葉を踏めば憂（かつ）
名刹の日を素通しに枯楷樹
五輪塔横の地を搏ち落つばき
一門の祖の墓覆ふ厚落葉
大寺の日暮れ早めて鴨羽搏ち
鴨の頭のひよこひよこ散歩日和かな
がやがやと鴨ゐて池を凍らせず
鴨向ふ真つ向の人呼びたれば
一団のしんがりを追ふ鴨の鈍（どん）
年末
裸木を見下ろしゆきて走り根まで
裸木と云ふは地を這ふ走り根まで
産土を統ぶる櫛に年の寄る
宿木の翔び立ちさうな冬青空
繊細な上枝をみせて冬けやき
水仙の生ふる砂地のぬくぬくと
山梔子の実に鳥ごゑの一頻り
くちなしの実を染め西に傾く日
松立ててひとり呟くこれでよし
宿木を見つけしこゑの高弾み
宿木は冬の櫛の三本目
賑やかに年越す鴨組家鴨組
あかあかと平橋反橋冬紅葉
宿木の青張る穹を日の渉る
小春日に呟きさうな沙羅細枝
冬草の光沢遠く風流れ

水仙の芽のあり砂上に首もたぐ
冬さうび穹へこころの展がれり
柿の蒂いつしか年も押詰り
柿の蒂つまらなさうに日を浴みて
柿の蒂ほどの悔ある年なりき
柿の蒂夕日外れてしまひけり
昼月のあんなところに枇杷の花
寒さうにするから足が速くなる
枯くわりん老樹とことん冷えにけり
一切は苞につつまれ冬木の芽
よんどころなき由ありて柘榴の実
枯れざまのこれは土佐水木の冬芽
知り合ひの四方山話実南天
店頭に正月花が出揃ひぬ
正月花抱え女の声掛けゆく
奮発し上（じょう）の正月花を買ふ
年の瀬の定年族の散髪屋
散髪の分け方問はる木の葉髪
木の葉髪ちよんと抓まれ剪られけり
髪刈ってせいせいと年越さんかな
極月のバリカンひやと当てられぬ
申し訳程度の髪の刈り納め
散髪や羊のやうにおとなしく
年の瀬の髪刈りうなじさみしくす
極月の理容鏡にてかてか顔
木の葉髪刈られし嵩を確かめて
年の瀬の散髪待つ間の漫画本
歳の市山と積まるる根菜類
唇を紫にして蓮根掘り
年の瀬の裏番組も鍋料理
屑籠に冬至の朝日剩りけり
数え日の欠伸の猫に見返さる
数え日を菜の咲く安房に遊びけり
大玻璃戸磨きにかかる師走妻
蓑虫の首伸ばす空澎湃と
蓑虫の無聊の処し方てふを真似
歳の市海鞘に手を出す出来心
鉢飼の冬の金魚の数かぞふ
凧に削ぎ落とされし街の景

大冬木定型といふ詩のかたち
白菜干すおてんとさんに尻向けて
白菜干す即ち巨き尻を干す
日向ぼこ猫に去られてしまひけり
鋤焼がご馳走世代イヴ迎ふ
冬晴れの舗道は鏡光りして
極月のポケットに拳交差点
枝ばかりなんきんはぜの実落ちて無し
月並みは打破打破と鳴響ける
寒八ツ目泣きを入れても釜茹に
寒八ツ目吸ひ付くものを選ばざり
寒八ツ目吸ひ付きながら目をぐるり
泥臭き息吐き蓮根掘り了る
鉄鍋のでんと据えられ鋤焼や
鋤焼の白滝翁煮えしといふ
鋤焼の煮詰るがよきもう一献
鋤焼を漁り尽くして鍋残る
水仙の咲く辺りまでひた進む
多忙とはいつしか疎遠木の葉髪
北風の隙見計らひ街に出づ
晦日（つごもり）の今さらめきし冬菜の日
未練なき年の背ナ押し逝かせけり
年の火に膝から徐々に温もれり
もう其処を動かぬ冬のかたつむり
左から右へながれて寒すずめ
徐徐に徐徐に退り冬至の日の日
すざましく枯るる公孫樹は日を忘れ
聖夜
今宵煮るべし国光といふ林檎
年々の枯瘤擲通りみち
ぽっかりと浮く寒鯉の長寿相
鏡なす空に枯木の物狂ひ
ガサ市のけふを強気に吹く風よ
住職の佛ひきて寒の鯉
小つごもり濡縁に日の剩りけり
喜多方ラーメンずと啜れば北風ひゅう
いま暮れて今年が終り枯木星
冬定る杭の廻りの水澄みて
冬そうび凜と自力で咲ける花

一と跳ねをしたる寒鯉濃くなれり
門松の右に据ふ松是とせん
飾り了ふ松に風起ちそめにけり
松立てて家に背筋の入りにつけり
数え日の日を失へる椰古木
咲き始む白のひたむき水仙花
煤払ひ一息入れぬ漫画本
脱帽といふ他はなき櫛の瘤
木の葉髪とどのつまりは年経たり
煤払ひ済みて晩酌地場の蝦蛄
詠み流すがごとくに年を逝かせり
冬瓜の青息吐息月旦評
仰がるゝ宿木は木を選びけり
出番なき古事類苑の煤払ひ
本抜きしあとのぽっかり凍て書棚
力みなき冬の櫛と見れば見ゆ
年の湯に脂蓄（た）む身を浮かせけり
一切が丸見えとなる万年青の実
家の中やたら歩けりちやんちやんこ
鉛筆削りぞりぞりぞりと十二月
万年青の実よりも大きな吹きごと
三平汁箸をねぶつて了りけり
ぎくしゃくとしたまま年を逝かせけり
数え日や彼岸此岸の人の数
次の木の宿木が目をひきにくる
裸木の走り根の先ここまでよ
退職後あれよあれよと年の翔ぶ
なまけもの一年分の煤払
冬暖の体内時計狂いしか
裸木の胴を叩いて鳴らしけり
とんでもなき綿鼻の胸の内
師系とは干柿のやうあとひいて
見落としの一つや二つ退る年
人参は赤き湯気立てけんちん汁
健康のバランスとれとけんちん汁
人参は健康のため妻のため
冬そうび虚空を統べて気韻さへ
冬至湯の湯気まうまうを纏ひ出づ
番台に活けあり湯屋の正月花

すててこは今も健在浮世風呂
ツウカアの父ちゃん母ちゃん冬至湯屋
冬至風呂上面うめたぐらいでは
熱き湯に痒み覚えぬ冬至風呂
河内山宗俊もどきと年の湯に
年の塵流しに來たり千代ノ湯に
目の粗き脱衣籠年詰りたり
ひと眺め除夜の富嶽の煤け顔
六郎の街灯点る冬の暮
犬のごと鼻がよく利く冬の暮
湯屋出でし襟足ぞくと冬の月
冬月に影細かきは櫂の枝
締切日大つごもりと別にあり
正月
年神の栖となせる楯の洞
せきれいの尾をうち振れば來る年か
年立てる空万全を期すごとし
鶯の実の数ほど福が来ればいい
初湯浴ぶ熱きは痒きことと知る
鏡餅古老のごとく祀られて
凡景に瘤櫂佇つ初景色
一本の鉛筆携え初吟行
福笑始つてをり襖越し
初夢に逸り山ほどある話
正月の風に当りに出で三步
門松の皆小振りなるこの界限
初雀羽音を残し消えてをり
ぶつつける力が余る寒玉子
寒玉子茶碗の縁をまじまじと
鯉じつと力蓄ふ十二月
鳴る風と枯木ばかりの景に馴れ
枯木の遠ち枯木が見えてクリスマス
日向ぼこ猫も私も眼をつぶり
後をひく干柿二つ目にかかる
枯篠の中より家鴨やぶからぼう
櫂のひた照る家を訪ひぬ
嘴太鴉（はしぶと）と明日の見えない年迎
ふ

風走り小笹が鳴れり四方の春
初湯して考えごとは何だっけ
一月の鯉より振り落とさるゝ夢
その先がだう伸びてゆく恵方道
歳旦吟活字大きく胸を張り
歳旦吟凡にて十把ひとからげ
どれもこれも古くて立派歳旦吟
歳旦吟碌でもなきもの筆を折れ
耄碌の歳旦吟に目をつぶり
回顧詠ばかりに尽きぬ歳旦吟
襟正す歳旦吟が見あたらす
たつぷりと初湯使ひて妻あがる
初湯出し妻のそのまま厨に佇つ
初湯浴ぶからすの行水始めなり
鶯の尾を残して年の立ちにけり
初ものの筑波をつつむ八重霞
今しがた松立て了へし家日暮れ
松立てし家誇らかに闇に入る
くちなしの実の証しなる狐いろ
くちなしの実にとんとんと日の墜ちて
テロ年
年の瀬の何と云つても紐育
その他
一羽より千羽の羽搏ち渡り鳴
号令に右向け右のチューリップ
垣間見し花火の空のみみづ腫れ
内灘
五郎島産の諸掘りすぼすぼと
べにあづま・鳴門金時どれにしよ
恋猫の事了ふあとのすまし顔
琴風の髻（たぶさ）ばらりと大角力
自力にて雨を降らせる牛蛙
雨降嶺の合図を待てりはたた神
ペンにキャップ本に本棚寒戻り
演じたる句とすぐ判る目借時
一荒れは何の劍幕葛ざくら

